

---

# 炉心融解 -the another melt down-

te-ta

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

炉心融解 - the another melt down -

### 【Zコード】

Z8318U

### 【作者名】

te-ta

### 【あらすじ】

「それでも君はここに戻つてこられた。感謝しなきやね、この星にいる皆さんに」

これは私、鏡音凜という一人の人間の「この世界」での最後の五年の話。そこで私は多くのものを失い、絶望し、最後には私自身も失うははずだった。

かつて彼女がそうしたように。

irona氏のボーカロイド楽曲、炉心融解を題材にし、限界まで妄想した限りなく一次に近い一次創作。一つの解釈の終着点、無限

にあるうちの一つの解。凛は「この世界」で何を失い、何を願つたのか？物語の鍵を握る、高次元核融合炉の正体とは？

この物語は、炉心融解に対するあくまで私個人の解釈です。読んでいただいてから、改めて炉心融解の世界に思いをはせるきっかけにしていただけたら幸いです。残酷な描写タグは、直接的なものはありませんが、死人が出ない訳ではないのでつけておくことにしました。

## プロローグ

私の周りに広がるのは、巨大な筒状の炉と、そこから放たれる眩しい光。

重水素、リチウム、はたまたヘリウム<sup>3</sup>。この光がどんな物質から放たれているかは知らない。代わりにこの光がおそらく数秒後には私を確実に消し去るであろう事は、火を見るよりも明らかだ。けれど、それらは私の目には全く入っていなかつた。

私の頭の中で二十年にも満たない短い人生の、だからこそ一つが鮮やかな記憶が浮かんでは消えていったのだ。それこそ、太陽の輝きにも劣らぬほど鮮明に。

私は苦笑を漏らした。こんな人間のこんな人生でも、このような状況ではここまで映えるらしい。都合のいいことだ。

その中で最も強く浮かんだ記憶は、一人の少年の姿だつた。この街に、いや、この三次元の空間と一次元の時間軸が形作るこの世界のどこにも存在しない少年の。

そしてこれから私が作り直そうとしているこの空間にも、彼はない。たとえそれが人類を一世紀近く支えていて、数秒後には人類を滅亡させるかもしれない物としても、彼を取り戻すことなどできない。

そう思つたとき、唐突に疑問が湧いてきた。

私は誰の為に、こんなことをやつていいんだろう。

私の記憶に浮かぶ、あの少年は誰だったんだろう。

この世界を誰よりも思つた少年は、どうしてこの世界に存在しないのだろう。

私はどうして、この疑問の答えを持つていないのでだろう。

・・・・・。

高次元核融合炉は、その存在が消える直前に、私と彼女が願った  
思いを一つだけ叶えた。

「君はもう覚えていないかも知れないけれど、そうして君はここに  
戻ってきたんだよ。ほんとうに心配したんだからね。僕が尊敬する  
の人と同じことを、君はやろうとしたんだからさ。  
それでも君はここに戻ってこられた。感謝しなきゃね、この星にい  
る皆さん。」

## 一、分断

まるで巨人でも住んでいるのではないかと思わせるほど巨大なビル群。そしてそれらが放つ異様なほど華やかな街明かり。

私はその暴力的な光に目を細め、夜の街を歩いていた。

もし一世紀前の人々がこの光景を目の当たりにしたら、ほぼ間違いなく猛抗議するだろう、なんて無駄遣いをしているんだ、って。

そう、今私が住んでいる「この世界」は、はたから見れば大変な無駄使いをしている。

なぜそんなことが可能かと言うと、人類はその生活形態によらず、どんなに贅沢をしてお釣りが来るようなエネルギー源を獲得していったからだ。

人類はいつだつて何かに頼つて生きてきた。紀元前では奴隸や動物に、産業革命以降では石炭、石油、そして原子力、というふうに、歴史が続くにつれてそれらは増えていく一方だつた。

しかしそれらは世界人口が百億人まで増えた時、もはや人類を支えることはできなくなり、むしろそれらを元にした科学技術は地球上の環境を良くしているとは言えなかつた。

二十一世紀以降、肥大した世界人口とは裏腹に、人類が生きていくるような場所はどんどん限られていき、それらをめぐつて紛争が頻発した。そしてその時によく使われていた戦術が、今では人類最大の汚点とされている「国家動力破壊作戦」だ。

その名の通りその国家の主要なエネルギー源を直接叩くといった単純かつ究極的な戦術だつたけれど、問題はその動力源が、原子力発電所ばかりなことだつた。

二十一世紀初頭では環境問題により遠からず人類の住める場所が無くなるということが分かつて、環境に負荷を掛けないエネルギー源の開発が急がれた。しかし、自然エネルギーの利用は効率的とはほとんど言えなくて、結局人類は原子力エネルギーに頼りきつてい

たのだ。

広場の噴水を見た。その上には「聖域」をかたどつたエンブレム。普通に考えれば、その原子力発電所に景気よく大陸弾道ミサイルをぶち込んでしまえば、その場所は人類が生きていける場所では無くなることは誰にでも予想できる。紛争の目的はそこにいる人たちを殺して自分たちがそこにとつて代わることなのに、そんなことをしてしまっては元も子もない。しかし、紛争を起こしていた者達はもはや共同体とも呼べないバラバラに瓦解した国家だつたものだつたし、第一、彼らの頭は相当煮え切つていた。環境に押しつぶされる恐怖から来る脅迫観念によつて。

そうして、世界中の原子力発電所に様々なブツが投げ込まれることになる。あるところではクラスター爆弾、またあるところではPGが、はたまた大陸間弾道ミサイルが・・・という風にその手段は驚くほど多彩で、私は装甲を分厚く固めた日本製トラクターで自爆特攻したという冗談のような話を半ば信じてしたりする。

そのようにブツが投げ込まれて制御不能に陥つた原子力発電所は、決まって「あの雲」を上げることとなつた。炉心溶融という言葉が流行語よりも使われていた時代は、他には無かつただろう。

少なくとも私が学んだ歴史の教科書は当時の様子をそんな風に物語ついている。

光に溢れる川の対岸を見た。電波塔を飾る、三つの欠けた扇と一つの丸。

斯くして、人類は生存可能なスペースを、速やかに減らしていく。大地には無数のクレーターが刻まれ、森は放射線によつて枯れ果て、その奥からはこれまで隠されていた未知のウイルスが人類を脅かした。

その光景を見て、人類はようやく自分達が絶滅の危機に瀕していることを知つた。同時に気づくのが遅すぎたことも含めて。

しかしそれでは人類の歴史は終わらなかつた。それから人類は大変な努力をし、様々な発明、発見を繰り返す。

その人類の「本気」が生み出したのが、今の私達の世界を支えている動力。「高次元核融合炉」と呼ばれる、途方もなく巨大なエネルギー源だった。

核融合炉を作ることは、それまでも検討され続けてきたことだつたけれど、いささか地球上で扱うにはエネルギーが馬鹿みたいに巨大で、仮にコントロールできたとしても、その本質は太陽そのものなのだから、地球上に置いて安全な訳がない。だったら宇宙空間に作るのはどうかという案も出されたけれど、宇宙から膨大なエネルギーを送ることは効率的に問題があつて、実現できたとしても大したエネルギーにはならないことはすぐに分かつた。

そこで注目されたのが当時エネルギー問題とは無縁とされてきた、いわゆる「高次元」の研究だった。

正直、歴史が得意な私でもここまで来ると、なんだか分からなくなつてくるけれど、どうやらその理論を持つてすれば放射線を抜きにして必要なエネルギーだけ核融合炉から引っ張つてくることができるらしい。

「高次元核融合炉」の設計方法はこうだ、まずなんとかして「この世界」の裏側にもう一つの世界を作り出し、またなんとかしてそこに核融合炉をこしらえる。あとはどうにかしてそこからこっち側の世界にそのエネルギーを持つてくる。

このような馬鹿みたいな無理難題を解決しなければ「高次元核融合炉」は作ることができないのだけれど、当時の科学者達は大真面目になつてこの問題を研究した。

そうして「この世界」には「高次元核融合炉」が作られた。と言つてもそれは「この世界」には存在してないのだけれど、それこそが研究が成功した証であるらしい。

とにかくこうして私が住んでいる世界がこのように存在しているのだ。

ちなみにこれら的内容はまさに一般常識で、中学校で真面目に歴史の授業を受けていたのなら誰でも知っている。女子高生である私が

そんなことも知らないなんて言つたら、世間から非難の目を浴びせられること間違いなしだ。

高次元核融合炉の仕組み以外は。

ふと、交差点のこれまた巨大な時計台を見上げると、その針は午前二時を指していた。

なぜ女子高生である私がこんな時間に町を出歩いているかと言つと、なんてことは無い。私が不眠症患者だつたからで、けつこうな頻度で夜歩きをしていたのだ。

最近では医者からもらつた睡眠薬もあまり効かなくなつてきた。なぜ違う薬をもらおうとしないのかは、今のところ秘密。

「おい、凜、また夜歩きしてるとか？」

突然後ろから声を掛けられたけれど、それが聞きなれた声だつたので私は驚かない。

「あんたも同じようなもんでしょ、魁人」

私が振り返ると、古めかしクラシックギターを持つて呆れた表情を浮かべた魁人がいた。

「俺はこれを聞いてくれる人を探してゐるんだ。俺はいいけどおまえみたいな女の子がこんな時間にほつつき歩いてたら、夜歩きしていふ他のろくでなしどもに何されるか分かんないぜ？」

まったくこの友人は何度言つたら分かるのだろうか？まあ向こうも同じようなことを思つてゐるのは火を見るよりも明らかだけど。

「私が不眠症なのをあんたは知つてゐるでしょ。しかもその理由まで」

魁人はこれを聞いて、若干俯いた。

「確かに廉のことはひどいことだつた。けどな、おまえまで同じ道を辿つちゃだめだ。なんとかして普通の生活に戻れるように努力した方がいい」

努力。そういえば私達はとてもよくこの言葉を聞く。人類が絶滅しかけたあの時代。人類は努力によつて新たなエネルギー源を獲得し、自らが住める環境を立て直したのだ。だから努力をすればできないことは無い、と私達は教わる。少なくとも私の担任教師が努力

「そう思つもならあんたのギターを聞かせてよ。あんたの曲はつまんなくて絶対眠くなるから。電子ギターが主流になつた今じゃ、そんなギターを使う奴なんてどこにもいないし」

「馬鹿にすんじゃねえよ。それよりこんなところで寝てたらおまえ

の安全が保障できねえだろ。最悪レイプされるな」

「あはは、それは勘弁」

大人達が私達に努力しろ努力しろと言う割には、この町には倫理的に堕落した大人が結構な数いる。大概、思春期を迎えるころにそのことに気づく子供達が多くて、私もその一人だつた。気づいてからは、そんな大人になりたくないと思って、努力という言葉に反感を覚えながらもやはり努力をする私みたいなやつと、そんな大人の言うことを聞けるかと不良行為に走るやつの一極化が起きる。そんなことを意識せず、言葉通りに努力をすることはほんの一握りの幸せ者だけ。

「しかたねえな・・・今日は俺がおまえの散歩につきあつてやるよ

「それつて私が目当て、ともとれるわね」

「馬鹿、今の俺には楽器しか見えてねえよ」

そうして私は歩き始める。魁人は黙つて付いてきた、まったくどこまでもおせつかないやつね。

「で、今日の散歩はどこに行くつもりだ? まさか未成年なのに居酒

屋にでも行くつもりじゃねえよな」

「・・・『聖域』に行くつもり」

魁人は虚を突かれたような顔になつた。

「『聖域』? そいつはもの好きだな。まあ海外からの最大の観光地ではあるが・・・どうしてそんなところに行くんだ」

「核融合炉に飛び込んでみたいと思って」

これは半分ぐらい出まかせ。

しかし魁人は信じられないような事を聞いたような表情で私を見

た。これだから魁人をからかうのはやめられない。

「おいおい、そんなこと・・・」

「冗談よ、まさか本気だと思ったワケ？核融合炉に飛び込むなんて、やううとしてもできることじやないわ」

「ちえ、馬鹿にされた気分だ」

そんなことを言つているうちに、いつの間にか私達はその「聖域」の前に来ていた。

三つの欠けた扇と一つの丸。

「こ」は「高次元核融合炉」の丁度裏側に当たる場所。一世紀前ではとてもとても嫌悪されてきた放射性物質を表すマークが、「こ」にはでかでかと書き込まれており、それを囲むように三本の巨大な摩天楼、主に核融合炉からエネルギーを引っ張つて来るための施設が建つていて。

「廉がね・・・言つた言葉だつたのよ」

私がぽつりと言つと、魁人はこちらを向いた。

「核融合炉に飛び込んでみたいて」

「そうか・・・」

しばらくの沈黙。私は、今は亡き私の双子の弟のことを想つた。私が助けることができなかつた廉、私が死に追いやつた廉。

「廉はね、僕達が歴史に刻まれることはないつて言つてたわ、ここまで生きることに困らなくて、前の時代にあまりにも『英雄』が居過ぎて、こ」まで人類が墮落した時代もないって」

魁人は黙つて聞いている。

「それで、僕達が歴史の教科書に載るには、核融合炉に飛び込むぐらいしか無い、できるかできないかはともかく、核融合炉のある高次元空間に押し入つて原子レベルまで分解されるぐらいしないと、歴史は全く僕達に振り向いてくれないって言つてた」

「高次元核融合炉」の仕組のことを教えてくれたのは、廉だつた。私なんかよりもずっとやさしくて、頭がよくて、それゆえ孤独にならざるえなかつた弟。

私の全てだつた鏡音廉。  
かがみねん。

「私の両親の事も、廉の事も、全てが嘘だつたら、本当によかつたのにね」

魁人は何も言わない。

ねえ、私はこれからどう生きていけばいいの？家族も無く、生きていくのに全く困らない「この世界」で、なんの変化も無い世界で生きていくなんて。そんなことなら、核融合炉に飛び込んだ方が百倍マシだ。そうすればきっと不眠症で苦しむこともなく、昔みたいに眠れるんだ。

そんなことを考えながら「聖域」に一步近づいた。

その瞬間、突如として世界が歪んだ。吐き気がする、胃が焼けつくように痛い。それらがあまりにも唐突になだれ込んでいたので私は混乱した。

とにかく落ち着かなきや。

確かに右ポケットに煙草があつたはず・・・ライターも一緒だつた。私は乱暴にそれらを取り出し、火をつけようとした。が、ライターはオイルが切れていた。

最後の望みを失つたような格好の私は、苦痛に耐えかねてその場に倒れ込んだ。

「おい！凛！大丈夫か！」

魁人の声が聞こえる。が、私にはもう魁人の顔は見えていなかつた。その時私に見えていたのは、何処までも広がるような空と海。そして・・・真っ赤な太陽のようなもの。

私がバラバラにされていく。速やかに、音も無く。空は何処までも蒼く、海は何処までも碧い。ああ、このまま私は消えるのだろうか。

「凛！おい！凛！返事しろ！」

私が目を開けたとき、そこには青年の顔。

さすがにもう覚えていなければ、この時私はこう言つたらしい。

「凛つて、誰？」

この言葉を聞いた魁人は、泣きそうな表情で、こう言つた。

「おまえの名前だよ！鏡音かがみねりん凛つていうさ！」

そうして僕の見た「この世界」は、

地上は何処までも明るく、空は何処までも青い。

イヴが禁断の果実を取り、

その身に罪を刻み込んだように、

一人の女性がその罪を背負つた。

イヴの罪でしか人は知恵を手に入れるることは叶わず、

彼女の罪でしか人類は救われなかつた。

## 一、分断（後書き）

ボーカロイド楽曲、炉心融解の一次小説を書いてみました、tea-taと申します。

歌詞の内容やPV、また私たちの身の回りで起こっていることをごちゃまぜにして話を構成していますが、まあこれが私のモラトリアムといったところでしょうか。

というわけで妄想全会でまっすぐに後ろ向きに突っ走っています。短編にするつもりでしたが、現在進行形で伸び続けております、ハグらいまで行くと思うので付き合ってやってくださいませ。念のためですがフィクションですよ。

## 一、贖罪

「どうやら記憶喪失が起きたようですね」

老眼鏡を掛けた医者が僕をまじまじと見つめている。

僕は魁人かいとという青年に無理やり病院に連れてこられ、訳が分から  
ないままいくつか検査を受けさせられた。CTスキャンはもう生涯  
御免だと思ったぐらいだ。

「それにしても奇妙なのは、凛さんの記憶から感情の部分だけ抜け  
落ちている事ですね。人間は感情から記憶を呼び覚ますものですか  
ら、何も思い出せなくなつても不思議ではありませんが・・・ま  
あ生活習慣など体に染みついていることは、覚えていける可能性は十  
分ありますから、実生活には困らないでしょ。

しかし完全に感情だけが抜け落ちているというのは・・・

魁人が心配そうに質問をする。

「記憶は戻るんですか？」

「記憶喪失には大体二つのパターンがあります。一つは認知症や脳  
の外傷記憶障害のように完全に記憶が消えてしまう場合。もう一つ  
は何かのショックにより記憶があつても思い出せなくなつてしまつ  
場合です。しかし凛さんの場合は、どちらにも属さないんです」

「それはどういう・・・」

「さっきも言った通り、記憶から感情だけが抜け落ちているんです。  
海馬には外傷が全くないのに、そこだけ完全に抜け落ちている。こ  
れは何か外からの要因があつたとしか思えません、これは前例が無  
いものですから、戻るかどうかは微妙なところです」

「あ、あと、『聖域』の前で倒れたあと、凛の一人称が変わつてしま  
っているんです、数分前は『私』だったのが『僕』に

医者は唸つた。

「それは記憶喪失の症状の一つでしょう。一気に記憶が欠落してし  
まうと、脳はそれを補填しようとして、その結果性格が変わつてし

まうのです。それに個人の人格は記憶に依るところが大きいですか

ら

それから医者は一呼吸置き。

「それと凜さん、あなたは『エーテル』を使っていたようですね、CT検査でそれらしき痕跡がありましたよ」

「ここで魁人が度肝を抜いたのは言うまでも無い。当時エーテルといえば、コカインと並ぶ薬物乱用の代名詞だった。

「幸いと言つべきか、不思議なことになぜか凜さんの脳だけは薬物による記憶が完全に消え去つてしているのです。

とにかく、凜さんが薬物を使用していたということは、何らかのトラウマを抱えていた可能性もあるでしょう。もつとも、それがこの症状を引き起こしている、という可能性もあるわけですが。まあ記憶自体は完全には消えて無いとはいですから、いつかは記憶が戻ることは十分にあります」

僕はといえば、薬物を使用していたなんてそんなことあったような無かつたような、とにかく実感がなかつた。

「それにしても、おまえがエーテルを使つていたなんてな。ホントだつたら一晩中叱つてもいいぐらいなんだが、当の本人が忘れちまつてるんじゃどうもな」

病院から出てきて、魁人が最初に言つた言葉だった。

「で、夜はすっかり明けちまつたが、家の場所は覚えているのか?」

「多分」

「だつたら早く帰つた方がいい、明日は学校だ」

「そう言つ割にこの青年は僕と同年代に見える。

「あんたも同じ学生だと思うけど」

「つたく記憶喪失になつてもその性格は変わんねえな、言つとくが俺とおまえは同じ学校に通つてゐる。フォローしてやるからとりあ

えず安心しな」

とくに返す言葉も無かつたので、僕は魁人に背中を向けて歩き出した。

そこまで大きくも無いマンションの十三階。1-LDK。どうやら孤児の僕は政府からの生活支援を受けているらしい。部屋でそれらしい書類を見つけた。

それから僕は他にすることも無かつたので部屋を隅から隅まで調べた。

人にはそれぞれ物語がある。これは本棚で見つけた数少ない小説の一文。確かに鏡音凜かがみねりんという人間の物語は、この部屋にしつかりと刻みつけられていて、おかげで夜には僕がどういう人間だったのかが大体分かっていた。部屋にあつた二台のパソコンのうち、一台はロックが掛かっていて見ることはできなかつたけれど、さして問題は無かつた。

部屋が物語る「私」はすんなりと僕の中に入つてくるけど、やはり実感は無い。

それからシャワーを浴びた。鏡を見たときに自分が首輪のアクセサリーを着けていたことに気が付き、外した。それから明日の準備をする。そうしていふうちに大あくびがでて、昨日は一睡もしていないことに気が付いた。

そして僕はベットにもぐりこんだ。棚の上に睡眠薬が置いてあつたけれど、そんなものを使わなくてもすぐに眠れそうだ。

そして朝。

君の首を絞める夢を見てしまった。

なぜ「君」という表現を思いついたのかは分からない。その君といふのは真っ白なワンピースを着た九、十歳ぐらいの少女。僕はその少女の首を絞めていた。僕を言えば憎しみの表情を浮かべるのでなく、ただ泣き出しそうな目で相手の首が苦しそうに跳ねるのを見ていたのだ。

これが元々の僕の記憶なのかは分からない。けれど気になつたのはその場所が何処までも広がるような碧い海だつたことだ。

身支度を始めなければ遅刻してしまいそうな時間だつたので、僕はベッドから起き上がり、着替え始める。

一人暮らしなので、ご飯は自分で作つていたことは分かつていて、やつてみると、なるほどすんなりとできた。冷蔵庫の中に入つていたミカンが何となく気になつたので鞄に入れる。

学校の校門まで行くと、魁人が待つていた。本當におせつかいなやつ。

「あれ、くまが無い、昨日はちゃんと眠れたのか？」

「そ、睡眠薬も必要無かつた」

「そつか・・・一応、先生には一昨日のことは伝えておいたから」そこまで手間を惜しまないとは、どこまでもおせつかいなやつだ。授業自体はほとんど問題が無かつた。やはりすんなりと内容が僕の中に落ち込んでいく。

放課後、別のクラスにいた女子一人が僕に駆け寄つてきた。

「凛！魁人から聞いたよ『聖域』前で倒れて記憶喪失になつたって、大丈夫なの？」

確かに話しかけてきたのが亞北あきたねるかで、その後ろにいるのが巡音瑠香めぐじね。

「僕はこのとおり元氣、魁人のおせつかいが事態を大きくしてくるような気もするけど」

「確かに、あの魁人の様子には、凛は学校に行けないんじゃないかな  
と思うぐらい心配させられたわ」

「があきれた口調で安心したような表情を見せる。

「それにしてもその声で『僕』だなんて、なんだか廉を思い出しち  
ゃうね」

今度は瑠香が口を開いた。鏡音廉。どうやら僕の双子の弟だった  
少年。小学生の頃から僕と廉と瑠香は仲良しだつたらしい。

「ねえ、記憶喪失になるってどんな感じ？私達もあなたの力にな  
たいの」

瑠香が真剣に聞いてきたので、僕はすぐし考え込んだ。

「なんていうか・・・みんなの言う『私』と、僕が別人に感じられ  
るの。だけど身に覚えの無いはずなのに知っていることがあつたり、  
なんだか不思議な感じ。魁人に医者に連れて行かれた時は、こんな  
症状は初めてだつて言われた」

「・・・そつか、私なりにも調べてみるね」

その日から僕と魁人と？と瑠香で、ほぼ毎日会つて記憶喪失をど  
う直すかが話し合われた。けれど解決策は一向に出す仕舞い。

一時期、僕の一人称を私に戻そうという試みがなされたけど、ど  
うやつても一人称は僕になつてしまふのだった。

「まあ、女の子なのに一人称が『僕』つて、ちょっとキャラが立つ  
しね・・・」

しまいには、？がそんなことを言う始末だった。

いつしかみんな僕の記憶を戻すことを諦めていた。別に生活に困  
る訳でもないし、もうすでに今の僕自身がみんなの中に定着してし  
まつたのだ。

生きていくのに全く困らない日常。何の変化も無い日常。  
それらが唐突に終わりを告げたのが高校一年の夏休み前。その日

も特に変わったことも無く、瑠香と一緒に校門を出た時だった。

それは一瞬で数人の生徒をなぎ倒し、道路のガードレールに突っ込んだ。がんつ、とものすごい音がして僕の耳はそれに釘づけになつた。

車だ。

それがあまりにも唐突だったので僕はそうとしか認識できなかつた。その瞬間、車が人間に突っ込んだなんてことは考えられなかつたのだ。

その車から一人の男が出てきた。その男がナイフを持っているのを見て、僕は唐突に何が起こつてているか理解した。

この男は誤つて突つ込んだんじゃない、誰かに危害を加えるために車を突つ込ませたのだ。そしてさらに多くの人に危害を加えようとしている。

そんな考えがよぎると同時に、獲物を探す肉食獣のような眼で回りを見るこの男に、僕は強い恐怖を覚えた。けれど僕はそこに釘づけになつてしまつたように足を動かすことができず、逃げることができなかつた。そんな僕を最初の「獲物」ととらえたのか、男がこちらにやつてきた。

しかしその歩みが唐突に止まる。その顔は紛れもなく驚愕を物語つていた。

「瑠香……」

男が驚愕の表情をして瑠香を呼んだように、瑠香も驚愕した様子になつた。

「あなたは……」

「そうか……そういうことか……」

男はそうつぶやくと、ぞつとするよつた笑い声を響かせた。

「なんてこつた！今までおれはこの社会があれの邪魔ばかりすると思つていたのにさ！たまたまた来た場所に『復讐』すべき相手がいるなんてな！」

男の支離滅裂な発言に対し、瑠香が口を開いた。

「どうして・・・」こんなことを・・・」

それを聞いた男はさも嬉しそうな様子で答えた。

「どうしてって？それはな、おまえを含めてこの世界があれを裏切ったからだ！あの時おれが街のチンピラのやつらとやりあつたつてだけで、どんな会社もおれを雇おうとしなくなつた。それどころか冷めた目でおれを見やがつた！おまえもだ！おまえだけは何があつても理解してくれると思つてたのに！おまえだけはおれを愛してくれていたのに！」

僕は男の言つたことに関しても大いに混乱した。男の言つていることが正しければ、この男は瑠香の元彼かなにかだ。瑠香・・・知らない間に男なんか・・・。

「だからおれはこの社会に復讐してやろうと思つた！おれを無視してきた社会にな！おれはこれを成し遂げて社会におれを振り向かせてやるんだ、粗末にしてきたものがどんな仕返しをするか分からせてやるんだよ！おまえを殺すことでな！」

そう言つて男はナイフを構えて突進してきた。瑠香は石になってしまったようにその場から動けずにいる。僕は反射的に瑠香をかばつた。

「凜つ！」

僕は瑠香の叫び声で、自分がやつたことがどうこう結果を生むかを意識し、それを裏付けるように、ナイフが刺さると同時に腹に焼けつくような痛みが走つた。・・・が、刺されていたのは腕、しかも、その痛みはすぐに消えてしまった。

何ががおかしい。

痛みはすぐに消えた。目の前には男の驚愕した表情。見ると、男の持つていたナイフが「手」と「無くなつて」いた。しかも男の腕からは血が出ておらず、最初から手など無かつたかのようにそこには当然顔の「手首」があつた。そして僕と言えば、なんの傷も負つていない。

すぐに近くにいた男子生徒達によつて男は捕まえられ、警察に連

行された。僕と瑠香も当事者ということで聴取を受けた。

男の手が無くなつたことに関して、警察は大いに頭を悩ませたが、どちらにせよ正当防衛の域は出ないということで、僕は事件当時の状況を説明させられただけだった。

幸いというべきか、死者はいなかつたのだ。

「凛、ありがとう、凛がかばつてくれなかつたら私、どうなつてたか・・・」

先に出てきていた瑠香が感謝の言葉を口にした。

「ごめんね、巻き込んじゃつて。元はといえば私のせいね」

瑠香はそう言うが、それは違う気がする。

「そんなことないよ、悪いのは全部あの男のせい、瑠香があいつを振つたのは正解だったと思つよ」

「・・・ありがとう」

「それにしても瑠香に男がいたなんて、驚きね」

我ながらあんな事件のあとによくこんなことが言えたと思つたが、瑠香は本当に申し訳なさそうな顔をして話しだした。

「うん・・・。彼とは、一度一年前に出会つたの。最初はすぐ優しい人で、彼と一緒にいるだけでとつとも楽しかつた。だけど・・・」

「辛いんだつたら、話さなくともいいのよ?」

瑠香のあまりにも悲壮な表情に、僕はそんな言葉を口にした。けれど瑠香は首を振つてそれを否定する。

「うん。話させて。私が凛を巻き込んじゃつたから・・・話せなあや。」

あれは私と彼が街を歩いてる時のことだつたわ。チンピラみたいなやつらにちよつと絡まれたの、ちよつとバカにするような感じの言葉を投げかけられる程度だつたんだけど、彼はそれにすぐ怒つた。私は彼にここから離れよつて言つて、止めようとしたんだけど、彼は止まらなかつた。

彼は格闘技を習つてたの。それで、一人いたチンピラに思いつ

り殴りかかって、一人に大けがをさせてしました。

命には関わらなかつたから、罰金と慰謝料はそこまで高くなくて、あつさりと示談が成立したわ。だけど、彼は前科が付いてしまつた。・・。

彼が変わつてしまつたのはその時からなの。彼は夜間学校に通つてて、企業に就ける資格を持つていたんだけど、そのせいなどでこそも受け入れてもらえなくなつて・・・それから彼は社会に對して敵意を持つようになつたわ。街のギャングみたいな人たちと関係を持つてたみたいだし・・・。

そんな彼が私は怖くなつた。それで、別れようつて言つたの。そしたら、彼は突然泣き出して、訳の分からぬことを叫びだして・・・正直とても恐ろしかつた。

今にしてみれば、その時私は彼に止めを刺してしまつたんじやないかつて思うの。そこで私は背中を向けて逃げてしまつた。彼と向き合つことができなかつた！

多分、あの時彼を助けられるのは私だけだつた。私がちゃんと彼に向き合つて、彼を目覚めさせてあげなきゃいけなかつた。なのに私は・・・！

瑠香が感情の流れに耐え切れずに泣き出した。私は話の内容と瑠香の様子の両方に困惑していた。まるでテレビドラマのよつな不幸な話。しかも最悪な事に、瑠香はそれを自分自身の罪だと思つてゐるのだ。

「でも、凛のおかげで彼は誰も殺さずに済んだわ。それだけは救いだつたと思うし、凛には彼の分も感謝しなきやと思う。ありがとう。彼はまだ普通の生活に戻れるはず。あなたのおかげだわ」

そう言つて瑠香は笑顔になつた。

「いいのよ。でも瑠香にそんなことがあつたなんて、僕全然気づかなかつたな。そういうところは流石、瑠香「お姉さま」つてところね。ちょっと尊敬しちゃつた」

歯がゆくなつた僕はそんなことを言つて茶化したけれど、瑠香は

驚いたような表情を見せた。

「あれ？ その言い回し。確か廉が言つてた・・・」

「え、そう？」

しばらく沈黙が流れる。やがて瑠香がためらいがちに口を開いた。

「あの、凜。あのとき凜はあいつに何をしたの？」

訝しむように聞かれて僕はどう答えるべきか迷つた。

「・・・僕にも分からぬ。でも、あいつに刺された時、僕が記憶を失つた時と同じ痛みが走つたの。もしかしたらそのことと関係があるのかも知れない・・・」

「そつか・・・。何だつたんだろうね」

またしばらくの沈黙。

「ねえ瑠香。廉みたいに高次元核融合炉のことに詳しい人を知らない？ もしかしたら何か分かるかもしれないわ」

男の手が「消える」。そんな奇天烈怪奇な出来事を起こすのは私が記憶を失つた場所、高次元核融合炉しかない。なんだかそんな予感がした。

それを聞いた瑠香が少し考え込む。

「氷山清輝・・・そういえば私の父さんの知り合いで、核融合炉の制御施設の職員をやつていた人がいたわ、今は大学の教授をやつているはずだけど、夏休み中なら会いに行けるかも」

それからの毎日、僕はどこかのテレビ局かもわからないマスコミに、追い回される羽目になつた。それも当然といえば当然で、科学技術の発達でほとんどのことが明らかにされているこの社会では、そのような謎は格好のネタだつたのだ。

自分でも全く分からぬことを聞かれまくつて、謎自体は一向に解決しない、テレビで自分の姿が報道されるたびに、僕は暗澹たる気持ちになつた。

僕が瑠香にそう言つと、瑠香はちょっといたずらな笑みを浮かべた。

「それは大変だつたね、今日何か分かると良いけど・・・」

そう、今日は目的の大学の学校公開の日。

「早く行こう！」

僕は待ちきれない気持ちで、氷山清輝のいる研究室まで急いだ。目的の研究室の扉には「高次元科」と書かれていた。中に入ると優しそうな笑顔を浮かべた眼鏡の男の人が出迎えてくれた。

「これはこれは、鏡音凜さんですね、はじめてまして、僕は氷山清輝。と、こつちは久しぶり、巡音瑠香さん。お父さんは元気かな？」

「はい、おかげさまで。あの、今日は高次元核融合炉の事について教えていただきたいのですが」

「まあ座つて。それにしてもあれのことか、ずいぶんと勤勉だね。どうして知りたいんだい？」

そこで僕はこれまでの経緯を説明した。なにしろ起こつたこと自体が奇天烈なことなのでつつかえつつかえの説明になつてしまつたけれど、この教授が真剣な表情をして聞いてくれるのが救いだつた。「なるほど、本当にその男の手が消えてしまったのなら、その手は別次元へ飛んで行つてしまつたということも考えられるね

「飛んで行つた？」

「そう、その男に刺された時、君は『聖域』で倒れた時と同じ感覚に襲われたのだろう？もしかしたら君の存在自体が、こことは少しずれたところにあるのかもしれない」

瑠香の訳が分からぬといつた表情。

「どういうことですか？」

「高次元核融合炉が、この世界には存在しない事は知つてゐるね、それと同じようなことが、きみの体にも起こつてゐるかもしれないんだ。例えれば、君は宇宙船のハッチにいて、男の手とナイフはそこに突つ込んだ。そうしたらハッチが開いてしまつて、宇宙空間に放り出されてしまった。君は丁度ハッチにつかまつていたから、なん

ともなかつた。といつたところだね。

つまり、今の君はこの世界と別の世界の狭間にいるのかもしだい。もしかしたら、記憶はその別の世界に流れ出てしまつたということもあるつうる「む」ともあつた。

普通に聞いたら、そんなことありえないって一蹴されるような論だ。けれど、別次元があることを他でもないこの世界の主要エネルギーが証明してしまつていてるのだから反論のしようが無い。

高次元核融合炉は確かに存在しているのだから。

それにしても、ずっと知りたかったことがこうまであつたりと分かつてしまつと、なんだか拍子抜け。難解な事件の解答編が難解であるとは限らないようだ。

「でも、なんで凛にそんなことが起きたんでしょう？」

「それは分からぬ。まあこれは仮説に過ぎないわけだし、もつと他に理由があるのかも知れないね。これから眞実が明かされることを祈るよ」

少なくとも、僕にとつてはこれだけで十分だつた。僕達はお礼を言つて大学を後にした。

と、いうわけで僕は今から消えるかも知れない。

日記にそう記して僕は自分の部屋の窓の外を見る。さつき試しにナイフで指を切ろうとしてみたけれど、指は切れずナイフの方が指の厚さの分消えて、真つ二つになつた。あの教授が言つ通り、別の世界に飛ばされたのだろう。そんなんじや刃物失格ね、とひとりごちた。

もし今僕がここから飛び降りたら、なにが起くるのだろうか、まさか地面を削りとつて地球の中心まで行つてしまつるのだろうか。それはそれで興味深いけれど、それよりも僕はもう一つの可能性を見つけた。

僕自身がもう一つの世界に行ってしまうこと。

そこで記憶を取り戻せたなら万々歳。もしそれができなくても今僕に起こっていることがはっきりするのだ。

十三階から飛び降りるのはけつこう、といつかかなり怖い。僕はつかの間この方法を選んだことを後悔したけれど、今のところ他の方法が思いつかないので仕方ない。

僕は迷いを振りきるように首を振って、窓の外へ飛び出した。一瞬重力が無くなつたようになつたけれど、すぐに地面が迫ってきて、内臓がせりあつてくるような恐怖感を覚える。僕は咄嗟に目をつぶつた。

地面に着かない。。。

目を開けると、どこまでも広がる空と海。そしてそこには「私」がいた、今の僕と寸分違わぬ。

当然ながら、僕は困惑した。「私」はそこにいるけど、どうすれば。。。

その時、その「私」が手を伸ばしたのを見て、僕は何をすればいいか理解した。

思い切つて「私」の前に降り立ち、その手を握った。

しかしその瞬間、僕がバラバラにされていくのが分かつた。これは。。。

「嫌だ！ 消えたくない！」

僕がそう言うのも空しく、僕と私はここから姿を消した。あるのはどこまでも広がる蒼い空と、碧い海のみ。しかしそれらが長く続くことは無かつた。

その瞬間、私の中に開いた僕という穴が塞がれたのだから。

その時、なぜ私が僕という一人称を使ったのか、はっきりとわかつた。

答えは「僕」の無くした、私の記憶の中にあった。

空はどこまでも蒼く、

海はどこまでも碧い。

けれどそれは長く続くことは無かつた。

続くはずがなかつた。

それを成したのは一人の人間でしかなかつたのだから。

## 一、贖罪（後書き）

te-taです。実は一話を投稿した時点で四話まで書き終わってあります。なので四話まではスムーズに投稿できますがそつからはどうなるか女神のみぞ知るつてところです。

### 三、喪失

「おーい！廉！」

私とよく似た顔の男の子が振り返る。

「そんなに大きな声を出さなくとも聞こえるよ」

廉はもう十四歳だというのにまだ声変わりをしてなくて、たまに声だけだと私と間違われることもしばしば。私の声が少し男の子っぽいっていうことも原因ではある。けれど、そんな廉の声を私は気にいつっている。きっと大人になつたら、すぐくかっこいい声になるにちがいない。

「ねえ、今日もあの核融合炉の話、聞かせてよ！」

私と一緒にいた美玖がそうせがむ。初音美玖。私と同じクラスの女の子。彼女は数少ない廉の話し相手だった。廉に話しかけるときの美玖はすごく楽しそう。

「ええっと、この前は核融合炉が高次元空間にあるところまでは話したよね。今日は、どうやって作ったかってことを話そうか。実は、その高次元空間は偶然できたものだつたんだよ・・・。

自分達が住んでいる世界とは別の所にもう一つの世界を作る。その無理難題に科学者たちは果敢に挑みかかつたけれど、やっぱりそこにはエネルギーの問題が付きまとつた。当然、空間を別の場所から作りだす事には膨大なエネルギーが必要なんだ。それも宇宙を滅亡させるぐらいのエネルギーが。

だけど宇宙の始まりがそうであつたように、その空間はぼろつと生まれた。それはどの科学者も予想できなかつたことだつたんだ。どうして空間が出来てしまつたのかは分からぬ。けれど、とにかく空間は出来てしまつた。

ここで科学者達はまた頭を悩ませることになるんだ。出来た空間の不可解さがその原因で、一言で言えば次元が違つたんだ。その空間はまさに混沌としていて、何とかそこに物質を送り込んでもその瞬

間にバラバラになつてしまつ。そこはどう考へても核融合炉の建設場所には向かない場所だつた。

そこで新たな仮説を立てた科学者がいた。その空間が混沌としているのは、その空間がかなり高い次元を持つてゐるからじゃないか。だったらそれを利用してやればいいっていうのが彼女の言い分だつた

「彼女？その科学者は女性だつたの？」

不意に、美玖が割つて入つた。

「そう、僕が知るなかで最も気高い女性。ローラ・ゼロ。教科書にはほとんど女性の科学者の名前は載つて無いけど、あの時代にはそうやつて活躍した女性もいっぱいいたんだよ。

それで彼女はこう言つた。私達がこうやつてこの次元に存在していられるのだから、私達の意思を反映する次元があつてもいいんじゃないかって。

もちろん他の科学者達はその話を一蹴した、だけど彼女は本気でそれを信じていたんだ。だから彼女は身を持つてそれを証明して見せた

廉は大袈裟に一呼吸おいてみせた。

「彼女は、その空間に物質を送り込む装置を使って、自らその空間に飛び込んだんだ。

その結果。その空間には空と海、そして太陽が出来た。その太陽は細長い形をしていて、その周りには僕達の世界にエネルギーを送り込む装置が形作られた。まるで世界創生のようだつたと、他の科学者は口を揃えて言つたそうだよ。

けれど嘆かわしいことに、命を犠牲にしたつていうのに彼女の功績は今ではほとんど知られていない。その論はあまりにも非現実的なものだつたし、実際にその功績を受け取ることになつたのは、そのエネルギーが世界中に届けられることを発見した男性の科学者だつたからだ。その人ならみんな知つてゐるはず

「レオン・ゼロっていう人だつたつけ？」

美玖が答えたのに対して廉はうなずいた。

「そう、でも彼は彼女が遺した論文どうりに装置を操作しただけだつたんだ。一部の評論家中では、ローラ・ゼロをイヴに、レオン・ゼロをアダムに例えている人もいるんだ。彼女が行動を起こさなければ、レオン・ゼロの名前が歴史の教科書に載ることも無かつたつてね。二人は夫婦だつた訳だし」

「お、廉、また核融合炉の話をしているのか？」

突然、魁人が話の中に入ってきた。

「またとは何さ、この世界を支えているエネルギーについてなのに「いまさらそんな話、誰も聞かねえよ、テレビだつて原理を知らなくとも使えるつていうのによ」

魁人の話によれば、廉のいるクラスでは誰も核融合炉の話なんて聞こうとしないらしい。そのせいで、廉は変な奴だと思われているようだ。

「私は聞いて楽しいけどな、なんだかすりへドラマチックでさ、  
凛もそうでしょ？」

「うん、ちょっと難しいけど、この話をしている廉つたら、なんだかすごく楽しそうなんだもん」

私は核融合炉の話をしている時の生き生きした廉が好きだつた。廉は私の知る子供のなかで、一番頭が良い男の子だつた。テストでもほとんど満点。私の知らないことを何でも知つてる。

歌もすごく上手で、私がつらいことがあって落ち込んでいるときも、廉の歌を聞くと暗い気持がどこかにいってしまうのだ。そのかわり美術はちょっと苦手。

本来なら廉はもつといい学校に行くべきだつたのかかもしれない。いや、間違いなくそうすべきだつた。

それが出来なかつたのは、私達の両親がもうこの世にはいないからだつた。

それは私が九歳の時、仕事で忙しい父が久々に休暇を取れたので、四人家族全員で遊園地に行つた時のことだつた。お気に入りだつた真つ白なワンピースを着て、廉と一緒に遊園地中を走つて回つた。本当に夢のようだつた。

だけど、それは母の死によつて引き裂かれた。

頻発する獵奇事件のせいで今ではほとんど忘れ去られてしまつたその事件は、犯人も合わせて実に一十四人もの命を奪つてしまつた。その時、父と廉はジェットコースターに乗つていて、母と私はそれを下で見ていた。コースターが最高点に達した瞬間、銃声が鳴り響いた。

その女は狂つたように自動拳銃を振りまわし、周りの人という人をなぎ倒して回つた。母はすぐに私を抱えて物陰に隠れ、安全を確保したけれど、私には状況は上手く理解出来ていなかつた。

ただ、ひたすらに怖かつたのだ。

私は泣き叫んではしまつた。母はすぐに声が漏れないように口を塞いだけれど、遅かつた。

女がこつちに向かつてきてしまつたのだ。母はその瞬間逃げようともせず私をかばつた。

放された弾丸は、一発。恐怖で動けなくなつてしまつた私は、母が私をかばつて撃たれるのを何もできずに見た。

一発はおなかに、もう一発は胸に当たつた。血まみれになつてもまだ私を守ろうとする母の姿を見たのを最後に、私の意識は途切れだつた。

その後どうやら弾薬が一発しか残つていないことが分かると、女がおもむろに頭に銃を向けたのが目撃されている。

父は母の死体を見つけると、まるで子供のように泣き叫んだ。父は母を愛していた。私達が想うよりもずっと深く。それを見て私と廉はただ茫然とするだけだつた。

その時はあまりに突然のことだったので、何の感情も湧かなかつ

たけれど、それから酒に溺れるようになつた父の姿を見て、私は事の重大さを意識した。

その父の自殺体が発見されたのが、その一週間後だつた。第一発見者は、実の息子。私の双子の弟。

鏡音廉。  
かがみねれん。

廉は私に決してその時のこと話を話さなかつた。その悲惨な死を。けれど私は廉に母が撃たれた時のこと話を話してしまつた。

「ごめん・・・。私があの時泣き叫んだせいだ・・・。私が静かにしていれば母さんは死なずに済んだのに・・・。ごめんね、廉・・・ごめんね」

私が泣きながら謝るのを聞いて、廉は黙り込んだ。

「母さんが死ななければ、父さんは死なずに済んだのに。多分、私が死んでも父さんは死ななかつた・・・私が死ななければいけなかつたんだ」

「凛、そんなことを考えちゃいけない。君は母さんに生かしてもらつたんだ。生きなきやだめだ」

廉は一言一言、諭すように言った。

「だから、凛。母さんが生かしてくれた君を、僕は何があつても守るよ」

そう言つた廉は、私よりもずっと大人びていた。今になつて思えば、父の自殺が、廉の中の何かを変えていた。その時から廉はとても努力したのだ。

国からの補助があつたので、私達が生活に困ることは無かつた。けれど、廉がその才能を發揮できるような学校に行くには、それらは全く足りなかつたのだ。

廉はそれを埋めるように、様々な知識を吸収していった。けれどそうするほど廉を理解してくれる人は少なくなり、少しづつ、廉は孤独になつていつた。

だからときどき、廉は私を憎んでいるのではないかと思つことがあつた。けれど廉はどこまでも優しくて、それを聞いてしまつたら、余計に廉を傷つけることになると思つて、聞くことはできなかつた。

「それよりも、早く弁当食つちまわないと、休み時間終わつちまつぞ。おまえらも、難しい話を聞いたから腹減つたろ？」

魁人がそう言つたので、私達は屋上に出てお弁当を食べることにした。魁人は生徒会の仕事があるとかで、一緒に来なかつた。

「美玖・・・。今日もネギが弁当に入つてるけど」

廉は美玖の弁当の内容を見て、思わずそう聞いた。なんと美玖の弁当にはご飯の上にネギが一本切られたものが乗せられていたのだ。ちなみに廉はネギが苦手。

「だつてネギ好きなんだもん。」の苦みがたまんないの！廉だつてバナナ好きでしょ

「バナナは脳に必要な栄養分がたくさん入つてるんだよ、それで食べてたら好きになつてただけで・・・」

「じゃあ凛は？なんで凛はミカンが好きなの？」

いきなり話を振られて、少し驚く。なんでつて言われてもね。

「食べ物を好きになるのに、理由なんてありませーん」

そんな私の適当な返事に反論しようとして、口を開きかけた美玖の言葉が遮られる。

「あれ！ それネギ弁当じゃない！ その良さが分かるなんて、さつすが美玖！」

突然声を掛けってきたのは、巡音瑠香めぐりねるかだつた。

「廉も食べてみたら？ 美味しいわよ！」

「やだ、無理して何か食べるのは健康に悪い」

「なによその屁理屈。そんなどから背が伸びないのよ」

廉に対してもこんな態度になれるのは瑠香だけだ。私達にとつても瑠香はお姉さんの存在だつた。

この時にはこんな風に、私と廉は幸せな日々を送つていたのだ。やがて弁当を食べ終わり、私達は屋上から街の景色を見る。高いフ

エンスを通して見える、菱形に彩られた景色。

巨大なビル群、高速道路を行きかう電気自動車の群れ。一世紀前の核融合炉が無かつた時代から、この風景はどう変わったのだろうか。

「僕達は、多分歴史に刻まれることは無いと思う」

不意に、廉が口を開いた。

「ここまで生きることに困らなくて、前の時代にあまりにも『英雄』が居過ぎて、ここまで人類が堕落した時代もない。

みんなが知っている会社はどんな会社かな？多分半分は人々の娯楽の為の会社だと思う。

一世紀前から比べて、その産業の需要が急激に上がったんだ。何故なら、人々は自分の幸福を第一に考えるようになってしまったから、本来親しい人と一緒に掴み取るべき幸福を、自分一人のために、企業を利用することで一人で幸福を手に入れようとしている。

人類は、進化しすぎたんだ。協力する必要もないほどに。だからみんなは、自分が幸福であればいいって思つてる。個人が、あまりにも個人になりすぎているんだ。

その結果、人が、人を想う事も弱くなつてしまつ。家族つていう□ミニユーティも次第に薄くなつてきている。

だから、犯罪者や自殺者が増えているんだ。昔はつらいことがあっても相談出来る人がいた、それこそ自分よりもっと苦労してきた人に。

英雄だつて一人じゃなかつた、誰かに支えてもらつて、誰かを助けることで後世に名を遺した、人々に大切なことを教えた。言い換えれば、英雄が生まれるつてことは、人が何かを学んだつてことなんじやないかな。その英雄すら僕達は生み出すことは無いんだ

廉はなぜこんなことを知つているのだろう。そんな私の疑問をよそに、廉の言葉は続く。

「だからね、時々僕は核融合炉に飛び込んでみたいと思うことがあるんだ。今ままじや誰かが高次元空間にある核融合炉に押し入つ

て、原子レベルまで分解されるのを目撃されるぐらいしないと、人類は何も学ばない。人類の『歴史』は、全く僕らを理解しようとしないんだ。僕達は、自分達全員がよりどころにしているものが、どんなものであるのかをみんなが知らなければならない。みんなが一つのものを共有していることに、気づかなければならぬ。

本当は僕が核融合炉に飛び込んでみたいぐらいだけど、核融合炉はこの世界には存在しないし、ローラが核融合炉を作った時点でその世界への道は閉ざされてしまったんだ。だから誰も核融合炉には飛び込めない。仮に飛び込めたとしても、それは悲劇でしかない。だからそんなことをしなくてもいいよ、僕はみんなにもっと核融合炉の事について知つてほしいんだ』

この時廉が言つた言葉を、今でも私は覚えている。けれど何を思つて廉がこんなことを言つたのかは分からぬ。廉がいなくなつてしまつた今、もしかしたら永遠に知ることは叶わないかも知れない。それから一ヶ月後。私の全てを変える出来ごとが起きたのだ。

最初に異変に気付いたのは廉が家に帰つてきたときだつた。廉の頭に、大きな痣があつたのだ。どうしたの?と聞いたら、うつかりぶつけた、とだけ返してきたけど、それにしてはその痣は大きかつた。

その時はあまり深くは考えなかつたけれど、ある予感がよぎつたのはその時からだつた。

そして翌日、それは決定的なものとなる。

「凛!」

美玖が泣きそうな顔で私に話しかけてきた。

「どうしたの? 美玖?」

「き、昨日ね、廉が・・・、廉が他の男の子達から・・・、たくさん暴力を受けてたの・・・。

廉はやり返そともしないんだよ、私、もう見ていられなくて……

・

まさかとは思つたけど、本当に廉にそんなことが降りかかつていたなんて……。

「とにかく、廉に話を聞こい」

放課後、やつと廉を見つけられてその事を聞いた。

「もう！どうして相談してくれなかつたの？」

ひどく動搖していた私とは逆に、廉は落ち着いていた。

「心配されたんじゃあ、君を守ることができないからだよ」

私は虚を突かれた感じだつた。でもそれは絶対おかしい。

「でも、私達は姉弟でしょ、それにあればもう五年も前の事じゃない！」

「そつか・・・」

しばらくの沈黙。

「帰ろうか」

廉の言葉に私は頷いた。

帰る途中。廉はこんなことを言つた。

「経験が少ない人ほどね、自分と違うものを嫌悪するんだ。そりや誰だつてエイリアンが来れば怖いし、果敢に話してみよくなんて人は、ほとんどいないんじやないかな。

それが、どの学校からも虐めが無くならない原因なんだと思つ。しかも、時によつて人は敵を必要とするんだ。それは例えば環境問題だつたり、何処かの政府だつたりする。人類はそういうものを倒して発展してきたんだから。

でも、それに関して何が良いのか良くないのかをみんな考えなくなつてきている。もしかしたら大人になつても誰かを痛めつけることに罪の意識を持たない人だつているかも知れない

「それで頭が良いあなたが狙われたつてこと?」

「多分・・・ね、魁人が言つよつに、僕は変な奴に見られてたようだし」

私はずつと疑問に思つていた事を口にした。

「ねえ、廉。なんで廉はそんなことを知つているの?」

「インターネットで調べれば大概の事は分かる。最初はニュースで見てなんでそんなことが起きるんだろうって思つてた。けれどみんなが知ろうとしないだけで、そういう人たちの声無き叫びつていうのは、ネット上に溢れているんだ」

そう言つてはいるうちに、私達はマンションに着いていた。十三階に上がるエレベータのなかで不意に廉が咳いた。

「知りうとすれば・・・」

「知りうとすれば? どうじうこと?」

廉がびっくりしたような表情で振り向いた。ちょっと後悔したような顔で口を開く。

「知ることも大事だけど、知らないほうが幸せなこともあるかも知れないなつて」

それっきり廉は口を閉ざした。

そして、その夜。

私は廉の叫び声が聞こえたような気がして、飛び起きた。何か悪い予感がする。

廉の部屋を見ると、廉がいなかつた。枕元を見ると、睡眠薬が置いてある。もしかして、廉は不眠症だつたのだろうか。廉はこの時、私の考えが及ばないほど、たくさんのこと抱えすぎていたのかも

しない。

胸騒ぎがして、私は夜の街に飛び出した。学校裏に急ぐ。そこには廉がいた。

大勢の男子生徒に囲まれ、廉は痛めつけられていた。同時に罵詈雑言が投げかけられている。私にはそれが「この世の出来」とは思えなかつた。

男子生徒の一人が、私を見つけた。私は逃げようと思つたけれど、廉の姿から目が離せず、逃げることができなかつた。そしてすぐに私は捕まつてしまつた。

「おい、こいつは廉の片割れじゃねえか、見られちまつたな。これを警察にチクられたらまずいぞ・・・」

男子生徒の一人がそう言つと、廉と私を除く全員が頷いた。そしてこの双子の姉弟をどうしようかと議論がされ始める。

「いつそのこと、殺しちまうか？」

一人の男子生徒が、拳銃を弄びながらそう言つ。何処で手に入れたのだろうか。

「いや、それは駄目だ、そんなことしたら絶対に隠しきれなくなるぞ」

そう言つ他の男子生徒の心情が私には分からぬ。殺すことが怖くないのだろうか。殺すことに罪悪感は無いのだろうか。

不意に、廉の言葉が頭によぎつた。

みんなは、自分が幸福であればいいって思つてる。

なんでこんな事になつてしまつたのだろう。ねえどうして、廉？  
廉はぐつたりとしていた。そんな廉を一人の男子生徒が必要以上に押さえつけていた。

「ならこんなのはどうだ？狂つちまつた廉がこいつを殺して、さらには暴れまわつた廉を押さえつけていたら、なんと廉は死んでしまいました！」っていう筋書き」

それを聞いて廉が弾かれたように顔を上げる。その顔には絶望の表情が浮かんでいた。

「それはいい、そうすれば目撃者はいなくなつて、俺達には害が無い。みんなそれでいいか？」

また廉と私を除いた全員が頷いた。それからほとんどの男子生徒はその場を離れ、無関係を装つことにした。

男子生徒の一人が、廉に無理やり拳銃を握らせようとする。その時だつた。

廉が自分を抑えていた一人を押しのけ、銃を握らせようとする男子生徒を殴つた。全く信じられないほどの力だつた。そうして一発で昏倒した男子生徒から銃を奪つた廉は、叫び声を上げながら銃を撃ちまくつた。

廉は信じられないほど正確に、男子生徒達の頭や胸を撃ち抜いていく。その場に残つた六人は、あつという間に崩れ落ちていつた。

「廉、いつの間に銃を使えるようになったの？」

私は六人を撃ち抜いて、後悔するように銃を見つめている廉に最初に言つた言葉は、そんな疑問だつた。

「僕達の母さんを殺したのが銃だつたから。もしも銃を持っている人に君が狙われても守れるように、銃も含めて訓練していたんだ」「だつたら、なんで学校で暴力を振られた時に、抵抗しなかつたの？」

「昼間にインターネットでは傷つけられている人達の声があるつて言つたよね、僕はそんな人達を助けたいって思つた。それで同じ境遇になつたら正しい助言ができると思つたんだ。そしたら、彼らの暴行はだんだんエスカレートしてきて、いつかは止めたほうがいいと思ってたんだけど、まさか夜中に待ち伏せされるなんて思わなかつた。君が殺されそうになるなんてことも。結局、僕はこんなに人を殺してしまつた訳だけど」

「でも、廉は正しいよ！だつてそうしなきゃ、私達はどうなつてたか・・・」

「理由は関係ないんだよ、僕は人を殺したんだ。自分が一番嫌悪し

ていたことをやつたんだ。それに、僕はこの世界が好きなんだ、だから、そんなことをした人がここにいちゃいけない。死ぬぐらいじゃないと、この世界を愛してゐるって言つことはできない

「廉！そんなことを・・・。そんなの・・・、絶対おかしいよ！駄目。もし廉がそんなことをしたら、私も死ぬから！」

私がそう言つたら廉は悲しそうな顔をした。

「君は生きるんだ。凜。君は死んじゃいけない。五年前、君に言つたことだよ。君にはもう五年前の事だろうけど、僕にとつては昨日の出来事のような事なんだ」

そして廉が私に銃を向けたので、私は凍りついたようになつた。  
「それに君は知つてゐるよね、君の知つてゐる僕は銃なんか使えないし、こんなふうに君に銃口を向けたりなんかしない。これは夢だよ、悪い夢だ。さあ家に帰つて寝るんだ」

そう言う廉の顔は今まで私が見たことの無いほど怖い顔をしていた。そして銃を向けられてゐるという恐怖が私を支配した。

私は言われるがままに背を向けて走り出す。  
自分の部屋に戻つて布団を頭まで被つた。大丈夫、廉は必ず戻つてくる。きっと、いつだつて廉は帰つてくれた。

その朝。

街で七人の少年の銃殺体が発見されたというニュース。  
その中に鏡音廉の文字

私は廉を死に追ひ詰めた。あの場に居合わせたことによつて。

その日から、私は寝ることが怖くなつた。

その日から、私は廉の言葉の意味を何処までも考へるよつになつた。

その日から、私は一人になった。

そうして、

魁人は廉が好きだった音楽に没頭した。廉の気持ちが知りたくて。美玖は塞ぎ込んだ。彼女は廉が好きだったのだ。それから廉の代わりに、と勉強に没頭した。廉が何を見ていたのか知りたくて。

瑠香は、変わらなかつた。廉が帰る場所になるかのように。

親族が私だけの葬儀には皆が来てくれて、皆廉のために泣いてくれた。けれど、私はその全てに現実感が無く、ただ茫然とするだけだつた。

すぐに私は睡眠不足で、とても勉強ができる体調ではなくなつた。学校に通つている身だから、睡眠はちゃんと取らなければならぬ。だから私は医者に懸かつて睡眠薬をもらつた。けれど効果は長続きしなかつた。

ある夜、廉がそうしたように夜の街を出歩いていると、エーテルという薬をもらつた。使つてみると、ちゃんと睡眠がとれ、授業にも集中できるようになつた。

その結果、私はそれを止めることが出来なくなつた。典型的な薬物中毒。そうして私は私自身を少しづつ減らしていき、いつしか私は抜け殻のようになつた。廉がいなくなつた今、そうなるまで時間はからなかつた。

不意に廉のよくしていた高次元核融合炉のことを思い出して、その日、私は夜の街に出かけた。そうしてあいつに会つたのだ。

「おい、凛、また夜歩きしてゐるのか？」

贖罪だつたのだ。

私が「僕」を名乗つたのも。

「君」の首を絞める夢を見たのも。

彼女の罪は忘れ去られようとしていた。

それは彼女への断罪であり、また赦しでもあった。

ならばその罪が贖われるのは誰の為であろうか。

### 三、喪失（後書き）

二話で凜自体の謎が明かされるわけですが、ここでの屋上から見た風景というのは、現代と意外と変わっていないので。もし今、核融合炉が発明されたらどうなるのかを想像してみると面白いかもしれません。

#### 四、逃避

気が付くと私は自分の部屋にいた。わざわざもとの所に戻るなんて、なんだか都合のいいことだと思った。

記憶を無くす前の私は廉を死に追いやり、あとちょっとで不眠症と薬物中毒で既に普通の生活が送れなくなっていた。

多分私はいつ死ぬか分からぬ身だった。私の父がそうなつたようだ。けれど私は都合のいいことに、記憶を一度無くしたことで不眠症と薬物中毒は無くなつてしまつた。

だから私は都合のいい考え方をする。廉が私を救つてくれたんだつて。あの日廉の言つたことを思い出して「聖域」に行つてなれば、私は薬物中毒で既に死んでいたかもしれない、と。

そしてあの場にいなければ、廉は死ぬ必要は無かつたという可能性。あの時からずつと存在していた考えが浮かんだ時、不意に瑠香の声が頭の中で再生される。

私は背中を向けて逃げてしまつた。彼と向き合つことができなかつた！

そうだ、私はあの時「背中を向けて」逃げだした、廉と向き合わなかつたのだ。それは彼女をずっと苦しませてきた罪ではなかつたか？

私は激しい自己嫌悪に苛まれた。そこに落ちていたナイフの先端をおもむろに左の手首に突きたてようとした。しかし、飛び降りる前と同じようにナイフは私を傷つける前に消えた。

今、私は死ぬことができない。

私が今できるのは、生きることと、廉への贖罪、廉を死に追いやつた者として。

だから私はこうすればいいと思った。私という存在を「ここ」から消し去つてしまえばいい、私で無くしてしまえばいい。生きたまま、鏡音凜かがみねりんではない誰かとして、私を殺し続けることによつてこの

罪を贖うのだ。

どう考へても狂つた思考。私は自嘲的な笑みを浮かべた。

私は廉のいた部屋に入る。目にとまつたのは、廉がいつも着けていたお気に入りの首輪。

あの時これだけが私の元に帰ってきた。廉の形見。廉がいなくなつてから、私が記憶を無くすまで、一時も放さなかつた首輪。

私はそれを自分の首に着けて、部屋を出た。

私がエレベーターに乘ろうと廊下を歩いていると、恐らく同年代であろう女性と鉢合わせになつた。

「久しぶり、凛・・・」

この声には聞き覚えがあつた。

そうだ、私達とは違う道を歩むことになつた廉の友達。

初音美玖。あの時よりもずっと大人っぽくなつていて、眼鏡を

掛けていた。どうりですぐには気が付かなかつたわけだ。

「コースで見たよ、記憶喪失になつたつて、それにあの事件の事

も」

美玖は思いつめた様子で言つた。

「正確には記憶喪失『だつた』つてところね、さつき記憶は取り戻したの」

この街を出ようとした矢先に友人に再会してしまつとは、なんとも間抜けだ。ついでに話している場所はさつき出たばかりの私の部屋。私は心の中で苦笑を洩らした。

「そつか、それならよかつた。でも凛、私ね、一つだけ聞きたいことがあるの」

「なに?」

妙にもつたいぶつた口調。私はちょっとじれつたくなつた。

「あなたが記憶を無くした時に、どういう光景を見たかつてことな

「ただけど……。凛はそれを誰にも話していないようだつたから……」

「どうして、私が何かを見たつて思うの？」

驚き。少なくとも、私は記憶を無くした時に見たあの光景を誰かに話したことは無い。どうして美玖はそんなことを思いついたのだろう。

「あの事件のことで、私なりに調べてみたの。それで、多分あなたはどこかの別次元と繋がっているんじゃないかつて考えたの。変な事だつて思うけど……」

ここでも私は驚いた。美玖は大学教授と同じ結論を出したのだ。美玖はこれまで私にたかつてきた無知なマスク<sup>マスク</sup>とは違う。そう確信して、私は美玖にこれまでの事を話してみることにした。

どこまでも広がる空と海。そして真っ赤な太陽のようなもの。

「……もしかしてそれつて」

明らかに動搖している美玖。

「何か知つてるの？」

「う、うん、でもそれつて、あの高次元核融合炉のある空間そのまじやない……」

私は咄嗟に廉の言葉を思い出した。核融合炉が作られた時、その世界創生。

「だとしたら……。凛はいま核融合炉のある空間と繋がっているのかもしない。でも、おかしいわ、あの空間を作つたローラ・ゼロはある空間には誰も入れなくしていたのに」

言つていることがまるであの時の廉のよう。なんとなく美玖が遠くへ行つてしまつたような気がした。

「そのことでね、凛。一つお願ひがあるの

またしても、もつたいぶつた言い方。

「私は今、他の国で高次元核融合炉の研究をしているの。この世界の主要なエネルギーなのに、その原理を知つてゐる人はもうほとんど、いや、もういないの。だから研究する必要があるつていうのが

私達の考えなんだけど、それでね、凛、あなたに・・・

「要するに、私にその核融合炉のある空間に入れる人として、協力して欲しいってことでしょ」

私はうんざりして言うと、美玖が後ろめたそうな顔をした。

「そう・・・私は今、南米の『境界』って呼ばれているところで研究をしているわ。まだ入ったばかりで、手伝いしかできないから詳しいことはよく分からなければ。でも話を聞く限り核融合炉のある空間に入れないことが研究の妨げになっているの。それで凛と一緒に研究所に来てほしいのよ」

またしても驚き。「境界」と言えば高次元の研究の最先端の場所、この世界の動力源を研究しているがゆえに国際的な権限すら持つているぐらいの研究所があるところだ。

出鼻を挫かれたと思ったらその逆だった。ここから消え去るには願い叶つたりな理由。

「いいわ、でも一つだけ条件がある」

そう言つと美玖は不安げな顔をした。

「私を『境界』に連れていくときに、私の記録を全部消してほしいの」

美玖が驚愕の表情を見せる。

「どうして?」

「そう言う風に聞くつてことは、それが可能つてことね。流石は『境界』の研究員様」

美玖が動搖した表情になつた。どうやら図星。

「どうしてつて?それはね、私が廉の死んだ理由を作つてしまつたからよ、だから私は鏡音凜つていう存在を消し去りたいの」

「違う!廉は虐められてたからあんなことになつた。怒つて当然だつた!あなたは関係ない!」

美玖の露骨なまでの否定。

「そうだったね・・・。美玖は知らなかつたものね。廉はね、廉がリンチされていたときに私がその場にいたから、それを利用しよう

とした男子生徒達に私と一緒に殺されそうになつた。廉が私を殺したことにして、それにすればいいってね。そして銃で私を殺そうとした奴の銃を奪い取つて六人を殺したの。そう、私があの場にいなければ廉は殺すことでも死ぬこともしなくて良かつた

「そんな・・・。そんなこと嘘よ！」

「美玖がどう思つても、関係無い。さつき美玖は言ったよね、私は核融合炉の空間と繋がつてゐるって。もしこの条件が呑めないんだつたら、私は核融合炉に飛び込むわ。だつて、もともと廉はそれを望んでいたもの」

「そんなの・・・、絶対おかしいよ！」

三年前に私が廉に言つたことと全く同じ。私は少し廉に近付けた気がした。

しばらくの沈黙。やがて美玖が口を開いた。

「わかつた。凜を核融合炉に飛び込ませるわけにはいかない。条件を呑むわ。だから私と一緒に来て」

私は静かに頷いた。

相変わらず暴力的な光を発するビルのネオン。星すら見えない。まるで暗闇が自分達を殺すんじゃないかつて怯えているよう。

人が暗闇を怖がるのにはね、理由があるんだよ。

不意に廉の声が蘇る。

僕達は一人で生きていくことはできない。別にそれは恥ずかしいことでもなんでもないし、当たり前のことなんだ。だから人はコミュニティを持つ必要がある。

それで、暗闇っていうのはね、人にそのコミュニティからの孤立をわずかでも連想させてしまうものなんだ。生きるための何かを失つている状態をね。

だから人は暗闇を怖がる。暗所恐怖症はその極端な例。まあ他に

も理由はあるだろうけど、一寸先は闇つて言葉があるように、闇は不確定要素だらけだしさ。

でも不思議だよね、自分の幸せしか考えられない人がたくさんいて、自分で生きていけると思つていてる人も大勢いるのに、人は暗闇を恐れてる。どうしようもなく物事を照らそうとしてしまう。廉は私達の中だけの哲学者だった。私は廉に多くの事を教えてもらつたし、今の私があるのも廉がいたからだ。それは美玖も同じだった。

美玖の研究のことを聞いた後、私は美玖にどうして美玖は核融合炉のことを研究しようと思ったのかを聞いた。核融合炉が正常に作動しているんだつたら、どうして研究しているのかつて。

廉が最初にケンカ、といつても一方的にやられてたわけだけど、そのときに男の子の一人が廉にこう言つたの。おまえは人と違うことをすればいいと思つてるのかつて。

そしたら廉はその男の子に、こう言つたの。確かに人と同じことをしていればこの社会の仕組みに入り込むことができる。けれどそのままじゃ前に進めないんだつて、誰かが同じことだけじゃなくて周りと違うことをしないと新しい物を生み出せないつて。だから周りと違うやつが一人ぐらいいたつていいじゃないかとも。

核融合炉の研究をするつて言つた時は周りに反対されたわ、凛の言つていた通り、核融合炉は問題無く作動してるしね。でも、それじゃ駄目なんだつて思つたの、その場の事に身をゆだねるだけじゃなくて、知ろうとしなきやいけないんだつていうことを廉は教えてくれた。だから私は核融合炉のことを知りたつて思つたの。そう思えたのも、全部廉のおかげだと思つ。

そう言つ美玖は、あの時みたいにすこく楽しそうで、誇らしげだった。そんな美玖に私はもう一つ言つてみたいことがあつた。

「美玖は廉のことが好きだつたんでしょう、隠してたつもりだつたらしいけど、私と瑠香は気づいてたわよ」

そう言つと美玖が赤くなつた。図星、本当に分かりやすい。

「う、うん。だから廉がいなくなってしまった時はすごく悲しかった。でも、廉が言ってくれた言葉を思い出して、私は立ち直ることができたの、前に進まなきやつて」

大切な人の死を乗り越えて、新たな道を踏み出した美玖と、それに囚われたままの私。

美玖に会つてから、「境界」に行くまで十日の猶予があり。そして今日は出発の前日。

私は誰にもこのことを言わなかつた。私はここで最後に見たかつたのはあの「聖域」。私の全てが急速に変わつた場所。他を目に收める必要は無い。

その「聖域」にいたのは、以外なことに魁人だつた。

「なにしてんのよ？」

魁人はびくつとして振り返つた。

「なんだ凜か。新しい曲がなかなか浮かばなくてさ、気づいたらここに脚を運んでた。それよりなんでおまえがこんな時間にここにいるんだよ。まさか記憶が戻つたせいでも不眠症になつたとかじやねえよな？」

「残念ながら違うわ。気分よ、気分」

「だったら早く帰つた方がいいんじゃねえのか？」

魁人の呆れたような返答。そういうえば前から魁人に聞いてみたいことがあつた。

「あんたさ、廉の気持ちが知りたくて音楽を本格的にやりだしたんでしょ。で、今まででなんか分かつたことはあつたわけ？」

私がそう聞くと、魁人は少し肩をすくめる。

「実の所、あんまわかつてねえな」

「情けないわね、呆れたわ」

魁人が余計な御世話だ、というように顔をしかめる。

「ま、廉が歌で誰かを幸せにすることに喜びを感じていたことは明らかだな、おまえを元気づけられたつて俺に自慢しにきたこともあつたぐらいだし」

ちょっと意外。廉が魁人にそんなことを自慢していたことがあったなんて。

「でも、あいつが言つことつて少し矛盾しているように思えることがあるな。みんなが一つにならなきゃいけないつて言つてる割には、そこに身をゆだねるだけじゃ駄目だつて言つたりとかな。今思えば、あいつは俺達よりも純粋だつたんじゃねえかな。俺達が諦めていることを、あいつはなんとかして解決しようつて思つていた。たとえそれが矛盾していくても、そつあるべきだと信じていた」

しばらくの沈黙。目の前には三つの欠けた三角と一つの丸。

「それにしても、おまえがこんなことを聞くなんてな、それに、夜歩きをしてるつてことは、なんかあつたな？」

「別に」

私は慌てて否定する。

「いや、おまえはなんの理由も無く『聖域』に来たりはしない。なんか隠してるな」

どうやら隠しきれなさそうだ、魁人のおせつかいぶりには本当に困つたものがある。

「明日。私はここからいなくなるのよ」

魁人の訳が分からぬといつた表情。

「どういうことだ？」

「九日前、美玖が私の所に来て、核融合炉に関する研究の協力をしでほしいうつて言つてきたの。この前の事件のことで、私は核融合炉のある空間と繋がつているかもしれないから。

それで私は明日、美玖と一緒に南米の『境界』に行くことになったの」

「おいおい、突然すぎるだろ。学校とかどうすんだよ。なんで俺達に相談してくれなかつたんだよ！」

「そのことなら何の問題も無いわ。もづじき、私はこの世に存在しないつてことになつてる人間になるの」

「どういうことだ」

「あんたは廉が死んだ時のことを見つけていたわよね。だからよ、廉は人をたくさん殺した人間がこの世界にいちゃいけないって言った。だから廉が死ぬきっかけを作ってしまった私がこの世界に存在してはいけないの。それで私は国家级の研究所に協力するかわりに、私の存在を消し去つてしまうように頼んだの」

「そんなこと美玖が受け入れるわけないだろ?」

「魁人の必死なおせつかい。」

「いいえ、私はその条件を受け入れないんだつたら、今私が繋がっている空間に、核融合炉に飛び込んでやるつて言つたの。そしたら快く受け入れてくれた」

魁人が愕然とした表情になる。

「核融合炉に飛び込んでみたっていうのは本心よ、きっと真っ青な光に包まれてキレイになれる。そして真っ白に記憶は溶かされて、私は消えることができるんだから」

「凛・・・」

「だけど廉には生きなきや駄目って言われてるし、核融合炉のことを知つておきたいってことも本心ね。まあその代わりに、私は死んだことになるんだけど」

「そんなの、納得できねえよ!」

「だけどあんたが止めるつていうのなら、私はここで核融合炉に飛び込むことができる。丁度ここは核融合炉の裏側だから」

魁人が絶望的な表情を浮かべた。

「残念だけど、もうあんたに会つことは無いでしょうね。あ、そうだ、あんまり私が生きてることを他に話さないほうが身のためよ。」

「応核融合炉の研究は国家機密だしね」

重苦しい沈黙が流れる。やがて魁人が口を開いた。

「わかつた。おまえが生きてるんだつたら文句は言わない。何処にでも行つちまえ」

それを聞いて私は踵を返した。頭だけ半分振り返つて口を開く。

「あんたはせいぜい元気でいなさい。廉のことを知つてゐる数少ない

人なんだから。美玖は廉の言葉で核融合炉の研究を始める決意をしたのよ」

魁人が虚を突かれた顔をする。

「凛……」

「さよなら。廉はもうここにはいないけど、廉を死に追いやつた人間もここから消える。私のことは忘れて、せいぜいギターをかき鳴らしてなさい。あなたのギターで伝えられることは何かあるはずよ、廉が私達に歌を聞かせてくれたみたいに」

そして私は歩き始めた。なんだかやり遂げた安心感が広がる。なんだ、私は思っていた以上に未練を持つていたじゃない。

と、魁人の言葉に足を止める。

「俺達はおまえのことを忘れねえぞ！おまえが廉を頼つていたようにな、廉もおまえがいたことで強くいられたんだ。そんなすげえやつのことを忘れるわけねえんだよ！だからおまえは安心して美玖の手助けをしてやれ。廉とおまえを覚えてるやつがここにいるんだからな！」

ここで私は自分が涙を流していることに気が付いた。私は自分が消えればいいと思っていたけど、やつぱり誰からも忘れ去られるのは怖かったのだ。

「おまえが廉に対して悪いと思っているんだつたら、おまえも廉のことを想い続けてやれ。何を忘れてもだ。それだけは絶対に忘れんなよ！」

本当にどこまでもおせつかいなやつ。だけど……。

「ありがとう」

私はまた歩き始めた。もう振り返ることもなく。

人類は彼女の罪によって生かされることとなつた。  
しかし彼女の罪はすでに忘れ去られ、すり減つていき、

その罪は人類に受け継がれた。

それこそが彼女の生きている証であり、  
その罪を背負うのも彼女のはずだった。

#### 四、逃避（後書き）

四話でこの話は折り返し地点を迎えます。四話までは凛の過去の話が語られていますが、ここまでが一番の歌詞を反映している部分です。五話からは間奏の部分というか完全に私の想像が入ります。言ってみればラストまでのフラグの部分でしょうか。

## 五、代替

朝起きたら鏡を見る。

老若男女問わず多くの人が行うこの行為は、いつの頃から行われるようになったのかは分からぬ。それぞれの人には、顔を洗うとか、くまがあるかどうか見るとか何か理由があつて鏡を見ているだろう。

とにかく鏡に映る自分を見て、今どんな姿なのか、それを知ることでひとまず安心したりするわけだけれど、私の場合は疑問が生まれるばかりだった。

鏡を見て、何を一番氣にするかといえば、目だ。

はつきりした理由はないけれど、恐らく私にしか見えていないものがあることを意識し始めたことがきっかけだと思う。

鏡に映る私は、二年前から比べてずっと大人びた雰囲気を纏っている。

この目が、「あれ」をみているのか・・・。

二年前、私が「聖域」の前で倒れてから見るようになつたあの蒼い空と碧い海。それらが少しずつ赤みを帯びてきているのは一年前からだ。そのことに関して、「境界」の科学者達はいまだに何が起きているか結論を出せないでいる。それはあの空間内で何かの変化なのか、それとも私自身の問題なのか。

ど、いうふうに私は鏡を見るたび疑問に思うのだ。

身支度を整えて、朝ご飯を自分で作ろうか、それとも食堂に行つてこようかと悩んでいると、扉が誰かにノックされた。どうぞ、と言つと一人の少女が扉を開けて入つてきた。

「おはようございます。美玖さんがローラさんを呼んでいますよ。何か分かつたことがあるそうです、とにかく106号室まで来てください」

「凜」という人間を消し去ることを協力条件にした女を、ここ、

「境界」の科学者達はローラと呼ぶことにした。なんでも核融合炉と唯一繋がりを持つ人間だからだそうだけれど、廉の最も尊敬していた高次元核融合炉を作った人の名前で呼ばれるのは、少し変な感じがする。もつとも、もう慣れたことだつたけれど。

「わかつたわ、グミちゃん。相変わらず一人とも早起きねえ」私はそんな呑気なことを言いながら緑の髪をしたこの少女に笑顔を向ける。しかしグミはにこりともせず、

「ローラさんが遅いんですよ」

と言つて背を向けるとすたすたと歩いて行つてしまつた。

そういうえばグミはまだ十四歳、反抗期真っ盛りだったわね・・・。なぜそんな少女がこんなところにいるかというと、それには少し複雑な事情がある。

一年半前、こここの付近で誘拐事件が起きた。グミはまさにその時、人質として武装勢力に捕らえられてしまつたのだ。それから届いた武装勢力の犯行声明には、身代金の要求の代わりに奇妙なことが綴られていた。

レオン・ゼロを連れてこい、と。

レオン・ゼロ。約一世紀前、高次元核融合炉の存在を発表した人物と同姓同名にして、高次元核融合炉の研究の第一人者。その名前と実績から、現代では知らない人はほとんどない「偉人」だ。しかし、彼はその四年前に亡くなつている。

この世にいない者を要求する。これは明らかに犯人側は人質を解放する気が無い。

すでに犯行声明が送られてきた端末を逆探知して、そいつらの潜伏先を見つけていた保安部隊は、そう判断するとすぐにそこに突入した。

最新鋭の兵器を動員していた保安部隊は、あつという間にグミを救出し、武装勢力を壊滅させた。交渉の余地が無いからこそできた荒療治だつたけれど、保安部隊にとつては周囲の脅威を取り払う絶好の機会であつたことは間違ひなかつただろう。

結果的に、グミはいくつか打撲を負っていたものの、五体満足で解放された。しかし、心に容易には治りそうにない傷を負っていた。ほとんど何も話そうとしない彼女は、親の所在も分からぬため、カウンセリングを受けてから「境界」付近の孤児院に通う予定だった。

しかしカウンセリング中にあつたある出来事によつて彼女の運命は大きく変わることになる。それは彼女の記憶が若干の混乱状態にあることが分かつて、そのリハビリのためにやつていたあるテストでの出来事だった。

紙に自分自身の事を書く。たとえば特徴だつたり、好きなことだつたりを。その内容は特に決まってなくて、ただ単に書くためのものを渡すだけ。とにかくすることで記憶を整理していくということでお安定を促すこの単純なテストで、グミは常識では信じられないことをやつた。

核融合炉からエネルギーを供給する装置の構造を、本物とほとんど同じぐらい精密に書いたのだ。いわばそれは設計図そのものだった。

国家機密である核融合炉の周辺機器の構造を知つてゐるだけでも驚くべきことであつたけれど、それを設計図として書き起こすといふのは、まったく信じられないほどの記憶力だった。

その話が「境界」の研究所長の耳に届き、所長は大変感銘を受けた。そして、彼女に保護と高度な教育を約束する代わりに研究所に来ることを持ちかけたのだ。

そうして、グミは「境界」の研究所にやつてきた。

「ここに来たばかりのグミは、必要なこと以外全く話そとはせず、自分の殻に閉じこもるようだつた。まるで信じられるものをどこかに取り落としてしまつたかのように、誰に対しても心を開かなかつた。

けれど彼女にとつて「学ぶ」ということは何にも代えがたい光になつた。一つの数式を覚えるたび、一つの法則を理解するたび、グ

ミは周りの大人に心を開いていったのだ。

まだ人見知りをしたりはするけれど、私に少し反抗するといつことはそれだけ心を許しているつていうことだろ？

・・・と、美玖が待っている。106号室まで行かなきゃ。

「おはよう、凛。待つてたよ」

「・・・遅いです」

美玖のいる研究室に入ると、笑顔とふくれつ面。対照的な表情を

浮かべた美玖とグミがいた。

「ごめん、ちょっと考え方してて・・・」

「言い訳はよくないです」

グミが憮然とした様子でそう言つたので、私は肩をすくめた。相変わらず手厳しいというかなんていうか・・・。

「まあまあ、そう言わず、本題に入りましょ？」

美玖がそう言つて話し始めた。

「凛が核融合炉のある空間と繋がつていてるのは前話したよね。二年前のあの事件で、凛を刺したナイフが持ち主の手ごと異空間に飛んで行つてしまつた。これがこれまで私達が立てていた仮説だつたんだけど、それだけじゃ説明できないことがあるの」

「この研究所で私を「凛」と呼ぶのは美玖だけだ。私はずっとやめてくれと言つていたのだけれど、美玖は絶対に私をローラとは呼ぼうとしなかつた。結果、私が根負けして今に至る。

「一つはナイフの持ち主の手が消えたのにも関わらず、そこが傷にならずにきれいに手首だけになつていていたこと、もう一つは凛自身が傷を負わなかつたことよ」

確かに考えてみればおかしいことだ。あの男の手が別の空間に飛んで行つてしまつたならそれは手を切断されたのと同意義。それなのに出血すらしなかつたというのは矛盾している。なにせあの男の

手は最初から無かつたかのように消え去っていたのだ。

「凛以外の人が異空間と繋がるのは、あの事件のときのように何かが凛の体内に入った時、それがどういう選別基準なのかは分からなければ、そうして凛に害を成したものは、異空間側に吹き飛んでもう。でもこの時、凛は必ず傷を負っている。本当だつたら凛を刺した男も凛自身も重傷を負っているはずなのよ。凛を『傷つける』ことが異空間に飛ばされる条件なのなら、これは明かにおかしいわ」

美玖がここで口を止めた。それから少し申し訳なさそうな顔で、「ごめん、ちょっと話が唐突すぎたね、理解できる?」

「多分」

この研究所での話は相変わらずややこしいものばかりだけれど、慣れることはなさそうだ。今回はまあ矛盾しているのが分かつだけもいいほうだろう。

「・・・じゃあ続けるね。それで今回、高次元核融合炉の空間がもう一つ特性を持っていることが分かったの。実は・・・」

「いやって美玖がもつたいぶつた言い方をするのは、この先が大事だということだ。私はつぎの言葉を少し注意して待つ。

「あの空間は、過去改変を行う機能を持つているのよ。凛が傷を負わなかつたのも、あの空間が、凛が刺されたことを『無かつたこと』にしてしまつたからなの。しかも、その力はものすごく強くて、多少矛盾が起きててももつとさかのぼつたところから過去を変えてしまう。あの男の腕は多分前からなかつたつてことにされたんだわ。この力っていうのはね、高次元核融合炉がちゃんと機能するためには欠かせない機能なの。

いくら制御が出来るつていつも、核融合をしている近くに機械を置いたら、すぐに壊れてしまうわ、その度に、核融合炉は故障を無かつたことにし続けている

無かつたことにする。

普通に聞いたら。子供の絵空事のように聞こえるような話だ。この研究所に来てから聞くことはぶつ飛んでいることばかりだけど、ど

うやら慣れるとはなさそうだ。

それにして、過去を改変してしまつなんて、なんて都合のいい話だらう。

「過去改変の力が強いってことは、核融合炉を作ったローラ・ゼロがそれだけ強く望んだつてことでしょう。もしかして、彼女自身も何かやり直したい過去があつたのかしら？」

ここで、ずっと黙つていたグミが言葉を発した。

「死んだ人間を生き返らせるることはできるんでしょうか」

ある意味ぶつ飛んだ質問を、美玖は真剣に考えて答えた。

「死んだ人を・・・か。もしその人が高次元核融合炉の空間でそう望めば・・・でも・・・意思があるのかどうかも分からぬし、死んだ人は少なくとも私達の世界にはいないわ。

どこかで・・・天国みたいなところにいるつていう話は信じたいけど、この世界にいなんじやたとえ意思があつたとしてもどうしようもないわ」

これを聞いて、私は不意に廉のことを思い描いた。

死んだ人間の意思は決して私達には伝わらないし、その人が生き返つてほしいと願うのは本人ではなくあくまで私達だ。そう考えたとき、私が二年前から凛という人間捨てたのはどういう意味を持つのだろうかという考えがふと浮かんだ。もしかしたら私の意思も廉には伝わらないかもしぬれ、だとしたら私が今やつてていることは完全な自己満足、どんな大義名分だつてありはしない。

いや、そんなことはずつと前から分かつてたはずだ、いまさら意識するなんて、私はなんて身勝手な人間なんだろう。

そんなことを思つて、わたしは心中で苦笑した。

「それにしても、グミちゃんがそんな質問をするなんてちょっと意外ね」

美玖がそう言つと、グミはちょっと撫然とした顔になつた。

「ちょっとした興味です。自然の摂理と呼ばれているものに高次元核融合炉が反しているのかどうか知りたいと思つただけです」

何ともグミらしい理系的返答。死んだ人間が生き返るのは無条件で嬉しいと思うのが普通だと思うけど、そんな理屈でこんな質問をするなんて、やっぱりグミは変わってるなと思った。  
だから私はすこしからかつてやりたくなった。

「過去を変えちゃつたりする時点で、思いつきり自然の摂理に反してるとおもうけどなあ」

「過去を改变するのは、度合が問題です！事情を変えるのと、存茌すら変えたりするのは大変さがぜんぜん違うんです！」

そうやって必死になつて自分が正しいんだと熱弁するグミは面白い。魁人の時はまた違つた感じだけど、この他人をからかう癖が無くなることは当分なさそうだ。

その時、突然、幾度となく私の人生を狂わせてきた最悪の音が外で鳴り響いた。

銃声だ！

「私、見てくるね」

美玖とグミの反応を確認する」ともせず、私は駆け足で研究室を出た。

今まで銃に怯えているばかりだった私も、今となつては完全に銃は怖いものではなくなつっていた。それはこの研究所で分かつたことが関係している。

いた！研究所の入り口に、機関銃を持つた数人が立つている。その足元に、あの銃声と同時に人生を終わらせられたと思しき警備員が転がつていた。

やりやがつた・・・。

私はそうつぶやき、私がこれからできることを考えた。観察すると、人数は四人、そこまで重装備はしてなさそうだった。  
あの武装集団から銃を奪つて打ち殺すのはどうだろう。いや、それ

は私の腕力じゃ無理だし、それは絶対やりたくない。廉はそれで死ぬ道を選んだのだ。

だつたらどっちもこれ以上被害を与えないようじょひ。普通なら、多少の殺生は覚悟してこちらが被害を受けないようじょひするものだが、私にとつてそれはできない相談だつた。

私は核融合炉のある高次元空間上に意識を飛ばした。一瞬だけ見える蒼い空と碧い海。

そして私はやつらのすぐ近くに現れた。

この研究所で分かったこと。核融合炉のある高次元空間は、人に意思により自在に形を変える。

流石に核融合炉本体は作者の強い意志で守られているから、私は手出しできないけど、それ以外ならいくらでも操作できる。私は一年がかりでやつと一瞬だけ自ら高次元空間上に入ることができるようになり、目に見える範囲なら高次元空間を通じて一瞬で移動できるようになつたのだ。

いきなり現れた女の存在に、この武装集団は大いに困惑した。けれどこいつらは日ごろよく訓練されているのか統率されているのか、すぐに無言で私を撃つた。しかし弾丸に私は傷つくことは無い。いや、傷ついてはいるんだけど・・・って、ああもうまどろっこしい！

そしてさつきわかつたこと、私を傷つけたものは高次元空間に飛ばされるか、そこに無かつたことになる。私が傷を負つた事実と一緒に、消えてしまうのだ。まったくなんという都合のいい話。

当然、私に銃を向けたやつらは驚愕の表情を浮かべる。当たりまえだけど、銃を撃つて穴が開かなかつた相手は初めてだらつ。

それにしても銃声というのはいつ聞いてもいやなものだ。そこで私は音を止ませるため、試しに不敵な笑みを浮かべてみた。効果はてきめん、この武装集団はまるで化け物に会つたかのような悲鳴を上げて退散していった。

こんな乙女にあんな悲鳴をあげるか、普通。

逃げていく武装集団を見ながら、私はそうとひとりじめた。

「助かつたよホント、あのまま押入られたらたまたまんじゃなかつたね。感謝するよ」

「警備が甘すぎるんじゃない？四人程度の集団に入り口を突破されるなんて」

この研究所の所長という割には、なんだか軽い感じのこの男の言動に呆れつつ、私は言葉を返した。私の指摘に所長は肩をすくめる。「いや、あいつらはプロだつたよ、ふつう荒くれ者つていうのは人数に任せて押し寄せる感じだから対策も取りやすいのだが、あの四人はほとんど監視力メタラに映らなかつたんだ。ところで知つてはいるかい、四人つていうのは潜入部隊として最も適した人数で・・・」

「言い訳はよくない」

そうやって話を別のところに持つていいとするマリタリーマニア気味の言動を、私はグミの言ったことをまねて遮つた。所長はさもありなん、といった様子で頷いたが、気にする様子も無くまた口を開いた。

「ま、警備不足だつていうのは認める。しかしこつちの身にもなつてほしいものだね、最先端の研究とはいえ、未だ必要とされてない研究にはあまり資金は回つてこないんだ」

「国家級の研究所がそんなつて、なんだか情けないわね」

所長はまったくだ、といった様子でまた肩をすくめた。そしてまた口を開く。

「それにも、あの四人が逃げる様ときたら爽快だつたね、まるで化け物に会つたような悲鳴を上げてさ」

「こんな乙女にね」

私が口を尖らせて言うと所長は吹き出した。

「まったくだ、今の君にはどんな兵器も通用しない。この調子じゃ、我々の研究が使われるのは当分先になりそうだ」

私が化け物か何か何かのようないい方をされて、少し傷つく。私は腹いせに皮肉を言ってやつた。

「ならなんでこんな研究してんのよ？」

「私の皮肉に対しても所長は真顔になつて答えた。

「今使つていいものの本質を理解しようとするのは、まさに人間の愚の骨頂だよ。君なら知つていいだろ？ が、一世紀前の原発事故は、整備不良や無謀な設計によつて事故が起きた。なんでそんなことが起きたと思つ？ 運営している側が、その危険性を知らうとしたからたからだ。結果、大惨事つてわけ。君の双子の弟も、それを誰かに伝えたかつたんじゃないのかい？」

急に廉のことを持ち出されて、私は黙りこくれてしまつた。全くこの男は本当に配慮に欠ける。

「ま、こいつ言い合つっていても仕方がないさ。せつかく君が危ない奴らからこいつを守つてくれたんだ、何か君の頼み」とを聞こひじやないか

所長はそんな私の胸中を嗅ぎ取つたのか、話題を変えた。

「そうね・・・。じゃあまずは今回来た武装集団は何者だったのかを教えてもらおうかしら？」

「おつと、言い忘れていたよ。衛星写真で確認したといふ、やつらは『眞実の火』と名乗つてゐる集団のようだ。言つてみれば、高次元核融合炉の研究をしてゐる我々を目の敵にしている集団つてところかな。核融合炉自体に恨みがあるのか、それとも宗教的な何かが理由ははつきりしていなければ、最近勢力を急速に拡大しているらしい

「迷惑な連中ね」

「まったくだ」

所長は大仰に肩をすくめた。

「じゃ、もう一つの頼み」とをさせてもらおうかしら

所長がどうぞ！」自由に、といった様子で頷いたのを見て、私は前から文句を言おうと思つていてことを伝えた。

「境界の外で散歩させてもらえないかしら」

道いっぱいに立ち並ぶバザール。そしてそこで買い物をする人、人々。

通販とかで食材を注文することが多かつた私にとって、これは新鮮な光景だつた。もつとも、この辺でバザールが立つようになつたのは高次元核融合炉ができた後だけれど。

高次元核融合炉が出来てから人類が最初に行つたことは、環境の修復だつた。遺伝子組み換え植物による土壤汚染物質の除去、無害化。そして植林などのつじつま合わせ。

それらの努力が、思い思いの環境を作り出していった。

そうしてようやく安心して暮らせることが分かると、自称先進国達は核融合炉を使って新たな歴史を刻むことを高らかに宣言した。

しかし、全ての国がそれに賛同したわけでは無く、そういう国言い分はこうだつた。せつかく自分達が住んでいた元の環境が戻つたのだから、いまさら核融合炉に頼る必要は無い。自分たちは自分たちの暮らし方をする。

そのような地域は、それぞれの伝統的な暮らしを守つたりして、しだいに核融合炉に頼つてゐる国とはあまり関わらなくなつていつたいつしか、北米と南米、つまり核融合炉を利用している地域とそうでない地域の間のこの場所は、境界と呼ばれるようになつたのだ。初めてここに来たとき、私はとても驚いたものだ。電気やガスを使わず、一定のコミュニティを作り、社会を形作る。境界の「外」は私がもといた場所とは似ても似つかないような所だつた。

核融合炉が無くたつて、人はこんなにも自分たちの生き方ができる。このことを、私は無性に廉に伝えたくなつた。もう何もかも遅いといつた。

研究所の所長は、私が核融合炉の空間と繋がつてゐることをあまり知られたくないこともあつて、それ以降、私が境界の外に出かけることはほとんど無かつた。

だから私は研究所を襲撃したやつらを追い払ったことにあやかつて、ここにいるのだ。

一応付き添いとして、グミが一緒にいるけれど、物珍しいからつてバザールで売られている物品や食べ物を物色しまくつて、私が何を言つても生返事しかしない。ほとんど一人と変わらない状況だつた。

それにしてもグミが話そうとしない。いつもそんなに喋るほうではないけれど、話を振つても続かないというのも珍しい。怒つているというよりは、何か考え事をしている、といった感じだった。きゅうりのことを言つたときだけは、じつと売られているきゅうりを見ていたけれど。

ひとしきり品物を見て、満足した私は散歩を続行した。その間もグミは黙つたまま。私はそんなグミに半ば諦めのよつた感情を抱きつつ、川のほうにぶらりと歩いて行く。さすがに話す相手がないと暇だ。

そう思つていたら、突然グミが口を開いた。

「ローラさんは、大切な人を失つたことがありますか？」

「どうして・・・そう思つたの？」

グミの突然にして突拍子もない質問に対し、思わず私は質問を質問で返してしまつ。

「美玖さんが核融合炉の空間上で人を生き返らせることが出来ない、と言つた時です。ローラさんは、なんだか悲しそうな顔をしていました」

私が悲しそうな顔をしていただつて？全く意識していなかつたことを言つられて、私は思わず手を顔に当てた。しばらくそうしていただけれど、私はグミの真つ直ぐなまなざしに圧されて、答えた。

「・・・あるわ」

それを聞いて、グミは少し俯き、呟いた。

「わたしも・・・です」

それから、グミは堰を切つたよつた話しが出した。今まで話さなか

つたのが嘘のようだ。

「わたしは元々北米に住んでいました。父と一緒に。母は私が小さかった時に亡くなりましたから、私にとって父は頼る」とのできる唯一の存在でした。

父の名は、レオン・ゼロ。ローラさんも知っていると思いますが、核融合炉の研究者でした

この子の父親がレオン・ゼロだつて！私は驚きを通り越してなんだか怖くなつた。この先にもつと驚くべき話が待つてゐるのではないか・・・、そういう予感がしたのだ。

「父は、核融合炉の研究をすることを誇りに思つていました、毎日が発見に溢れているとも言つていて、研究することをとても楽しんでいる様子でした。研究のことを聞くと優しく教えてくれる父をわたしは頼もしくも誇りにも思つっていました。でも、ある時から、父は変わつてしましました。

確かにあれは冬だつたと思います。父が仕事から帰つてきたとき、父の顔は蒼白でした。なんだか人目を気にしているような感じで、拳動不審つていう表現が出来てしまつのような雰囲気さえありました。その次の日に父は研究所の仕事を辞め、私に境界の外側、南米に行こうつて言つてきました。

本当は南米になんて行きくなかったんです。でも、それを言つてしまつたら父は何をするか分からぬほど切迫した表情をしていて、わたしは何も言わずに領きました。

それが四年前・・・。これはここに来てから知つたことですが、レオン・ゼロ・・・わたしの父が『死んだ』つて言われている日です

またしても衝撃の事実。レオン・ゼロは生きていた。

しかし、ここにきて私はふと疑問に思つた、グミは自分の過去を説明している、そのことでグミは私に何を伝えたいのだろうか。

「境界の外での生活は、不便なところがたくさんありましたが、すぐに慣れました。父も前のように優しい父に戻つて。今思えば、そ

の頃のわたしが一番幸せだつたと思います

そう言つグミは、田の前を流れる川を、じこか懐かしむような顔をしていた。

「でもそれは一年半前のあの事件で終わつてしまつた・・・

一年半前のあの事件・・・。それ自体は私も知つてゐる、グミがそれについて説明しようとしているといつことは、あのとき私の知つてゐる以上のことが起きたのだろうか。

「わたしが誘拐されたのは、あの武装勢力が父と取引をしようとしていたからです。

そのことも、自分が死んだことになつてゐることを知つていて、父は一人でわたしを助けようとしたんです。

わたしはやつらに、何保安部隊が来たらわたしを殺す、と何度も言つて完全に抵抗する氣力も無くしてしまつっていました。ここで死ぬんだ、とも思つていたほどに・・・です。

でも、境界の保安部隊は犯行声明の内容を・・・父がこの世に存在しないことを理由に、その日に強行突入を行つことを決定していました。

その時、父と武装勢力は取引の真つ最中で、やつらは、父の持つてゐる研究データを要求しました、父がどんな時も肌身離さず持つていたメモリースティックを、です。それと引き換えにわたしを解放するというのがやつらの出した条件でした。けれど、父はそのメモリースティックだけは譲りうとしませんでした。

その間、わたしは無理やり低反動拳銃を持たされ、父に銃口を向けていました。やつらは、わたしにも生き残る条件を出していたんです。

もし父が条件を呑まなければ、わたしは殺される。でも、父が要求を呑まなかつた時点で父を撃ち殺せば、命だけは助ける、と。

その事実をやつらから聞かされた父は愕然としましたが、それでも条件を呑もうとしませんでした。

保安部隊は、まさにその時突入を行いました。

その時、私の頭の中には、やつらの脅迫と生き残るための条件しか浮かびませんでした。

自分は死ぬんだっていう絶望しか……。保安部隊は突入を開始し、父は条件を呑もうとしない……だからわたしは銃を……。今までまるで他人事の様に過去を説明していたグミの顔が、急に歪んだ。

「父に向けて……撃ちました」

夕焼けの空に、一人の少女の嗚咽が混じる。

「今思えば、父は保安部隊が来ることを知っていたのかも知れません。やつらがわたしを人質に立てこもることを防ぎ、わたしを保安部隊に救出させるために条件を呑まなかつた」

もうグミの顔は、涙でくしゃくしゃだつた。

「ただ、怖かつた……それだけなんです。父に何の恨みも無かつたのに！」

私は愕然とした。グミが体験したことは、私の過去ととてもとても酷似していたのだ。

銃を向けられた恐怖で、助けられたはずの廉を見殺しにした私と、殺されるという恐怖で、父を撃ち殺してしまったグミ。

「それから、父の遺体は見つかっていません。多分、やつらは父が保護力プセルか何かに包んでメモリースティックを呑み下したのだと思つて、運び出したのです」

それからグミは手で涙をぬぐつて、私を見た。

「ずっと聞きたかったんです。ローラさん、いえ、凛さんに。あなたの家族は、今のあなたにとつてどんな存在かを」

私はそれを聞いてやつと納得した。グミは私の過去を知つて、この質問をしたくなつた。

だから自分の過去を話したのだ。グミはなんて律儀なんだろう、一つの質問をするために、泣いてしまうほどつらいことをするなんて。

私は思わず微笑を浮かべた。そして今思つてはいるとおりの答えを言つ。

「とても優しい。かけがえのない人たちよ」

私が言つと、グミは俯いて、しばらく黙つた。

そうだ、たとえ私が居なくなつてしまつたの  
だとしても、私の家族は家族だったことには変わりないのだ。廉だ  
つて、私の大切な弟だった。

「あなたのお父さんも、そうでしょ？」

グミは静かに、しかしさつきりと頷いた。

共感、それは孤独の否定だ。グミはこのことを誰にも打ち明けら  
れなかつた。けれど私の過去を知つて初めて誰かを失う「罪」を持  
つことに共感をして、話すことができた。

間違いなく、今の私とグミは真に共感していた。たつた一つの質  
問を通して。

「それにしても、どうやって私の過去を知つたのかしら、まさか美  
玖が言つたんじゃじゃないわよね？」

私が質問をすると、グミは赤くなつて答えた。

「最初はちょっとした興味だつたんです。でも流石に美玖さんには  
聞けなかつたので、境界のデータベースに入つたら、凛さんの過去  
のデータがあつたんです。今と名前も違いますし、変だなつて思つ  
て、興味本位で見つめましたんです。」「ごめんなさい」

申し訳なさそうにぺこんと頭を下げるグミを見て、思わず私は笑  
つてしまつた。

「いいのよ、もう私のことでは無い。私は凛では無く、ローラなん  
だから」

それにもしても、境界の厳重なセキュリティを潜つて情報を見るな  
んで、やつぱりこの子は天才だ。

川が夕日を反射し、オレンジ色の帯を作り出す。

「帰るつか」

グミが頷き、私とグミはもと来た道を引き返した。

研究所に入ったとき、グミが不意に口を開いた。

「大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかったものが何か知りたくありませんか？」

私は何か言おうとしたが、グミはそれを待たずにすたすたと歩いて行ってしまった。

罪が受け継がれたとき、

その罪は彼女自身のものに代替された。  
しかし、初めにあつた罪が報われるまで、  
彼女自身の罪の報いを、彼女が受けることは無かつた。

## 五、代替（後書き）

五話は、間奏部分に当たる話になりますが、予想外に長くなってしまった。

実は、この五話の原稿はパソコンの故障により一度消失してしまったのですが、この後の話の重要な伏線になるということで、いろいろ入れたところ今ところ最も長い話になってしましました。今になってみれば書き直したおかげでグミの設定をより深くできたのでよかったですかなと思っております。怪我の光明つてやつですかね。もつとも、一曲でこんな長くなることは私も予想できませんでしたが。

次話から、一気展開が進み、最終話まで一直線に話が進みます！ ま、予定ですがね。

## 六、融解

それは事件だったのだろうか、それとも事故だったのだろうか。そう考えて私は苦笑した。事件か事故か気にるのは警察とかぐらいだ、なにも私が気にすることでは無いし、それを決めるのは「自己」の判断だ。

と、言葉遊びをしている暇ではない。なにせ国一つが滅びたてしまつたんだから。

原因は諸説あるけれど、とにかくその国は一夜にして滅びた。正確には現地時間で今日の午前一時。その瞬間、その国にいるどの人物とも連絡が取れなくなり、その国に親戚とか恋人とかがいる人たちは大いに困惑した。今じやこの出来事を報道していない国はほとんど無い。

どこかの国が極秘に作成した原子爆弾を落としたのではないか、など様々な憶測が飛び交つたけれど、境界の科学者達が出した結論は一つ。

その国に大量の放射線が降り注ぎ、生物だけがその機能を失つてこの世から消え失せた。

偶然、その場所に研究用の検量系が置いてあり、それが異常な数値を境界の研究所に送つたのを最後に通信が途絶えたことと、衛星写真を見る限り爆風のようなものが発見できなかつたことから、今はその説は有力だ。

当たり前だけど寝ている人がほとんどで、皆自分に何が起こつたのか分からず、その現実を受け入れることになつた。いや、もしかしたら起きていた人だつてそうだつたかも知れない。

とにかく私が記憶を失つたあの日とは真逆、午前一時にその国にいる人々は永遠の眠りについた。

生存者は今のところ確認できていない。そのせいで前後関係や原因が分からぬ。

ただ一つ、分かつてていることは、その国が核融合炉の恩恵を受けている国だつたことだ。

だから核融合炉に頼つてている国では、ある意味自虐的とも言える憶測が飛び交つており、特に私のもといた国では持前の「ヒリズム」でかなりの混乱が見られるようだ。次は自分達なんじゃないかつて。

そうかと思えば境界の外側にいる人々はこの出来事をほとんど知らない。仮に知つていても知らん顔を装つてゐる。その人々はたつた数十キロメートルしかその国から離れていなかつたのだけど、こんなにも認識の差があるのだ。

そして境界のこの研究所といえば大騒ぎ。なぜなら一夜にして国を滅ぼすほどの放射線を降り注ぐことができるのは、水素爆弾が必要になつてその存在を消した今、高次元核融合炉だけだつたからだ。どの職員も皆慌ただしく動き回つてゐた。専門的な知識がそこまである訳では無い私だけは、その中で特に何もせずにいて、話しかけてくる人もいなかつた。どの人もどの人もこの出来事の事実関係を調べるのに手いっぱい、<sup>みく</sup>美玖でさえも会うことが無かつた。

ようやく美玖と話すことが出来たのは、次の日の朝になつてからだつた。

朝の食堂で、明らかに睡眠不足気味な顔をした美玖に話しかけるのは少しためらわれたけれど、あの出来事は何だつたのかを知りたかつたので、思い切つて話しかけてみた。

「おはよう、美玖。昨日はお疲れ様」

ネギ鴨を目の前にして、なんだかぼーつとしていた美玖がはつとした表情になつた。

「う、うん。頑張つたおかげで何とか原因が分かりそう。何か分かつたら所長から召集がかかると思うけど……」

美玖がうーん、と唸つた。

「何か分かるまで、私達は眠れなさそうだわ」

私はくまのある顔でちょっとした弱音を吐く美玖に心から同情し

た。というよりもなんだか申し訳なく思つた。

「早く何か分かるといいね」

「うん。これが私達の役目だもんね、こいつ時が私たちの力を發揮する場だから、早く皆に本当のことを伝えられるよう頑張るわ！」弱音を吐いた美玖に対して、私は同情するような言葉をかけたつもりだつたけれど、どうやら美玖は励ましかれだと勘違いしたようだ。

それにしても、私達の役目・・・か。

私は自分がここにいる意味について考えた。少なくとも、私にとっては鏡音凜という「過去」の人間をこの世界から消し去ることが目的だつた。今もそれは成就している。

けれど美玖やここにいる研究員は違つ。起じるかもしれない核融合炉の不具合を防ぐため、ずっと核融合炉のことを知ろうとしていたのだ。

恐らくこここの研究員のうち少なからずは、核融合炉の不具合が起きた時の為の研究をすることに、疑問を感じていた者もいたはずだ。なにせそれは未来永劫起こりそうにないのだから。

そしてこの出来事を少しでも嬉しく思つてゐる者もいるのだろう。やつと自分の出番が回つてきた、これまで全く日の光を浴びなかつた自分の研究が白日にさらされる日が来たのだと。

と、私はそんな邪な想像をしてみたりするけど、美玖のそれは純粋に自らの一杯割を全うする兵士のような誠意だつた。

今、自分にできることは何だろうか、そんな思いが頭をもたげた時、ふと、この前境界の外に散歩に行つた時の出来事を思い出した。大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかつたものが何か知りたくありませんか？

グミがそんなことを言ったとき、何故か彼女の顔には何か使命を果たそうとする義務感のようなものがあつた。

「そういえば、グミはどうしたの？」

私がそう聞くと、美玖がネギ鴨を食べている手を止めて瞬きをす

る。

「あれ、そういうえば見てない……。凛は……知らないよね……」

「うーん……。美玖と一緒にと思つたんだけど……」「こんな大惨事に、グミを叩撃しない。そのことに私は何か予感じみたことを感じたけど、その時は特に深くは考えなかつた。目の前にことに気を取られていたというのもある。

けれど、それがその後の私の運命を大きく変えることになるとは、誰が予測できただろう?」

所長から召集がかかつたのは、その日の晩ごろだつた。各々は凝つた肩をほぐしたり、欠伸をしたりしながら所長の発表を待つた。特に何もしていない私が言つのも難だけど、徹夜明けの晩ほど辛いものは無いはずだ。そのような状況なのにも関わらず、美玖は真剣な表情を崩さず座つている。

そして皆の注目の中、所長がホールの檀上に上がつた。

「ご苦労!」

所長が最初に発した言葉はそんな労いの言葉だつた。

「諸君はよくやつてくれた、僅か一寸足らずで我々はあの出来後の全容を掴むことができた。まさにこれこそが君達の力なのだ」

私はそんな政治家気取りな言動に呆れたけど、流石だな、とも思つた。

ここにいる研究員は、ほとんどがエリート。誰にも負けたことが無いような秀才ばかりがいる。

以前、私は廉にこんなことを聞いたことがあつた。  
ねえ、あんまり勉強していなくとも、成績がすつごくいい人つて  
いるけど、それって不公平じゃない?

中学生ならけつこうな割合で思つていいことで、ありきたりで他

愛のない疑問を、廉は真面目な表情で考えた。

まあ、普通は陰で努力してたりするのが多いんだけど、たまにそういう人もいるよね、

でも僕はそれは不公平だとは思わないな。

え！ どうして？

そんなに努力せずに勉強ができるちゃうと、その分の根性つていうか、耐久力が付かないんだよね。だから一度挫折したときに、ショックが大きい。僕達がどうつてことないと思っていることも辛く感じてしまうこともある。なんでもあんまりにもできる人は、逆に言えば頑張つたつていう経験がしにくいんだ。

だから、勉強ができるつてのと、頑張つたつていう経験を足せば、不公平なんかじゃないと思うけどね。なんだか屁理屈っぽい感じはするけど。

これまで誰にも負けたことが無い人間は、純粹な金属でできた刀のようないい人なのだ。どこまでも鋭くて、どんなものでも切ることができんだけど、その分折れやすいような。

所長はその種の人間がどうやつたら自らの能力を發揮することができると知っているのだ。自尊心をうまく使うことで、その士気が上がるのことや、たとえ管理職であつても、自分たちが調べたことを、自分が見つけたように言われるのをとても嫌うことを。

と、私が聞きたいのはそんな言葉じゃないんだつた。私が愚考している間に話は進んでいた。どうやら、順を追つてまとめて話すらしい。

「今日になつて軍隊が派遣されたが、生存者の見込みは無し、推定で一千万人が行方不明になつていてる模様だ。発見された遺体を調査したところ、そのいずれもが極度の放射線被ばくをしていた。設置してあつた検量系のデータからも、大量の放射線が降り注いだことは間違いないだろう。これに対する高次元核融合炉の関係だが・・・

「

ここで所長は注意を引かせるためか、一呼吸置いた。

「これまでの情報収集で、高次元核融合炉の空間自体が融解を始めている可能性が極めて高いことが分かっている」

私や美玖を含め、その場にいるほとんどの人が息をのんだ。

「空間の融解により、エネルギー自体が流動的で不安定になつているようだ。詳しい原因を突き止めるため、これより調査団を派遣し、各々の国のエネルギー供給装置の調査を行う。それまで諸君は体を休めたまえ。本格的な調査はこれからだ」

以上。所長がそう言うと、研究員達の安堵が伝わつてくるような感じがした。流石に三晩徹夜したいやつはいまい。

高次元核融合炉の空間自体の融解。私はその言葉について考えようとしたけれど、私の頭の中は別のことで埋まつていた。

グミがこの中に見当たらないことを。

流石に私は不審に思つた。なにしろ研究員全員に対しても召集がかつたのに、グミだけが居ない。そして、グミの性格からして、召集されても来ないなんて絶対にありえない。

ー もしかしたら・・・あの時の言葉つて・・・。

グミが何か使命があるような顔をして言つたあの言葉。それをグミは「知ろう」とするために探しに行つたのかも知れない。  
だとしたら・・・。

まずはグミがここから出て行つていなかを知るべきだ。

私はそう考へ、美玖の使つてゐる端末から境界のシステムにアクセスし、研究所内からの外出者がいるかどうか調べた。流石に重要機密なんかは簡単には見ることはできなけれど、情報の共有がスマートにできるようにだいたいの情報はすぐに探すことができる。

そして私はそのログを見て驚愕した。そこにグミの名前が載つていなかつたからだ。

私は恐ろしい予感を抱き、次に研究所内でのグミの情報を探した。

そして、検索結果は・・・該当者無し。

予感は的中していた。グミのこの研究所内での記録が全て無くなつていたのだ。

さらに悪い予感がした。ここでの記録を操作出来るのは、私が知る限り所長とグミだけだ。所長がそれをやる理由は考えられないから、それをやつたのはグミ自身だということになる。だとしたら、グミは少なくともここに戻つてくる気は無い。

これつて私が一年前やつたこととまるつきり同じじゃない！

私は必死に考えた。グミがこんな未曽有の大惨事の渦中に自分の記録を消し、失踪してまでやろうとしていることとは？

いや、それは考えなくとも分かることだ。どうか私が最初から分かつていたはずだ。

グミは自分の父親が何に怯えて高次元核融合炉の研究を辞めたのか知りたくなつたのだ。

一つの国が滅び、その全国民約「千万人が死亡」するという惨状を知つて、彼女の父、レオン・ゼロが何に怯えていたのか薄々感づいたのだ。そして、それをはつきりさせようとしている。

ならばグミは何処に行つたんだろう？自分の記録を消したということは、自分の足跡を誰かに追跡させない為だろうから、境界の内側の交通機関を使つている可能性はほとんど無い。つまりグミは境界の外側に行つたのだ。

ここで私はピンときた。グミの父親が持つていたメモリースティックは、一年半前、グミを誘拐した武装勢力のアジトで行方不明になつた。グミはそれを見つつけようとしている可能性が高い。

私はすぐにその場所を検索した。もし、グミがその場所に行くつもりなのならば、それは危険が伴う。一度壊滅させたとはい、集団というのは容易に一つの場所からは離れない。そこに武装勢力が居ないとも限らないのだ。

と、私はその武装集団の名前を見て面食らつた。

真実の火。

「この前この研究所を襲撃しようとして、私に阻まれたやつら。私はなんだか感心してしまった。一年半前、保安部隊に壊滅させられたのにも関わらず、懲りずに研究所を襲撃しようとするなんて。私達にとつて「迷惑な連中」の熱心さは尋常では無いよつだ。」

その場所は、ここから十数キロほど離れたところにあつた。もし、徒歩だつたら三、四時間はかかるだろつ。体力が多いとは言えないグミなら、もつとかかるかも知れない。

しかし、今から徒歩で追跡しても到底追いつけそうにないし、地形を確認したところ、車両やバイクが通れなさそうな道もある。あれを試してみようかな。

空間転移。一年前ぐらいから少しづつ出来るようになつてきたあれば、今では目の届く範囲ならかなりの距離でも一瞬で移動できるはずだ。けれど今のところ試しているのはせいぜい百メートルがいといこうだし、ここからは目的の場所は見えない。

と、ここで私は気が付いた。直接目的の場所に移動する必要はない。どこか高いところに上つて、だいたいの位置をつけてやれば、多少離れたところに現れても何とかなる。

それを実践すべく。私は念のため自分の携帯端末に地図の情報を入れてから、研究所の屋上に上がつた。美玖にこのことを伝えようとも思つたけれど、やめた。ただでさえ忙しいのにグミのことで心配をかけるのはどうかと思つたからだ。爆睡している美玖を起こすのがためらわれたつていうのもあるけれど。

目的の場所はここから南西方向に約十五キロメートル。私はその方向を向くと、おもむろに足を踏み出した。

この前やつたとおり、別に歩きながらじゃないと空間転移が出来ないわけじゃないんだけれど、やっぱり移動するのだからこつするほうがしつくりする。

そして一瞬だけ見える空と海。

それらが見えたのは一瞬だつたけれど、私はそれらの変容ぶりに面食らつた。空は今までとはくらべものにならないくらいの赤色を

帶び、まるで赤い霧に包まれているようで、海はそれを律儀に映していた。これまでのこの空間の変化は、核融合炉の空間の融解の兆候だったのかも知れない。

気がつくと私は森の入り口にいた。携帯端末で確認すると、目的の場所はここから一キロメートルほど先。

どうやら上手くいったようだ。私は誰もいないのに少し得意げに笑顔を作り、意気揚々と歩き出した。

森の中に佇む、なかなかに古い木造の建物。あの武装集団のアジトだった建物の扉を目の前にして、私はなんだか拍子抜けしてしまった。

武装集団のアジトといったら、監視カメラやら柵やら物々しいものが設置してあると思っていたけれど、ここではそんなものは無く、ただの山小屋のように見える。

まあ一度保安部隊に壊滅させられたのだから、その時に取り扱われるかしたのだろう。

そう思いつつ、私は無遠慮に扉を開け、この建物に入った。

生々しく弾痕が残る廊下を歩きつつ、私は境界と、その内側の事に思い浮かべた。

今、世界中にある核融合炉の恩恵を受けている国は、あの出来事のおかげで大混乱に陥っている。そして核融合炉の研究者達は、それが何故起きているのか躍起になつて調べている真つただ中だ。

それなのに、私はこんなところで何をやつているのだろう。そんな今更な疑問が浮かんできた。いつもの自分なら、そんなこと他の人に任せて美玖の手伝いでもしているはずだ。どちらにせよその理由ははつきりしていた。

そうしなかったのはグミが自分の記録を消して失踪するという、二年前私がやつたことの際限を見せられたからだろう。

と、もう一つ。これはほとんど予感のようなものだつたけれど、グミが知りうとしていることが、あの出来事の真相に近づいている気がしたのだ。そして、それを私も知りたいが為にこうして追いかけていっているのだ。

やつぱり私は身勝手な人間。

そう思つて苦笑を滲ませた時、私は丁度大広間に出て、そして見た。

部屋に一人佇む少女の姿を。

グミは私が居ることに気が付いていない様子で、手持ちの携帯端末で何かを見ていた。

そのあまりに熱心な、思いつめた瞳に私はぞつとした。

「グミ・・・」

私の問いかけに、グミが弾かれたように顔を上げる。

「ローラ・・・さん？・・・どうしてここに？」

「自分の記録まで消して、失踪した仲間を探さないやつがどこにいるのよ。あなたのやつた事は、『探さないでください』ってメモを残して家出すようなものよ？」

私がそう指摘しつつ近づくと、グミは俯いた。

「ごめんなさい」

「なんだ、分かってるじゃない」

まるで親子か何かのような会話。私は少し緊張を解いたけれど、まだ話すべきことがたくさんある。

「もしかして、今あなたが見ているのはあなたの父さんの研究データ？」

さつと、グミの顔がこわばつた。

「は・・・い。わたしはこここの武装集団が父の遺体を運び出す時に、父の手のひらからメモリースティックが落ちるところを見ました。そのすぐ後に保護されたので拾つことが出来なくて、でもそれからそれを見るのが怖くなってしまったんです。父を変えてしまった研究内容を見るのが。

でもあのニュースを見てから、もしかしたら、父はこれを恐れたいたんじゃないかと思いました。それがもう起つてしまつているのなら、もう恐れている場合手はない、と思つたんです。でも、それだけ恐ろしい内容なのなら、他の人に知られずに自分で判断すべきだと思つて、こういつた形で・・・

「まあそれは逆効果だつたけど

私は思わず苦笑してしまつた。グミは天才だけれど、一人で抱え込もうとしたり、家出のような形をとるのはやつぱりこの歳ならではだ。その為に自分の記録を消したりするという向こう見ずな無茶をすることもそれにぴつたりと当てはまる。

私は少しほほえましく思つたが、ここが今も活動を続けている武装集団の、「真実の火」の元アジトであり、安全ではないかもしけないことを思い出した。

「グミ、よく聞いて、ここを所有していた武装集団は、この前研究所を襲撃しようとしたやつらと同じなの。だからここ安全とは言えない、それを見るのは後にして早く出たほうが・・・」「そういうわけにはいかない」

私はグミの後ろから聞こえた声にはつとした。そして考えられる限り最悪の状況に陥つていることを認識する。

見ると大広間の入り口の全てに、銃を持つたやつらが陣取つていた。その中の一人に、グミがこれまで見たことも無いような憎悪を顔に浮かべた。

「おまえはッ」！

グミがこんな激しい口調になるといつことは、あの男は・・・まさか。

「やはり覚えていたか。まったく、あの時と全く同じ場所で、同じものを巡つて対峙することになるとは、運命を感じてしまつた」

同じ物を巡つてだつて！ といつらは、間違いなく「真実の火」と名乗つてゐる武装集団だ。しかもといつらは、今この瞬間、グミの父親の研究データを狙つてゐるのだ。

「つるさいつ！」

そう言つぐミの田は烈火のごとき怒りを宿している。それを見て男はやれやれといった風に首を振つた。

「穏やかではないな、ならば单刀直入に、我々の目的を話しておこう。我々が欲しているのは、あの時と同じ、そのレオン・ゼロの研究データだ。

我々は保安部隊の突入により、壊滅的な被害を被つたが、何とかレオン・ゼロの遺体は回収することができた。だが、彼はメモリースティックを飲み下したりはしていなかつた。まったく骨折り損だつた。

だが我々は保安部隊が撤収した後、必死にそれを探し回り、幸運なことに見つけることができた。だがそれには厳重なロックが掛かつていてな、我々には見ることが叶わなかつたのだ。

そこで我々は君を待つていた。レオン・ゼロの一人娘である君なら、何か知つているのではないかと思つたのでな

「ここで私は大きな勘違いをしていたことに気が付いた。

この武装集団。「眞実の火」は核融合炉を目の敵にしているのでは無い、核融合炉の情報を欲しているのだ。この前研究所を襲つたのも、多分破壊では無く情報の略奪が目的だったのだろう。

そんな事實を知つて、私は自分の迂闊さに舌を噛んだ。外壁に警備が無いからといって、この部屋に監視用のカメラか何かが無いという保証は無いのだ。

なんだか自分が不甲斐なく思えて、無性に言い返したくなつた。

「それで一年半も待つてたつてワケ？

なら質問があるわ。そんなに気長に待つたり、境界の研究所を襲撃したりしてまで、高次元核融合炉の情報を欲しているのは何故？こんなハ当たり気味の言動に対し、この男はよくぞ聞いてくれましたという風に腕を広げて見せた。

「それは我々の名乗つてゐる名前にこそある。『眞実の火』という名前にこそ。

高次元核融合炉は多くの国で使われているが、民衆にはほぼその実態を知られていない。それぞれの国の政府がそれを意図的に隠しているのだ。高次元核融合炉のことが本当はよく分かっていないことも含めてな。そんなものを使うことは出来ないというのが第一の理念だ。

そしてもう一つ。高次元核融合炉の実態を知らせようとしない愚かな政府に代わって、我々がその真実を世界に向けて発信するのだ。そんな演説、みな話をするこの男に、私はとてもとても嫌気がさした。

この男は、この武装集団は、情報を発信するだけで問題の解決方法をまるで考えていないのだ。

「そんなことをしても、人々の混乱を誘うだけよ、何にも解決になつていねいわ」

「だがその中で民衆は誰につくか選択するのだ。そして我々が唱える真実も下へと必ず集い、我々が世界を先導してゆく存在となるのだ」

ぐだらない。

私はそう強く思った。真実を民衆に伝えると言つておきながら、そこには権力への欲求がある。

けれど境界の研究所に一年間いて、政府が核融合炉の実態を調査することに消極的なことは少なからずある。そんな寒感を思い出して私はなんだかもどかしくなった。

「民衆に真実を伝える為だ。その情報を我々に提供気は無いか?」

そこまで黙つていたグミが、まるで怒りに耐えかねたかのように口を開く。

「これをおまえたちには渡さない、決して。どんな目標を掲げていようが、私の父を殺した貴方たちには何も渡すものなんか無い!」

それを聞いた男はおやおやと言つような表情をした。

「ふむ、交渉決裂だな。貴重な逸材なのだが、仕方がない。もう口ツクは解いてしまったのだろう?」

ぞつとして、隣を見ると、グミがこわばつた表情を浮かべている。その表情が、私達がいかに絶望的な状況に置かれているのかを雄弁に物語つていた。

前を見ると、男が腰に下げているホルスターから銃を抜いたのが見えた。私はとつさにグミを庇い、その怒りと恐怖が支配している顔を目の前にする。

銃声は一発。しかし私がグミを庇つたことで一発ともこの空間から消え去つた。

わずかに聞こえる驚きの声。しかし人数のせいか、撃つた本人であるリーダー各の冷静さのせいなのか、この前のように恐怖に囚われる者はいなかつた。

「ローラ・・・か。仲間からは聞いていたが、本当に銃器で殺せないとはな、ふむ・・・」

そうしてわざとらしく考えるしぐさを一瞬して、男は鼻で笑つた。私はその音を聞いただけなのに、ぞつとするほどの中意を感じた。「レオン・ゼロの娘よ、さつき君は、我々が父を殺したと言つたな」目の前のグミの顔が、より深い怒りの表情を帯びる。

「まあ眞実を知つて怖気づくような者など、生きていても仕方がないからな、自分を見捨てた者を殺した君は、ある意味正しかつたというわけだ」

「うるさいつ！」

グミがそう言つて、男に突つ込んでいこうとする。

「グミ！ 驄目つ！」

私は何とかグミを抑え込もうとしたけれど、その時グミが全く信じられないほどの力で私を押しのけたせいで、私は体制を崩してしまつた。

「グミつ！」

空間転移をしようにも、体制を崩してしまつたせいで上手く異空間に行くことが出来ない。私は何もできず、目の前でグミが撃たれるのを見ているしか無かつた。

その一発は、グミの左胸を正確に捉えていた。どう見積もっても助かる見込みが見いだせない程に。

その光景が、私がずっと感じていたはずだった感情を一気に噴出させた。

この世界に対する敵意を。

グミが何をしたっていつの！

一年前のあの事件だつて、グミは何も悪いことはしていない！グミはそうせざるをえなかつた。それなのにまたこんなやつらに利用されて、こんなところで・・・こんな！

あの時も、廉が居なくなつてしまつた時だつてそうだつた！

廉はこの世界のために世界から居なくなることを選んだのだ。私のことを理解してくれた人たちが死ななければいけない世界。ここはきっとそんな世界なんだ！

私はこの部屋にいる、グミを撃つたやつらをたまらなく憎りしく思った。それこそ私が持つ感情の全てに打ち勝つほどに。

こいつらにグミと同じ目に遭わせてやりたい、こんな世界のこんなやつらなんか消してやりたい。

そんな感情が私を走り出させるのに、そして時間は掛からなかつた。

私は何の考えも無く、グミを撃つた男に突進する。それを止めようとした放たれた弾丸はどれも私を傷つけることはできず、私は怒りに任せて男に殴りかかった。

あれ？

我に返つた私が見たのは、赤い霧に包まれた空と海。

「久しぶりだね。こうして向かい合つのは」

背後から声がして、私はぎょっとしながら振り返る。

その姿に、私は自分の目を疑つた。

そこにいたのは、紛れもなく十歳の時の自分。母が死んだ時と同じ、真っ白なワンピースを着た私だった。

「ずっと、待っていたよ。君がここに来るのを、君が世界を憎む瞬間を」

十歳の少女にしてはなんだか変な話し方。そこで私は直感した、この少女は、廉<sup>れん</sup>の口調をまねているのだ。

「あなたは・・・誰？」

私がそう聞くと、この少女は微笑を洟らした。

「僕が誰かだつて？ 本当は知つてはいるはずだよ、だつて僕は君の一部だつたんだから」

報い。

それは「この世界」にもたらされ、人類が等しく受けのことになった。そしてそれを実現したのは、他でもない彼女の罪だった。

## 六、融解（後書き）

五話から三週間もたつてしましましたが、何とか六話まで書くことができました。

まあ個人的にいろいろとあったというか。

人生何があるかわからないものですね・・・（遠い目）。

## 七、決意

鏡よ、鏡。

九年前の自分とはい、目の前に全く別の動きをする自分の姿を目の前にして、私はひどく違和感を覚えた。いや、違和感を覚えたのは、目の前にしたのが九年前の自分だったから、かも知れない。もつとも、目の前の人間に「自分の一部だった」って言われて平靜を保っているほうがおかしいとは思つけれど。

それにしても、私の一部だつて……？

「もしかして……あなたは廉……なの？」

自分の一部だった、と言われたら廉しか思いつかなかつた。あの時、廉という存在は私の中のかなりの部分を占めていた。そのせいで、廉がいなくなつた時、私は薬物乱用と相まって抜け殻のようになつてしまつたんだから。

そんな自己分析を言い訳のように考えてみるけど、私のこの発言が、廉が生きているかもしないという私の淡い期待から出たのは、火を見るよりも明らかだつた。

何故なら、私は廉のような言葉使いを聞いて、懐かしい思いに囚われていたのだから。

そしてその問いを聞いたこの少女は、曖昧な笑みを浮かべて口を開く。

「僕が誰なんか気になるのは当然だと思うけれど、それよりも聞いておきたいことがたくさんあるんじゃないの？ 例えば今、世界がどうなつてているのか、とか」

その言葉に私ははつとした。

そうだ、いま世界は核融合炉の空間融解のせいで大混乱に陥つて、その中で父親の遺した真実を知ろうとしたグミは……。

「グミは……」

それはもはや祈りのようなものだった。

「グミはどうなったの？」

それを聞いた少女は、ため息混じりに答えた。

「僕はそういう質問を期待したんじゃないんだけどね、『そつちの世界』のことは君のほうが詳しいはずだよ？」

私は思わず呻いた。さつきまで私は、この少女の言つせつちの世界 現実世界にいた。

私だって、グミがどうなったか分かつていたはずなのだ。私のその反応を見て、少女は追い打ちをかけるように言つた。

「まあ僕は君だから、君を通してそつちの世界を見ていたんだけどね。何ならその質問に答えてあげようか。グミに放たれた二つの弾丸は、見たところ一発は心臓の右心室あたりを貫通していたね、二発目は・・・」

「黙つて！」

私が叫ぶと、少女はすぐに口を閉ざす。同時に、グミを撃つたあの男に対する憎悪が、突如として蘇つた。

そうだ、私はあの後、あの男に突進して、殴りかかつて、それから・・・？

私は思わず周りの景色を見た。あるのは見渡す限り広がる空と海のみ。

どうして私はここにいるのだろう？私がここに来るのは、空間転移をするときぐらいだ。それだって一瞬しかここにはいない。比較的長くいたのは、私が記憶を取り戻すためにマンションの十三階から飛び降りた時だ。

それだけ私を傷つけることがあるの時起きたのだろうか？

もしかしたらあの男は手榴弾でも持っていたのかも知れない。武装勢力のリーダー格なら、それぐらい持つても不思議では無い。でもあんな近距離で爆発させる理由が分からないし、何かを爆発させるような音も光も無かつた。

あの時、いったい何が起きたのだろう？私がそう考えていると、不意に少女が笑つた。

「そ、僕が聞いて欲しかったのは君が何でここにいるのか、だよ。多分君は今それを疑問に思つていい、当たつていいかな？」

少女のそんな言い方に、私は少しむつとした。けれど当たつてるのは事実だ。

「じゃあ、私が何でここにいるのか、あなたは知つていいんでしょ？ だつたら、なんであなたがそれを知つているのかも合わせて教えてなさい」

私の高圧的な命令口調に、少女は顔をしかめたが、それはすぐに嬉しそうな表情に変わつた。まるで出番を待ちかねていた役者のように。

「じゃあ、全部話させてもらおうかな。君とこうじて向かい合つたのは一年ぶりだし、次はいつ会えるか分からぬからね。

結果から言うと、君は一つの地域を滅ぼした。それも、あの森が跡形もなく吹つ飛ぶほどの爆発を起こしてね」

私は何を言われているのか分からず、動搖した。それほどの爆発が起きたなら確かにここにいてもおかしくは無いけれど、そんなことが起こるような要因は考え付かなかつた。

私のそんな様子を見つつ、少女は楽しげに続ける。

「爆発を起こしたのは、高次元核融合炉のエネルギーの一部だ。それが一時的に『そつちの世界』に解放されて、だいたい一キログラムぐらいのウランが核分裂した時と同じぐらいの熱量が放出された。爆心地は地上だつたから、多分半径五百メートルにいた人々の生存は絶望的だらうね」

そう淡々とか語る少女とは対照的に、私は動搖をより一層深めていた。

確かあの建物の近くには、森の間に家を建てて、土地を利用して自給自足を行つていい比較的『近代的な』暮らしを行つていい集落があつたはずだ。

「どうして・・・そんなことが起きたの？」

どうこういとなのか全く分からず、十歳の少女にまるで頼るよう

に質問をする十九歳。

はたから見たら既に奇妙な光景だけれど、少女が楽しむように語る様子は、さらにその光景から現実感を奪つていった。

「どうしてつて？それはね、君があの男を、この世界を憎んで、消し去つてしまいたいと望んだからだよ。この空間は人の意思を尊重する。だからこの空間はそれに答えて、核融合炉のエネルギーを少しだけそつちの世界に放つた。それだけのことだよ。

これが一年前とかだったら、こんなことは起こらなかつただろうけどね。核融合炉のエネルギーを無秩序に放つなんて、ローラ・ゼロの意思が許さないだろうし。まあそれだけローラ・ゼロの意識が弱くなつてしまつているつてことなんだけど。

昨日の、国が一つ滅びたことも、それが原因だね、核融合炉の膨大なエネルギーを、ローラ・ゼロの意識が弱くなつてしまつた今、抑えきれなくなつてしまつたんだ。こここの空が赤くなつてしまつたのも、それの現れかも知れないね。

とにかく、いまの核融合炉を制御している意識が、君の意思に負けた結果、一時的にこの空間はローラ・ゼの意思に逆らつて君に従つたつていうことだね」

私は愕然とした。私がそう望んだだけで、それだけのことが起きてしまう。そう考えるだけで、体が震えた。それだけ、恐怖を感じた。

嘘だ、何かの間違いだと割り切ることもできたかも知れない。いくら廉とはいえ、間違う事も多々あつたりもするのだ。でも、私はもう気づいてしまつていた。

この少女は、核融合炉のことを話す時にとても嬉しそうなのは廉と同じだ。けれど、この少女はあまりにもあつけらかんとしている。世界を愛しているがゆえに命を絶つと宣言したあの暗さが、どこにも見当たらぬのだ。

まさか・・・」の子は・・・。

「あ、そうそう。なんで僕がこんなことを知つているかも話すんだ

つたね。

僕が生まれたのは、三年前、僕らが『聖域』の前で記憶を失った時だよ。君はある時、核融合炉に飛び込むという淡い願いを持つ同時に、彼を、廉を欲した。その願いを高次元核融合炉が受け取ったんだ。

そして、君はこの空間にこの姿で残り、僕が君から分かれて生まれた。君の持つ廉のイメージを受け継いでね。結果、記憶は持たないけれど、いっぽしの一般知識だけを持った僕が、現実世界に現れたつていうわけさ。今思えば、それがこの空間の歪みの兆候だったんだろうね。普通、ここには人が入ることは出来ないから。

君が僕のことを廉だと思ったのは無理もない。何せ、僕は君の持つ廉のイメージそのものなんだから。

まあ、僕が君の首を絞める夢を見たのは、なんていうか出来すぎた話だと思ったね。君のせいで、母さんと父さんが死んでしまったことの贖罪のつもりだったんだろうけど、そんなの完全な一人芝居だよね」「

予感は、していた。

けれどはつきりと言わることで、私はこの三年間ただ逃げていたことを否応なく見せつけられた。人格をこんな風に分離して、廉のイメージだけの人格で一年を過ごし、この一年は別の名を名乗つてあの国から逃げてきて。

もう私は何を拠り所にしていいか分からなくなっていた。それと同時に、自分がそんな自己満足でしかないものに頼らなければならなかつたことに気が付く。

激しい自己嫌悪で歯を食いしばる私を一瞥すると、少女は急に真顔になり、どこまでも広がつていてる海に視線を移した。

「本当は、僕は君に戻ることで消えるはずだった。でも、あの時、僕は消えることを拒んだ。君の廉に居なくなつて欲しくないという思いが、僕にそう望ませたんだ。

結果、君がそっちの世界で鏡音凜かがみねりんとしてマンションの一室に現れ、

僕はこの姿になつてここに残つた。

まあ、それから君はすぐに凜といつ名前を捨ててしまつたんだけどね。

そして、それから僕は、もう君の持つ廉のイメージだけの存在では無くなつた。その頃から、僕はこの空間の意思、もとい、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るよつになつたんだ

少女はどこか寂しげな表情を浮かべた。

「これで君の質問には全て答えたよ。かわりに、とは言つちゃなんだけど、今度は僕のほうから質問させてもらおうかな。次はいつ会えるか分からぬし、僕はそっちの世界には干渉できないからね。僕が君に聞きたいことつていうのは、君がこれからどうするかってことなんだよ」

私はそんな質問にただ呆然とするだけだった。

聞いている話があまりにも現実離れしているからでは無く、これから私はどうするのかという問いに全く答えられないという事実に對して。呆然とするしかできなかつたのだ。

私のそんな様子を見て、少女はため息を吐いた。

「一応僕は君の一部だし、僕からの意見も言つておこうかな。決めるのは君だけ、何も思いつかないんだつたらやつてくれるよ嬉しい。・・・っ！」

少女が息を呑むと同時に、周りの空間が歪み始めた。少女が焦つた表情を見せる。

「くつ！ もう帰っちゃうのか！ とにかく、僕の頼みは一つだけ、廉の意思を探してほしいんだ。あんなふうに自殺をするんだつたら、廉が何かしらのメッセージを残さないはずが無い。僕が言つんだからそれは間違いないよ。それを見つけて、そしたら・・・」

少女がその後何か言つ前に、私の意識はこの空間から切り離された。

一瞬のうちに高次元核融合炉の空間から現実世界に戻った私は、そこで自分がしてしまったことの大きさを、否応なく見せつけられた。

眼下に広がっていたのは、巨大なクレーターだった。私は条件反射的に自分の位置を携帯端末で確認したが、そこは、「真実の火」の元アジトからほどんど離れていた。

そして、周りは見渡す限りの平野、いや、荒地と化していた。木々が消し炭と化し、現地住民が百年とかけて作り上げた「美しい」自然が、元が想像できないほど、破壊しつくされていた。

その光景は、私を無条件でその場にへたり込ませるには十分に圧倒的なものだつた。

これだけの爆発が起きたなら、あの男も生きてはいないだろ？。

・・・いや、それは私が望んだことではなかつたか。

あの時の憎悪が呼び覚され、私は醜く顔を歪める。と、同時に、グミが撃たれた時の映像が、不意に頭の中で再生された。

そして、私は彼女すらも消し炭にしてしまつたのだという事実を知つた。

もう一度グミの顔が見たい。そしてまた自らの罪を分かち合いたかつた。罪という思い枷を、唯一分かち合い、共感できる少女とまた語らいたかった。

でも、彼女は、もう形すら残つていない。それをやつたのは・・・。  
「うわあああああああああああああああああああああああああああああ！」

ただただ叫んだ。私の理性はどこかに吹き飛び、獣か何かのようにな吠え続ける。ほとんど暴力的と言つていいほどの喉の使用に、声帯が耐えられるはずもなく、すぐに私の声は風のよつた音しか出なくなつた。

それでも叫び続けた。憎悪と、恐怖と、悲しさと、後悔が入り混じり、加えてこの世界の理不尽さを呪う感情が、それこそ私を内側

から爆発させるかのように溢れ出て、私に口を開かすことを許さなかつた。

感情の奔流に身を任せ、叫び続けた私は、自分の活動限界が来たのにも気が付かず、意識を闇に落とした。

どうやら、私はそれからかなり長い間氣を失っていたようだ。目を開けると、そこには見慣れた白い天井が見えた。意識ははつきりしなかつたけれど、体がこの場所を覚えていて、ここが境界の研究所であることに気が付くのにはさして時間は掛からなかつた。仰向けて寝ている体勢から上体を起こす。窓の外から見える景色から、もう遅い時刻であることが分かつた。

ぼんやりと窓の外を見ていると、これまでの出来事が少しづつ意識に上つてきた。

「真実の火」の元アジトにグミを探しに行つたこと。そしてそこでグミが撃たれ、怒り狂つた私はグミを撃つた男に殴りかかり、私はそのまま高次元核融合炉の空間に飛ばされたこと。そしてそこで私の一部だという少女から様々なことを聞かされたこと。

それから・・・。

そうだ、それから、あのクレーターを見たのだ。

ぎゅっと唇を噛み、俯いていたところに、誰か人が入つてきた。

「凛！ よかつた！」

声音からも、その呼び方からも、入つて来たのは美玖だとその姿を見なきでも分かつた。

「凛つたら！ 私達の誰にも連絡も入れないでここを抜け出すなんて、私すごく心配したんだからね！」

私は美玖の言葉に全く反応せず、ただ俯いていた。そんな様子を見た美玖は、気まずそうな声音になる。

「・・・凛の行つた先で何が起きたのかは、大体予想がついている

わ。あなたは、あのクレーターの畔で、一人だけ生き残っていたし、意識を失っていたあなたは、とてもひどい顔をしていたって聞かされているわ」

それから美玖の口調は、少しばかり強いものとなつた。

「凛の居場所は、あなたの持つていた端末のおかげですぐに分かつた。でもね、凛がこの研究所から抜け出していたのに気付いたのは、グミから私にメールがあつたからなの」

それを聞いて、私は弾かれたように顔を上げた。

「え・・・」

「私も驚いたわ。あの頑固者なグミが、私に『助けて欲しい』って伝えてきたのよ。自分が知つてしまつた事実はあまりにも危険で、残酷すぎるつて。だから私達に力を貸して欲しいつて。もちろん私はその内容を確認したわ」

美玖がまるで我が子を自慢するような得意気な表情になつた。

「あの子は偉いわ。もし私が同じ立場だつたら、一人で抱え込もうとしていたかもしれない。それほどあれは危険な情報だつたわ。もしあれが境界の内側の人々の間に広がつてしまつたら、それこそ今とは比べものにならない混乱が起きるわ」

それから美玖は、いつになく真剣な表情になる。

「凛、よく聞いて。レオン・ゼロの研究データによると、この前の事件の、高次元核融合炉のエネルギーの流れが不安定になつた原因は、核融合炉を作つたローラ・ゼロの『意思の影響力』が、弱まつてしまつたことなのよ」

私は目を見張つた。あの空間に入つていないので、レオン・ゼロはそこまで突き止めていたのだ。しかも、事前に。

「それで、このままだと・・・」

「ローラ・ゼロの意識の影響力が消えてしまつたら、核融合炉が消滅する・・・か」

私がそう言うと、美玖は首を横に振つた。

「私も最初はその程度で済むと思つてた。それだけでも人類はエネ

ルギーの供給源を失つてしまふから、大混乱は免れないでしうけど……

美玖は、躊躇いがちに口を閉じたが、迷いを振り切るよつに首を振つた。

「高次元核融合炉のある空間は、厳密に言ひと異空間にある訳では無いわ。元々この世界は四十数個の次元で構成されていると言われていて、私達がこうやって存在している空間は、それらが折りたたまれて、三次元の空間と、一次元の時間が存在している。

高次元核融合炉は、その折りたたまれた次元を広げて作られた場所に作られているの。

その空いた空間だつて、少しづつ溶けていつて、最後には消えてしまはずだつたのだけど、ローラ・ゼロが核融合炉を作つたことで、その空間は存在が固定されたんだわ。

でも、もしそこでローラ・ゼロの意識……核融合炉を作るという意思が消えてしまふと、それによつて固定されていた空間自体が融解を起こしてしまつ。

空間はそのまま消えるだけだけれど、核融合炉を作つてゐるのは、あくまで私達の世界の物質。つまり核融合炉の空間が消えてしまふと……」

美玖は重要な事を言ひ前に一呼吸おく癖をかなり大袈裟に披露してから、言つた。

「核融合炉はこちらの世界に來てしまふ。そんなことが起きたら、私達は、人類は……いや、地球上に住む生物の全てが消え去つてしまふ」

驚きは、した。けれど、それは私の中にはただの事実としか伝わらず、何の感情も覚えなかつた。

廉と、グミが居なくなつてしまつたこの世界では、何もかもが無意味に思えたのだ。そのせいで、人の意思が時間経過で消えてしまふほど脆弱であることを、私はとても素直に納得した。

そんな私の心情を知つてか知らずか、美玖はあまりにも意外な出

来事を伝えた。

「まだ私は見ていないけれど、あなた宛てに、グミからメッセージがあつたわ。まったく、グミらしいわ。直接あなたに送るんじゃなくて、私に伝言として伝えるなんて、変なところが頑固なんだから」「えつ・・・！」

あまりに意外な言葉に、私は間抜けな顔で美玖の顔を見つめた。その眼には自らの使命を果たそうとする意思が、手で触れられそうなほど強く宿っていた。

「見るかどうかはあなた次第だけど・・・」

私は束の間躊躇つた。自分が守ることが出来なかつた相手から、まさかメッセージが来るとは夢にも思わなかつたのだ。

けれどそれを見るか見ないか、といつのは、明らかに愚問だ。

「見せて・・・」

私がそう言つと、美玖は頷いて、立ち上がつた。

美玖が自分の研究室のコンピュータを操作するのを、私は緊張した面持ちで見ていた。

情報技術の発達で、ほとんど無くなつたデータの読み込み時間でも、今の私には無限にも思われた。

けれどそんなことは完全に気持ちの問題で、一分も経たずに美玖の操作するポインタが、送り主がグミのメールのアイコンで止まる。題名は、付いていなかつた。

そこまでやつておいて、美玖席を立ち、私を見た。ここからは私に読んでほしいということだ、流石に「一年間も一緒に過ごしていると、このぐらいの意思の疎通は一秒と掛からない。

私はコンピュータの前に座り、マウスを握つた。

たつた一回アイコンをダブルクリックする。それだけの事なのに、私の心臓は嫌というほど脈打ち、手を震えさせた。

そして、私は手の震えかも意図かも分からぬ手つきで、そのアイコンを開いた。

『先ほどは身勝手な内容のメールを送ってしまったで、ごめんなさい。でも、もう一つだけ聞いて欲しいことがあります。』

ローラさんに会つたら、このメールの内容を見せて欲しいのです。ローラさん本人しか見ることの出来ないように、簡単な質問を付けておきます』

そしてその質問とは、『のよつた内容だつた。』

『わたしの父親の名前』

『どうにかしてハッキングしようとしたんだけど、あまりにもロックが厳重すぎて、私には解くことが出来なかつたのよ。この質問の答えも分からぬからどうにも手出しき難くて……。』

凛、あなたは何か聞いているの？』

美玖がそう言つてゐるのを聞きながら、私はグミの質問に完全に、美玖の質問には間接的に、キーボードを叩いて答えた。

『レオン・ゼロ』

背後で、美玖が息を呑む音が聞こえた。そういうえばグミは自分の事を美玖に話していなかつたんだつた。まあ私がこれを聞いたのもかなり最近のことだけれど。

まさかあれほど重大な情報の入手先が、グミの父親だつたとは、美玖も想像出来なかつたのだろう。

その単語が入力されると同時に、新たな文章が表示される。

『突然研究所から出るような真似をしてしまつて、ごめんなさい。美玖さんにはもう伝えてあります、私が研究所を出たのは、私の父の研究データを手に入れるためです。』

一年半前のあの事件で、わたしはこの武装集団が父の遺体を運び出す時に、父の手のひらからメモリースティックが落ちるところを見ました。

保護された後、わたしはそのことを思い出して、密かにそのメモリースティックが回収されることを望んでいました。そうすれば、父が変わつてしまつた原因が分かるのですから。

でも、それが保安部隊に回収されることはありませんでした。もし、境界の研究所に渡つていたら、必ず内容が明かされるはずです。わたしはそれで、やつらがあのメモリースティックを回収していましたことを知りました。

あの類の武装集団ならば、必ず情報を政府との交渉に使うはずです。それなのにやつらは何の動きを見せてこない。明らかに、やつらは父の掛けたロックに手を煩わせていました。

ちなみにこのメールのロックも、父のものを参考にしています。ですから、もし美玖さんがこれを解こうとして出来なくても、気にしないで欲しいと伝えて下さい。

話を戻します。それから、事件から一年ほど経つた時から、わたし宛てに奇妙なメールが届くようになりました。

要約すると、おまえの父の秘密が知りたいか、ならば真実の火のアジトへ来い、と言つような内容です』

私はこの時、境界の外に散歩しに行った日の、あの不可解な言葉の意味を知った。

大切な人が、自分や誰かの命まで犠牲にしてまで守りたかったものとは何か。

グミは、彼女の父の研究の内容を知りたがっていた、しかし同時に、グミはそれを恐れていて、それを知るために憎むべき相手の誘いに乗らなければならない。

グミはその事を、思い悩んでいたのだ。

『もちろん、それは間違いなく罠でしょう。もしわたし指定期所に行つてしまつたら、データのロックを解いた途端にデータを奪われて、わたしは殺されてしまうことは目に見えていました。保安部隊を連れて行つても、すぐに感づかれて逃げられてしまうでしょう。

だからわたしは機会を、やつらが焦れて動き出す時を待つていたのです。

でも、昨日のあの事件が起つて、父があれほどまで恐れていた

「は、これだつたのではないかと思つたのです。だとしたら、それはもう取り返しがつかないところまで来ているのではないかと思って、わたしは居ても経つてもいられなくなつたのです。

今、わたしは眞実の火の元アジトにいます。既に父のデータの口ツクを解いてしまつてゐるので、やつらに見つかつてしまつたら、もうだめかも知れません。

一言で言つてしまふと、父が恐れていたことは、人類はこのままだと滅んでしまうという事です。研究データは、既に美玖さんに送つてあるので、詳しいことは美玖さんに聞いて下さい。

わたしから言えるのは、今人類を救えるのは、核融合炉と繋がりを持つてゐるあなたしかいないという事です。でも、それをしてしまつたら凛さんは多分生き残ることは出来ないでしょう。

わたしは絶対に凛さんを死なせたくありませんから、その方法を詳しく教えることは出来ません。

わたしはどうすれば人類が助かって、凛さんも死ななくて済む方法を探します。レオン・ゼロの一人娘として、絶対に見つけてみせます。

ですから、待つていてください』

それがグミの遺した最後の文章だつた。

不意に、グミがあまりにも熱心な様子で携帯端末を見つめていた姿が脳裏に浮かんだ。

自らの使命を全うするかのよつた、思いつめた瞳。

グミは、あの時必死に考えていたのだ。一つの結論で満足せず、もつと良い方法を見つけるために。

そうだ、あの瞳はあの時未来を見ていたのだ。過去に囚われて、「逃げ続けて」來た私とは全くの反対だ。まるであの時の廉のようだ。

そうやつて未来を見ることが、とても大事な事のように思われた。でも、そのグミも死んでしまつた。廉も、グミも、もうこの次元空間上のどこにも存在しないのだ。

私は逃げ続けたことで、廉の遺してくれた言葉を無駄にしていた。しかも最悪な事に、そのことをグミが死んだことでしか気づけなかつたのだ。

だからこそ、私は思った。もうこれ以上、廉の遺してくれたものを無駄にしてはならない。罪を感じているなら、その人の意思を未来に連れて行くべきなのだと。

「美玖」

私と同じようにコンピュータの画面を見ていた美玖に、私は向き直つた。

「私はグミのやううとしていたことを繼ぐうと思う。高次元核融合炉と繋がっているのは私しかいないんだし、グミのこのメールを見たのは私と美玖だけ。核融合炉の融解を止めるのは簡単な事ではないだろうけど、きっとやり遂げて見せる。そしたら・・・」

私は、今でもはつきりと覚えている廉の顔を思い浮かべる。その瞳が見ていた未来も含めて。

「廉が目指していた世界に少しでも近づけるよう、出来る限りの努力をしようと思う」

美玖が驚いた表情になり、少しだけ沈黙が流れたが、それはすぐに美玖によつて破られた。

「うん」

相槌と共に、美玖が目に涙を浮かべる。

「廉とグミを、喜ばせてあげようね」

今までになく強く、私は頷いた。

「」の時、私は十代になつてから初めて、「努力」という言葉を、自分の意思で言つた。

それに気づいたのは後になつてからだつたけれど、とても不思議な事にそれは私の決意をより強くするための力になつてくれた。今まで下らないとあれほど思つていたのに。

## 七、決意（後書き）

前話からまたしても三週間も掛かってしまいました。遅くて申し訳ないです。

今回は、誤算をしていました（汗）

七話目は、六話目で全て入れる予定だったのですが、そんなことできるわけがなかったのです。

突然ですがいくつか解説をしようと思います。たぶん長くなるのでめんどくさかつたら読まなくともいいですよ？

まず一つ。話の中に出てきた「森の間に家を建てて、土地を利用して自給自足を行っている比較的『近代的な』暮らしを行っている集落」というのは、私が社会科に教科書のコラムで読んだことがあったもので、たしかなんとかフォレストリーとかいう名前だったはずです。つまりは、ある程度森を切り開かずとも、ログハウス的な家に住んで生活水準を落とさず暮らすこともできる、という考え方なのです。

二つ目。恒例の詩が、今回では凛の回想的な内容になつております。これは、この物語が最終局面に入つてることを意味します。まあ言つてみれば今までの詩は読む人にちょっととした誤解というか間違つた予想を与えるための罠のつもりでした。

が、しかし。

私の意図しないところで最終話の非常に重要なフラグを作ってくれちゃつっていたのです。

というわけで最終話に対する補足のよつた形になりました。まさかここで文章が独り歩きするとは・・・。執筆とは恐ろしいものです。ところでこんな詩を吟じているのは誰でしょう？ここまで読んでいるならお分かりだといいなと（ちゃんと伏線が効果を發揮しているかどうか、という意味で）思つておりますが、これはもう一人の凛の仕業です。凛の少し意地悪な性格と、廉のちょっと大袈裟な言い

方が合体した感じですかね。（実はすゞく重要）

さて、上に書いた通りこの物語はここから最終局面を迎えます。で

きるだけ悩みながら、早く投稿できるように頑張ります。

感想お待ちしております。送られたらほぼ確実に返すと思います。

## 八、回帰

それから私と美玖は、核融合炉の融解を止める方法を、どうやって探すかを話し合つた。

高次元核融合炉は、元々はローラ・ゼロの意思によつて作り出されたものだ。だから、私の意思を用いて核融合炉を維持する、とうのが一番手つ取り早くて確実な方法だ。

しかし、それには超えることが難しい壁があつた。

ローラ・ゼロの意思是、核融合炉を作ると同時に、核融合炉を守つているのだ。しかも、それはかなり強い干渉力を持つつていて、意識を送り込んで形を変えるどころか、核融合炉に近づくこともできぬ。

そして問題は、あの空間自体がローラ・ゼロの意思を核として出来てしまつてゐるという事だつた。あの空間は、核融合炉があることによつて、その存在を固定されている。つまり、核融合炉を作つた意思が消えることは、そのまま空間の消滅に繋がつてしまふのだ。「せめてローラ・ゼロがどんな思いで、核融合炉を作つたのかが分かればいいんだけど……。

それが分かれば、ローラ・ゼロの意思に偽装して、核融合炉を凜の意思の干渉下におけるかもしれない」

美玖はそう言が、ローラ・ゼロは約百年前に死んでしまつてゐる。いまさらその思いを知ることは叶わない。しかも、廉が言つていたようにその功績を知る者はほとんどないのだ。

その時、私はあの空間でもう一人の自分が言つたことを思い出した。そういえばあの少女は、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るようになつたと言つていたけれど……。

「凜、どうしたの？」

そんなことを考えていたら、美玖が訝しげな表情を浮かべて聞いてきた。これまで活発な議論を繰り広げていたのに、私が急に黙つ

たので気になったのだろう。

美玖の言葉と同時に、私はもう一人の私の事と、あの少女と話した事をまだ美玖には伝えていないことに気が付いた。

「実は、あの爆発があった時に、私は核融合炉の空間に飛ばされたの。そこで、核融合炉の空間の側にいる私に会ったの」

普通に聞いたら突拍子もない私の発言に、美玖が驚愕の表情を浮かべた。

「それじゃあ・・・凛があの空間と繋がっているのって・・・」

「うん、あの空間にその私が居ることで私自身も核融合炉の空間と繋がってるんだと思う。」

それで、その私は、核融合炉の空間にある、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来るって言つて・・・」

私は、核融合炉がローラ・ゼロの意思に一時的に逆らって、そのエネルギーをこの世界に少しだけ放出したこと、そしてそれが原因での爆発が起こった事を話した。

その原因が私だったことは、言えなかつた。それを口にするのは、どうしても恐ろしかつた。

結局、私はまたしても逃げたのだ。

その埋め合わせにはならないと知つても、核融合炉の空間にいる私が自分の廉に対するイメージから生まれたことも話した。それが無意識下での完全な自作自演だつたことも含めて。

「そう」

それを聞いて、美玖は静かに頷いた。

「ずっと疑問に思つていたのよ。凛があの時記憶を失つたつて聞いて、実は凛に会う前に瑠香と会つていたの。その時にね、凛の一人称が僕になつていたことと、たまに廉が言つていたことを全く同じイントネーションで言つていたこともあつたつて聞いたの。」

記憶を失つっていても、自分の癖や口調は変わらないこともあるつて事は聞いたことがあつたけれど、他人の口調になるつていうのは聞いたことが無かつた

私が自虐的な思いと共に、自分を陥れるような事を言おうと口を開こうとしたとき、美玖がそれを遮るように言った。

「でもね」

美玖は諭すような優しい口調で話す。

「それは凛が廉のことを大切に思っていたことの表れなんだと思つ。そうでなきやそんな事は起きないわ。それだけ凛は廉の事を強く思つていた。そうでしょ？」

だから、それだけは覚えておいて欲しい。凛はそれほど強く人を想えるつていう事に自身を持つて欲しいの」

美玖は少し照れくさそうに笑つた。

「うん・・・」

そういう風に言わると、なんだかこっちも照れくさくなる。ものは言ひようだけれど、それを聞いて私は少し気持ちが軽くなつた気がした。

「核融合炉の空間にもう一人の凛がいるなら、とても強い味方になるわ。また会つて、ローラ・ゼロの事を聞く」とは出来ないかしら？」

私は少し考え込んだ。

もしあの少女が、ローラ・ゼロの意思、つまり彼女がどのような思いを以て高次元核融合炉を作ったのかを知つていれば、美玖の言う様にその意識に偽装して、核融合炉の空間の融解を止めることができるものかもしれない。

「核融合炉の空間に入ることはそんなに難しい」とじゃ無いわ」

美玖は少し驚いた表情を見せる。この一年間、私は空間転移をする時以外では、ほとんど核融合炉の空間に入ることは無かつたのだ。そりやそうだ、落ちたら確実に死ぬであろう高さから飛び降りるのは、たとえ安全だとわかっていてもいい気はしない。私がバンジージャンプを嫌う理由がここにある。

「屋上に行きましょう」

私は少しこだまら笑みを浮かべて、立ち上がつた。

「よつこりしそ・・・と」

外は清々しい朝の空氣でいっぱいだった。私は核融合炉の空間から帰つて来てから実に一日半も氣を失つていたことを美玖から聞いて驚いたけれど、今度は私が研究所の屋上のフェンスを越えるのを見て、美玖が目を丸くする。

「ちょっと凜、危ないよ」

「うん。だから美玖はこっちに来ないでね」

美玖は私のそんな言動に驚きを通り越して呆れた表情をする。

「何をするつもりなの？」

美玖のもつともな疑問に、私はすつとぼけた口調で返す。

「ここから飛び降りることで私が確実に死ぬ状況を作り出して、核融合炉の空間に私自身が行くのよ」

当然ながら美玖が絶句する。傍からみたら飛び降り自殺をしようとしている私を、美玖が止めようとしているようにしか見えない。しかも、驚愕の真実を告げられたようなドラマチックな場面さえも連想させる。

私はそんなどうでもいいことを考えるほど、「飛び降りる」という事がどれだけ心配されるかなど考えていなかつたし、それが態度にも出ていた。

死ぬかもしれないといつのに全く意に介していない、ある意味狂人的な雰囲気が。

「大丈夫・・・なの？」

なので、美玖がこのよつた態度をとるのは当たり前だった。美玖が心配するのは「もつともだけれど、安全なのは実証済みだ」。

「うん。一年前には、記憶を取り戻した時にこの方法を使ったの。なんだかんだで話しそびれちゃったけど、今のところこれが一番手つ取り早い」

そう言つて、私は建物の淵に立つ。案の定、眼下には恐怖を嫌でも感じさせる距離が広がつてゐる。

これだけ氣にしていない様子を見せつけておいて、私は怖さで目を一瞬背けてしまつ。後悔してしまつたのも「一年前と変わらずだ。私が自分を情けなく思つたのは言つまでもない。

「それじゃあ、ちょっと行つてくるね」

私が手を振ると、美玖は不安げな表情のまま頷く。

「氣を付けてね・・・」

私は頷くと、少し助走をつけて飛び出した。ダイバーよろしく頭から真っ逆さまに落ちていく。ちょっとカツコつけたつもりだったのだけど、そんな飛び降り方をした私は内臓が潰れると思うぐらいの恐怖に晒された。

しかし境界の研究所がそこまで高くなかつたことで、私に目を閉じるほどの時間は無かつた。

地面につく瞬間、私は真っ青な光に包まれる。

それは、巨大な筒だつた。

膨大なエネルギーが、作り出されては消えていく。太陽のような暴力的な輝きが、その力を誇示しているような光景に、私は声も出なかつた。

そして私はその「意思」によつて、そこからはじき出される。

「また来たのかい？こんな短期間でまたここを訪れるなんて、いつたいどんな生活をしているんだい？」

気が付くと、見渡す限りの空と海。

「あなたは私を通してこつちの世界を見ているんでしょう？」

あの時と同じ、真っ白なワンピースを着た少女はぱつが悪そうな表情を見せた。

「なんだか手厳しいね・・・」

「あんたは私の一部なんでしょ？自分ぐらいには厳しくしなきゃ」

「そんな感情論的な私の受け答えに、少女はため息をつく。

「わざわざここに来たってことは何か用事があるんでしょ？」

「そ、あんたがローラ・ゼロの意識を読み取り事が出来るって言つから、それを聞きに来たつてわけ。私と美玖はね、ローラ・ゼロが核融合炉を作つた時にどんな感情を抱いていたのかが分かれば、彼女の意識に偽装してこの空間の融解を止めることが出来るんじゃないかって考えたのよ」

それを聞いた少女は、少し意外そうな顔をした。

「流石にあの研究所にいるだけあるな・・・。実はね、僕が君に廉の遺しているかもしないものを探してほしいって言つたのは、そのことに関係しているんだ」

廉の事と、ローラ・ゼロの意思。全く関係の無いようなことを繋げて話されて、私は訳が分からず怪訝な顔をする。少女はそんな私の様子を愉しむように目を細めながら話を続ける。

「僕は確かに、ローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来る。でも、今のところこの空間がどういう風に作られようとしたのかってことしか分からん。核融合炉が存在しているから、核融合炉を作つていう意思を見つけることはできるんだけど、その時にどんな感情をともなつたかっていうのは、上手く読み取ることが出来ないんだ。

どちらにせよ、ある程度その意思や感情に田星を付けとかないと、それを見つけることすらできないってこと

今までローラ・ゼロの意思を読み取ることが出来ない事は、分かつた。けれど、それがどう廉に繋がるのかが分からぬ。

「それでね、一つ引っかかったことがあつたんだ。僕の知ってる廉は、普通中学生が知ることが出来ないはずのことまで、核融合炉の事を知つてた。少なくとも、レオン・ゼロがローラ・ゼロの研究を使つことで名声を得たことなんて話は、一般国民に隠されていたはずなんだ。

しかも、そんな情報はあの研究所の中でも見たことが無い。君を通してそつちの世界を見ていたけど、どうもその情報だけが意図的に消されているような感じがしたんだ。

多分廉は、核融合炉の研究者の誰かが流した情報を見ていたんだと思う」

「……で私はこの少女が何を言おうとしているのかが分かった。その情報が何故、五年前までネット上で見ることが出来て、今は跡形もなく消えているのか。

例えば、その研究者が何らかの理由で研究が嫌になつて失踪していたからとか。

「そんな情報を流せるのは、あのグミの父親、レオン・ゼロしかない。もし、本当に廉が彼の情報を見ていたんだとしたら、全てに納得がいく。

だから、廉は僕達が知らない事を知つていた可能性があるんだ」

少女は、もう完全に真剣な表情だ。

「あれから君たちがグミの手に入れた情報を読み返してたときに、それが確信に変わったよ。核融合炉の誕生の秘密は、すなわちローラ・ゼロの生きた証である。レオン・ゼロの研究成果が、あれだけのはずが無いんだ」

「つまり、ローラ・ゼロが核融合炉を作った時の感情を知るために、その感情がどんなものだつたのかにある程度目星を付けなければならぬ。で、その情報を廉が遺していること知れないうつてことでしょう？ あなたの説明は回りくどいのよ」

私がうんざりして言うと、少女はため息交じりに返す。

「物事の前後関係を知つておくのは大事なことだと思うんだけどね。・・・まあ君の言う通り、廉が何か遺していなか調べて欲しいつて言つたのは、そういう理由からなんだ」

「一石二鳥だつた。この少女が何故あのような事を聞いたのかといふ事と、ローラ・ゼロの感情を知る手がかりが同時に掴めたのだ。私は満足げに頷く。

と、そういえば。

「ここからは、どうやって出るの？」

少女は、またため息をついた。

「僕としてはもうといてくれると話し相手になるからいいんだけど、一刻もはやく出たいのかい？」

「当たり前じゃない」

私がすぐに返事をすると、少女はあからさまに残念そうな顔をする。

「即答とはね・・・。分かったよ、君を研究所の屋上に戻す。美玖はまだいると思うから、ちゃんとここに話をすようにね？」

「分かってるわよ」

私のつづけんどんな返事をよそに、少女は私に近づき、手を握った。

一瞬のうちに、私は研究所の屋上に戻っていた。目の前にはフロансの菱形模様に彩られた美玖が見える。

「凛！ よかつた」

そう言って美玖は私に近づいてくる。私はそのとても緊迫していたであろう影がありありと浮かぶ顔を見て、唐突に意地悪をしてやりたくなった。

空間転移を使い、美玖の背後に現れる。美玖には、私が消えたようになに見えただろう。

案の定、美玖はきょろきょろと周りを見回している。そんな美玖に私はそっと近づいた。

「ワッ！」

「ひゃあっ！」

大声を上げつつ、両肩を勢い良く掴むと、美玖は面白いように驚く。そんなことをやりつつ、世界が滅びるかもしれないのに何やつ

ているんだか、と思つたのはある意味奇跡だと言えるかもしれない。

「ちょっと凜！何のつもりよ！」

「「めんごめん、美玖があんまりにも心配そうな顔をしていたからさ、なんだか意地悪してみたくなっちゃって。それにしても、美玖はす」「くい反応をするわね」

そう言って私は笑いだす。

「心配して損した・・・」

そんな私の様子に美玖は頬を膨らませたけれど、すぐにいつられて笑い出した。

青い空と、それに響き渡る一人の笑い声。

なんとも平和的な光景だつた。

ひとしきり笑つたあと、流石に事を起しきさなければと私は話し出す。

「えつと、向こうに行つて分かつた事なんだけど、今のままじゃローラ・ゼロの意思を読み取ることは出来ないって。読み取るためには、その感情にある程度目星を付けとかないといけないみたい」

それを聞いて、美玖は少し残念そうな顔になる。

「でも、向こうの私は、どうすればそれを知ることが出来るか考え付いていたわ。

グミの送つてくれた情報の中で、あの時廉が話した事が無かつたつてことに目を付けていて、あのデータがレオン・ゼロの研究の全てじゃないのかも知れないって考えたみたい。

廉の話していたことは、当時的一般国民には知らされていなかつたことだつたの。もしかしたら、レオン・ゼロはあれ以外の研究データを元々ネット上に公開していく、失踪したときに全て消去してしまつた可能性がある。

だから、廉はあの時レオン・ゼロの研究資料を見ていた可能性が高いのよ。

核融合炉の誕生の歴史は、ローラ・ゼロの生きた証みたいなものだから、あれだけ核融合炉に詳しいレオン・ゼロなら、当時の彼女

のことも知っていたかも知れない」

そう話しながら、私は空恐ろしいものを感じた。私と美玖は何度か核融合炉の事についてネット上でも情報収集をしてみたことがあつたけれど、廉が話していた事はどこにも載つていなかつたのだ。普通、どんな情報でもどこかしらに転載されているものだが、それすらないという事は、それだけ興味を持たれていないということだつた。

人というのは、自分が頼つているもののこと、ここまで知らなくとも気にもかけない。そんな事実に私はもどかしさの混じつた恐怖を覚えた。

「ということは、廉が私達は必要としている情報を知つていたかも知れないつていうこと?でも、廉は・・・」

「これは核融合炉の空間にいる私が言つていたんだけど、廉があんなふうに姿を消すんだつたら、何か私にメッセージか何かを残さないのは、廉の性格からしてありえないと思うの」

私はあれから、廉のパソコンを見てみようとも思ったのだけれど、どうしても怖くて、見ることが出来なかつたのだ。

「そうよね、それは一理あるわ。それだつたら凛は一度帰つて、私はここに残つて調査して、何か分かつたら連絡を取り合いましょう」

「うん」

私は強く頷いた。

そうして、準備と整えるために自分の部屋に戻つうとしたとき、聞きなれた声が唐突に聞こえた。

「話は聞かせてもらつたよ」

見ると、屋上の入り口には所長が立つていて、当然ながら私と美玖は度胆を抜く。

「い、いつから」

私が呟くように言つと、所長は不敵な笑みを浮かべる。

「壁に耳あり障子に目あり、だ。君達が美玖君の研究室に入つてから聞いていたよ。監視カメラを切つたからと言つて、誰も聞いてい

ないとは限らない。あのような事件があつてからなら、なおさらだ」

私が言葉に詰まつてゐる様子を見ながら、所長は口を開く。

「非常に興味深い話だ。レオン・ゼロが失踪したとき、研究データも一様に消去されていた事は聞いていたのでな」

そう話す所長には、いつものような立場にそぐわない軽さは無い。「確かに、ローラ君の双子の弟が核融合炉の事をそれだけ深く知つていて、齟齬が無いのならその可能性は十分にあるだろう。

私も君達がその情報を入手しに行くのはやぶさかではない」

「でしたら・・・」

美玖がそう言つと、所長が遮るよつに言つ。

「だが、事はそう単純では無い。

先ほど、ローラ君に対して政府から捕捉命令が出たのだ。三日前のあの事件と、境界の外でも爆発、その事に君が関わつてゐるか調べるためだ」

愕然として、言葉も出ない私に、所長はさうに言葉を重ねる。

「三日前の事はともかく、あの爆発ではローラ君がその場にいた。これは何があつたとしか思えん。美玖君にも話していいようだが、あの場で何があつたのかね？」

所長の目には、一切の妥協を許さぬ厳しさが宿つていた。私はそれを見て、境界の研究所は何かしらの情報を手に入れている事を直感した。

あの爆発の原因が私であることの根拠を。

私は觀念して、あの爆発の原因を話した。もうどうにでもなれという投げやりな感情が私の頭の中を占め、美玖が驚愕の表情を浮かべてゐる事にも関心は向かなかつた。

「ふむ、そういうことか・・・」

話を聞き終わつた所長は、しばらく考え込むように額に手を当てていたが、その顔には特に驚きなどの感情は見られなかつた。

「つまり、核融合炉は一瞬でも君の意思を受け取つたということかね？」

私が頷くと、所長は神妙な顔をする。

「このまま君を政府に受け渡してしまつてもいいとは思つていたが、どうやら我々にはあまり時間が残されていないようだ。一度ほかの意思に負けた意思は、その意思に完全に負けるのに大して時間は掛からないのが常だ」

所長がもう一度私を真正面から見る。

「あの爆発の事に関しては、君が糸弾を受けないといつ保証は無い。だがその前にもう一度、君に別の人間として動いてもらひ。少しでもある手がかりを、無駄にするのは度し難いのでな。君はローラではない別の人間として祖国に入国し、情報を手に入れたまえ」

「・・・はい」

私が頷くと、所長は満足気に頷き返し、少し意地悪そうな笑みを浮かべた。

「そうだ、新しい名前は・・・どうするかね?」

美玖がちらりとこちらを見る。その眼に期待があることを私は目ざとく受け取つて、同時にこの所長には敵わないなと思つた。

「凛・・・鏡音凛にしてください」

私が静かに言つと、所長は驚きの由々しさで答える。

「いい名前だ」

この男、本当に気が利いているといつかなんといつか。私はそんな所長になんとなく対抗したくなつて、尋ねた。

「じゃあ、所長さんは自分の名前のことなどをどう思つてるのかしら?」

所長は少し驚いた顔を見せ、答える。

「私が所長になつてから、私の名前を聞いたのは君だけだよ。皆聞こうとしないのでな、少しばかり寂しく思つていた。  
かむいがくば 神威学歩。それが私の名前だ」

私はこのヨーロッパ系の男の名前がかなり日本風だつたことに関して大いに驚く。某ゲームの主人公（色白だつた）の名前がアフリカ系の名前だつた事を知つた気分となんとなく似ていた。

「母方が君達と同郷でな、この顔は父の方が色濃く出た。ギャップ

の一つだから若いころは良い話題の種になつたのだが……

「神威所長……つて」

美玖と私は顔を見合わせる。

「なんかイメージと違う」

私がそつと美玖が吹き出した。

旅客機の窓から見える地上は、やはり眩しいほどに光に彩られている。

私がここを離れてから一年が経つたけれど、これだけはちつとも変つていない。夜の華やかさではこの国に勝るものは無いだろう。私はこの国で使われているエネルギーが、人が「最低限文化的な生活」を送るためのものからどれくらい逸脱しているのか考えようとして、その尺が存在していない事に気が付く。

月々の電気料金は、どれだけ電力を使用しているかではなく、送電設備にどれだけお金がかかっているかに影響されるのだ。一つの家庭ですらそんなものなのだから、国全体でどれだけのエネルギーを使っているのかなんて分かりようが無いのだ。

旅客機はこの国的心臓部分にも見える一際明るい場所へ向かついく。

私の住んでいた「聖域」のある都市は、日本という国の中北部だけあって、空港もある。聖域を一旦見ようといつもはたくさんの観光客がこの便に乗るのだが、今日はあの事件のあつたせいか空席もある。

やがて旅客機が着陸し、私は空港に入り、入国審査を受ける。国籍はこちらのでは無く境界でのものだったことを、私は少しばかり寂しく思った。

久しぶりに見る日本語、空港に並ぶたくさんの商品と、それを売る店。それぞれの情報から、自分が欲しいと思うものを見つけて、

人々店に入つていい。私はなんとなく、誰も入つていの店が無いかどうか調べてみたけれど、当然ながらそんな店は存在しなかつた。そして私はその中のどの情報に惹かれるでもなく、真っ直ぐに出口を目指した。私が最初に行きたかったのは、あの聖域だったからだ。深い理由は無い。ただ、人類が滅びてしまうほどの事件に向き合つための覚悟を決めようと思つたのだ。

ここから聖域までは、電車に乗つて二十分ほどのところにある。私はその間、ホームや車内でまたしてもたくさんの広告情報に晒される。

一年前には気にならなかつたこの光景も、ほとんど広告の存在しない境界から帰つて来てみると、なんだか可笑しく思えてくる。結局、どんな会社も、繋がりを持つていなければ勝負なんてできやしないのだ。たとえ、どんなに個人が繋がりを持つていなくとも。

それは、奇妙に捻じ曲がつた構造に見えた。

やがて私は見慣れた町へとたどり着く。もう遅い時刻だつたけれど、華やかな街明かりと共に、たくさんの人々が行きかつている。境界の研究所の発表により、ひとまずは原因がはつきりしたことである程度混乱は無くなつているようだ。

私はそんな雑踏の中を歩いていき、全ての発端となつたものの裏側に位置する場所に向かつ。

時刻はそろそろ午前二時を回るところだ。私は悠然とそびえ立つ三つの摩天楼と、その間にある三つの掛けた扇と一つの丸を目の前にした私は、ここであつた出来事を一つ一つ思い出す。

廉がいなくなつてしまつた夜。記憶を失い、廉の疑似人格に入れ替わつてしまつた夜。魁人と会い、忘れないと言つてもられた夜。私にとつてもここは この街のこの場所は 特別な場所だつた。恐らく、ローラ・ゼロにとつても。

そう思つて摩天楼を見上げた瞬間、「それ」は現れた。

To meltdownの文字と、48:00:00:00の時

間表示。

それはタイマーにしてはあまりにもぼかげていて、私は口をわざかに開けたまま茫然としていた。

でも、すぐに直感する。

崩壊が始まつたのだ、と。

本音と建て前は必ずしも表裏の関係であるとは限らない。私がそのことに気付いたのは、やはり全てが終わつてからだつたけれど、「これ」は、つまりそういう事だつたのだ。

真つ直ぐで、素直で、残酷な思いがこの出来事を起しにしたのだから。

## 八、回帰（後書き）

前話から一ヶ月以上かかってしまいましたが、無事八話も書き終えることができました。一応初作ですので、いつ止まってしまうかかなり不安です。

まあ題材がこの炉心融解であるかぎりそれは無いと思います。終わりも見えていますので。

最初に言っていた八話まで到達してしまったわけですが、まだ三話ぐらい続く予定です。次の話では私がずっと書きたかった描写が出てくるので楽しみなのですが、試験がすぐにがあるので困つております。高校生であるうちは逃げられぬ宿命ですね。

## 九、探究

死刑囚には死刑執行の時期が伝えられることは無い。

けれどいつか死ぬことだけは分かる。だからいつ死んでもいいように心の準備をする人もいるし、はつきりとした期限が無いゆえにそれが出来ない人もいる。

しかし世界はそんな日本の制度を完全に無視するような形で、人類にはつきりと死刑執行の宣言をしてしまった。

To melt downの文字と。

48:00:00:00から始まつたカウントダウンで。

「なんのよ・・・」

私は思わず呟いた。キッチンタイマー、目覚まし時計云々、時間表示をするものにはだいぶお世話になつていてる身だけれど、こんなに馬鹿げていて恐怖を感じるものは見たことが無かつた。

それも当然だ。何せこれは人類の滅亡へのカウントダウンに他ならないのだから。

私はその文字が醸し出している奇妙な威圧感に気圧される形で、数歩後ずさる。私の頭の中といえば、早く何とかしなければという焦燥感でいっぱいだつた。

早く核融合炉の融解と止めないと、早くローラゼロの意思を見つけ出さないと、早く・・・。

気が付くと私は聖域に背を向けて走り出していた。

それからの事は、あまり覚えていない。その時私が恐怖に支配されていた事は明らかだけれど、気が付いた時にはあら不思議、私は二年前に住んでいた部屋にいた。

一年前から全く家具の配置も、本棚の中の配置も全く変わってな

い私の部屋。私がいつも使っていた椅子に座ると、放置されたことに抗議するかのように埃がふわっと舞う。

掃除、しどうかな。確かクローゼットの横に掃除機があつたはずだ。

そうして私は日常だつた場所に逃げ道を求めて、立ち上がる。と、見慣れた風景に何か異質なものが混じつている事に気が付いた。僅かに、だが確かに、その光はあつた。生命の輝きを連想させる、それでいて自分を消し去つてしまいそうなほど暴力に満ちた光が。

ベランダからその光は差し込んでいるように見える。私はそれにつられるようにベランダに向かつた。私の理性はそれを猛烈に止めよつとしたけれど、私の運動中枢までは届かない。

マンションの十三階から見えたのは、一際大きな摩天楼と肩を並べるよう天までそびえる、巨大な光の柱だった。

私のほかにその方向を見ている者はいない。代わりに向こう側のマンションから、僅かに太鼓か何かを叩くような音と、誰かの怒声が聞こえる。

確かに向かいはログハウス的な雰囲気をマンションで再現する、ちょっと変わった建物だつたつて。建てられてすぐに父さんと廉と一緒に見に行つたときに、木で作られた無駄に大きい螺旋階段があつたのを鮮明に覚えている。吹き抜けになつていて、駆け上がつた時に音が良く響いたのだ。

そこまで見聞きして、私はようやく理解した。  
逃げることはできないんだつて。

そう思つと、不思議と冷静になつた。この期に及んで逃げ道を探していた自分に対して苦笑漏らすほどには、状況をつかめてくる。境界での決意は、どこに行つてたのやら。

私は気を取り直すと、持ち主がいなくなつてからほとんど足を踏み入れることの無かつた廉の部屋の扉を開けた。

人にはそれぞれ物語がある。どれだけ平凡な人生だつと、十四

年も生きていれば立派な伝記を書けるぐらいのイベントはあるし、そんなことをしなくてその人の物語はどこかに存在する。

そこは悲しいほど、私の双子の弟の部屋だった。

本棚に置かれたたくさんの本。身長があまり伸びなかつたから買ひ替えることも無かつた、子供のころに父さんに買ってもらつた勉強机。あの時、廉が様々な情報を目にしていたであろうデスクトップパソコン。そして睡眠薬。

持ち主がいないからこそ、その影を連想させてしまうそれらを前に、私はしばし立ち尽くした。私と廉の境界線上で、廉の事を自分が思つていたほどには知らなかつたことをもう一度認識する。

そして、知りたいと思つた。世界を愛していると言つた私の双子の弟が、どうしてそう思い、高次元核融合炉を知り、そして逝つてしまつたのかを。

そうして、私は廉の部屋に満ちていた物語を貪つた。それは私が知つていた通りの廉の姿で、全て私が知つてゐる物語ばかりだつた。私の知らない廉の姿は、その中のどこにも無かつた。

それから、どれぐらいの時間が経つたのだろう。廉の部屋の中で私が見ていらない物は、廉の使つていたパソコンだけだ。

知ることも大事だけど、知らないほうが幸せなこともあるかも知れないと思つてさ。

廉は、この四角い箱を使って、いつたい何を知つたのだろうか。このパソコンは一応共同で使う事にしていたので、パスワードは知つていた。まあ私は自分でノートパソコンを買つたからこつちは使わなかつたのだけだ。

ログインして、デスクトップが表示されたとき、思わず私は息を呑んだ。画面に映つっていたのは、父と、母と、廉と私。

それは、母が殺されてしまつた日の写真に他ならなかつた。あまりにも脆かつた、日常と言う名の幸せをありありと思い起こせる笑顔が、私の目を射止める。

私が茫然としていると、画面右下でバルーンが「新着のメッセージ

があります」と、その存在をアピールした。

私がつられるようにそのバルーンをクリックすると、たくさんのメールと思しきデータが表示された。差出人の欄をざつと見ると、どうやらそれは親しい人々、私や美玖たちからのもので、どうやら廉は一部の人のメールをインターネットを開かなくとも見られるようになっていたらしいことが分かつた。

その中の一番上に表示されているメールの差出人と、日付に目が留まつた。日付は、廉がいなくなつてしまつた日の午前四時。そして、差出人の名前は、鏡音廉だった。

それが私の驚愕と罪悪感を煽つたのは、言つまでもない。廉はあれから、少なくとも一時間以上は生きていたのだ。どうして止めてやれなかつたんだろうと、私は何度も度思つても消えない問いをまた頭の中で反復する。

そしてあの少女が言つていたことは、本当だつた。廉はいなくなつてしまつ直前に、ここに何かを遺していたのだ。

束の間私は目を閉じて、深呼吸をする。この部屋には、廉の物語はあつても、廉の気配は無い。まるでここに彼の存在が吸い寄せられてしまつたかのようだつた。

私は、その未開封のメッセージを開いた。

『ただ一人の家族の君へ。

これが読まれる頃には、僕はもうこの世界にいないだらうけど、君は元気にしているかな。突然あんなことになつて、とてもびっくりしていると思う。正直、僕は君に会わせる顔が無いよ。

君は僕の事を思い出したくも無いかも知れない。当然だと思つ。僕は逃げるための手段として、ここから居なくなることを選んだんだから。

だから、じうしてここに文章を残しておくことにするよ。僕が君に知つてもらひ事はたくさんあるけど、君が知りたいと思っているとは限らないと思うから。

僕の思い過ごしがも知れないけど、どうして僕高次元核融合炉の

事に興味を持つたのかを、君は疑問に思つてゐると思つ。

僕はその答えを、ちゃんと残したい。でも、それを知つてしまつたら、君はこの世界に絶望してしまうかも知れない。だから、君が冷静にこれを知ることができるように、ちょっととした質問でロツクをかけようと思つ、

質問は、僕が守るつて言つたもの、それをいま僕が君にメールで送るとしたら、なんて打つかな?』

その先に、何か入力するためのボックスがあつた。

母さんが生かしてくれた君を、僕は何があつても守るよ。

そんなことを質問にするなんて、なんだか廉はひどく自暴自棄になつていたようだ。

私は迷わず、それを肯定するためにキーボードを打つ。

『鏡音凜』

しかし、何も起きなかつた。私はひどく動搖する。廉が見ていたのは、私では無かつたのではないかといふ考えが、頭の中をかき回した。

と、ボックスの横にもう一文文章があつたことに気が付いた。『普通に答えるだけじゃ、ダメだよ。ヒントは、僕がこの文章をどうやって送つたかってこと』

そう云われても、あれはもう五年も前の事だ。そんなこと、分かることはすが無い。

私は舌を噛んだ。廉が私達に伝えてくれたことの根源を、知ることが出来ないのでないか、そしてこのまま核融合炉の融解を止める手立てが見つからないのではないかという焦燥感が、私を焦がした。その時、突然携帯端末が鳴りだした。慌てて取り出すと、美玖からの電話だつた。

『凜! 電話に出ないから、何かあつたのか心配したのよ! それに、聖域でのあのカウントダウン! いつたい何があつたの?』

甲高い声が、美玖かなり動搖していることを物語つてゐる。

「『めん、私もあれを見たせいですごく混乱しちゃつて、電話に氣

が付かなかつた。何が原因か分からぬけど、あれから、聖域から光の柱みたいなのが見える。多分核融合炉の融解は、かなり進んでると思う・・・

電話越しに、美玖が息を呑む音が聞こえた。私は僅かにしまった

なと思った。現状報告をするにしても、ストレートに言い過ぎた。

『そつか、本当に融解は進んでしまっているのね・・・。それで、凛、目当ての情報は手に入つた?』

少し時間が開いたけれど、思つていたよりも冷静な声で質問が来た。

「それが、廉がメッセージを残している事は分かつたんだけど、廉がそれに質問を載せてロツクしているから見ることができないのよ『どんな質問なの?』

「廉が、守るつて言つていたものだつて、いつも言つていたから鏡音凜つて漢字で打つたんだけど、それが答えじやないみたい。廉がどうやつて自分のパソコンにメッセージを送つたか、つていうのがヒントで書かれてたんだけど・・・」

『うーん・・・。普通に考えたら携帯端末で送つてると思つけど、それじやどんな答えになるのか想像がつかないわね』

私はおもむろに腕を組んだ。そうしたときに、自分のタッチパネル式携帯端末が目に入る。その瞬間、ある考えが頭の中をよぎつた。『美玖、答えが分かつたわ。私は今からこいつの役割に専念するから、美玖はそつちで調べものをして頂戴』

『え! ちょっと凜・・・』

私は居ても経つてもいられなくなつて電話を切つた。そして画面にもう一度向き合つ。廉も、私と同じタッチパネル式の携帯端末を使つていた。けれど、それはちょっと変わつたやつで、テンキーも一緒についているタイプだつたのだ。

子供の頃、私が使つていたのは旧式のテンキーがメインの携帯端末だつた。それで文字を打つた時に、予測変換で数字が表示されているのを見たことがある人はいるだろうか。

廉のヒントは、この事を云つていたのだ。つまり。

『22\*77555599000』

「か」は、2を一回、「が」は2を一回と\*を一回、というふうにテンキー上では打つてているのだ。こういう頼智では流石だなと思った。確かに冷静になつてみないとこれは分からない。

私がエンターキーを押すと、僅かな読み込み時間を経て、新たな文章が表示された。

『質問の答えが分かつたみたいだね。自分言うのもなんだけど、これから先はどうか心して読んで欲しい。知つて、どうするかは君の自由だけど、できることなら僕は君に絶望なんかして欲しくない。

ちなみに、この先の文章は今日書いたんじゃない。今年になつて書いたものに少し修正したものだよ。言つてみれば遺書みたいなものかな、どうして書いたのかは文章の後の方に書いてあるよ。

最初に、僕がどうして高次元核融合炉の事に興味を持つたのかを知つてもらおう。

父さんが死んでしまつて、僕らを守るものが何一つ無くなつてしまつた時、僕が君を守つてあげなきやつて思つた。でも、僕は力も無かつたし、当然お金稼ぐこともできない。僕はそれが悔しくてたまらなかつたんだ。

だから僕はこの世界がどのように出来ているのかを知りうと思つたんだ。非力な自分でも何か出来ることがあるのかどうかを探したかった。そうやつて本を読んだり、ネットの海を泳いだりして、高次元核融合炉がこの世界を支えている事を知つた。でも、高次元核融合炉の事はその頃の僕にはとても理解できるようなものじやなかつた。それがまた悔しくて、その時から僕は必死に勉強をした』

それは父が死んでしまつた日から変わつた、私が見ていた廉の姿そのものだ。

『そうして僕らが中学生になつた時に、僕は偶然、高次元核融合炉の情報をより詳しく載せているサイトを見つけたんだ。

その人は高次元核融合炉の研究をしている人で、名前はレオン・

ゼロ。高次元核融合炉の存在をこの世界に発表した研究者と、同姓同名だった。

その人は、日記みたいな感じで研究成果を載せていくつっていたんだ。どうやら核融合炉が作られた時に、何があつたのかを調べていたみたいで、昔話みたいに当時の出来事を語るのが、とても面白くて、彼が高次元核融合炉の研究をすることに生きがいを感じているのが伝わって来たよ。

君に直接読んでもらいたいたかつたんだけど、そのサイトはもう無くなってしまった。まあ無理もないと思つたけどね、それだけこの話は怖い情報だったから。

だから、代わりに僕が伝える。僕が最も尊敬する女性の物語が、忘れ去られてしまわないように、君がもしその時を迎えて、何もわからないうちに消えてしまわないように』

廉のあの射抜くような眼が、脳裏に浮かびあがつた。間違いなく、この先に「私の知らない廉」がいると直感する。

『ローラ・ゼロには妹がいた。歳はそんなに離れていくなくて、とも仲の良い姉妹だったみたいだよ。名前は、マリアム。戦場での取材を主とするジャーナリストで、言つならば戦場カメラマンだったんだ。

彼女は、環境破壊に端を発した紛争での悲惨な光景を写真に写し取つて、こんな争いは止めようつてメディアを通じて発信していた数少ない記者だった。自分の近くで紛争が起きているのに、他の国の人情勢を知ろうとする人はほとんどいなかつたからね。

戦場カメラマンとして働く日々は、やつぱり辛いことが多くて、たびたびローラに愚痴を漏らしていたみたいだ。その度に、核融合炉の研究者である彼女は、研究が成功したときに世界がどんなに素晴らしいものになるかを話した。そして核融合炉が出来たらやりたいことを一人で出し合つて、たくさん約束をした。

ローラはマリアムから世界のあり様を聞いてその使命感を強くして、マリアムはローラの研究から希望を得る。そんな一人だった。

けれど、それは最悪のタイミングで引き裂かれたこととなつた。

当時、同僚だつたレオンに、ローラがプロポーズされたことからそれは始まつた。レオンと同じようにローラも彼に惹かれていたから、あつさり承諾して、二人は入籍することになつた。そのおかげで研究所内はちょっととの間とても明るくなつて、当然マリアムも喜んで、結婚式に行きたいとローラに伝えた。

式の当日、幸せの絶頂の中で、ローラはマリアムの到着を待つていた。マリアムも、女性として新たな道を歩むローラの姿を想像して微笑んでいたに違ひなかつた。

そして、それは起こつた。

マリアムの乗つていた旅客機が武装グループにハイジャックされて、当時の聖域にあつた摩天楼に突つ込んだんだ。丁度そのころ、今の高次元核融合炉の元になつた空間がそこには存在していて、衝突のショックで異次元空間が開いてしまつたんだ。

そして、今の核融合炉の空間は、旅客機」とマリアムを呑みこんでしまつた。

それを、ローラは、そのことをニュースで知つた。自分が研究していたものにマリアムが飲み込まれることが何を意味するのかをよく知つていて、絶望を深めることになつた。

マリアムは、その空間に入ったことで、どんな形も成さないほど小さな粒子にまでバラバラにされてしまったんだ。

ローラが今の核融合炉の空間が人の意思を反映する空間なんじやないかつて言い始めたのは、丁度その頃からだつた。同時に、ローラは一冊の本を書き始める。電子書籍では無く、直筆で。

マリアムが異空間に消えてから約一ヶ月後、ローラは摩天楼の屋上に立つていた。時刻は午前一時、丁度その建物にあつた監視カメラがその様子を捉えていて、その建物で、異空間に繋がる扉を起動していたのも見られていた。今と違つて、あの空間は機械で制御されていて、扉さえ開ければ誰でも入ることが出来たんだ。

そして、ローラはそこから飛び降りた。今の聖域の彼女が自ら開い

た異空間への扉に向かつて。マリアムとの約束を実現できる世界を作るために、彼女との約束を守るために。

後に、レオンは彼女が書いた本を見つけ、高次元核融合炉の存在を発表した。

そして、現在のレオン・ゼロが、奇跡的にその本を入手したんだ』求めていた情報は、手に入れた。ローラ・ゼロは、マリアムとの約束を守るために、高次元核融合炉を作ったのだ。でも、私には自然としないものが残る。これだけじゃない気がしたのだ。廉が、世界のためにと言つて死んだ理由が、ローラ・ゼロの行為をなぞることだけではないという直感が、私を美玖には連絡させず、その先の文章を読ませた。

『その本から核融合炉の作られたいきさつ、創造者の思いを知つたレオン・ゼロは、もっと研究に勤しんだ。僕も、この話を知つて皆に伝えたいと思つた。

でも、レオン・ゼロがその後の研究で見つけたものは、到底希望とは呼べないものだつたんだ。

問題は、二つあつた。一つは、ローラが高次元核融合炉を作つてから、誰もあの空間には入ることが出来なくなつてしまつたこと。二つ目は、核融合炉を作つた人の意思が、たつた一人の意思だつたことだ。

誰も核融合炉に入ることが出来ないという事は、核融合炉が故障しても、誰も直すことは出来ない。そして人間一人の意思では、核融合炉は百年ぐらいしかその意図に従わないことが分かつたんだ。

そして、もう核融合炉が出来てから一世紀は経つてゐる。レオン・ゼロは、そのことに恐怖したみたいだ。一度だけそのことをサイトにアップしたけど、見る人がほとんどいないうちにほかの情報ごと削除してしまつた。

当然だけど、僕も怖くなつた。レオン・ゼロの云つたことは確かに射ていたし、本人も情報を消してしまつほど恐れていたんだ。何年後かも分からぬ未来に、確実にこの世界が終わつてしまふん

だから。

だから、僕は世界がいつ終わってしまってもいいよつて、僕が出来ることで少しでも世界を良いものにしようつて思つたんだ。だから、僕はこうして遺書を書いた。本当は、自分で生きて、出来る限り頑張つてみようつて思つてたんだ。

でも、あの時、僕は人を殺してしまつた。本当は、行動できないぐらいの傷を負わせて、警察にでも引き渡せばよかつたんだ。それなのに僕は君を殺そうとしたの人たちが許せなくて、躊躇無く頭を打ちぬいてしまつた。しかも最悪な事に、僕はその時にどうしようもなく快感を覚えていた。人を殺すことを嬉々としてやつてしまつたんだ。もうすぐ終わりが来るつて言つのに、自分が理想としている世界の害悪になつてしまつた自分を、どうしても許せなかつた。あの場にいる全員を打ち抜いた後、後悔するように銃を見つめていた廉の瞳が、不意に脳裏をよぎつた。

『僕から語れるのは、これで全部だよ。最初の方に書いたよつてこれを知つてどうするのかは、君の自由だ。もしかしたら、戸惑つているもかも知れないし、怖いとも思つたかも知れない。でも、君はそれを吹き飛ばすことが出来るつて信じてる。だつて、君はあれだけ僕が脅してしまつたのに、僕の事を忘れずにこれを読んでいるんだから。

最初の質問で、僕は君を守るつて言つたことを答えにしたけど、今でもその気持ちは変わらないよ。自分勝手だつて思うけど、たとえこの世界から居なくなつても、僕は君の事を想い続ける。同じ世界に居なくとも、君と僕は繋がつてゐるつて信じてるよ』

文章は、それで终わりだつた。

私は、ふつと微笑を洩らす。これから自殺するつていふのに、廉はひどく冷静だつた。

普通、自殺という選択肢は選ぶものでは無い。現実と言つ名の敵に対して、自分が完全に敗北してしまつたときにそれは現れるのだ。だから、あがいて克服する人はいるし、無論傍から見たらそんなに

たいそうな事ではないこともよくある。

でも、廉は死ぬ前にこんなことをするぐらい冷静で、自殺を「選んで」いた

窓からは、少し陰りのある赤色の光が部屋に差し込んでいた。それを持つて、窓の外の光景に目が行く。

私が気づかぬうちに日は昇っているどころか、もうすでに落ちかけていた。その泣き腫らしたような赤色が、核融合炉の放つ光と合わさって現実感のない光景を作り出す。

こうやって、溶けるように少しづつ、少しづつ、世界は死んで行っている。ローラ・ゼロが核融合炉を作り出したその日から。

もしかしたら、廉はあの時から世界をこういう風に見ていたのかも知れない。だから、自殺を選んだ。終わりゆく世界が、少しでも綺麗であるように。

終末というものが、少しでも幻想的に、魅力的に感じてしまうことは、私にある。自殺という選択肢が、「楽になれる」という印象を持つことと同じような意味で。

そう考えると、すとんと自分の中に落ちるものがあった。けれど、そのことに、何故か私は行き所のない、もやもやしたものを感じる。その感じのせいか、急に誰かと話したくなり、美玖の携帯端末に電話をする。

『もしもし・・・。あ、凛！急に電話を切つたから、びっくりしたのよー。』

『「じめん」めん。閃いたら居ても経つてもいられなくなっちゃってさ』

『もう、凛はいつも一人で突っ走っちゃうんだから。たまには私の事も頼つてほしいわ』

頼る。その言葉を聞いて、私は一瞬言葉を詰まらせた。それは、私が廉にして欲しかったことに違ひなかつたのだ。そしてその思いが、私に口を開かせる。

「うん、そうする・・・。まずはこっちの情報と、美玖の情報を合

わせよ!「う

私は、廉の遺言から得られた、ローラ・ゼロが高次元核融合炉を作ったたいきさつ、それから、廉がどうして核融合炉のことを深く知るようになったのか、そして、なぜあのような形でいなくなってしまったのかを全て話した。

自分でも意外なことに、それを話すのは思っていたよりも辛くは無かった。代わりに、そのような友人がいることを、心のどこかで感じた。

美玖の言うには、あのカウントダウンが現れて以降、境界の研究所はそれはもう大変な騒ぎだそうだ。あれから調査隊が組まれ、日本も含む各国の核融合炉の繋がる装置などを調べまわっているそうだが、核融合炉は全く異常を起こすことなく、今までそうであったようにエネルギーを送り続けている。

あのカウントダウン自体が誰かの陰謀なんじゃないかとも思われたが、映像を出力している装置も見られず、何をやってもあの文字は消えないそうだ。

調査が難航していることで、静まりかけていたあの混乱が、またぶり返している。世界中の人達が、あのカウントダウンのせいで様々な心情の変化を抱えているようだ。

ある者は絶望し、またある者は認めず、結構な割合の人は自分のとる態度を決めかねている。あの事件で漠然としていた不安が、一気に形として現れてしまったのだ。

『なんていうか、不気味ね。役割自体はきっちりとこなしつつ、高次元核融合炉は私達にその牙を剥けようとしてる。一刻も早く、核融合炉の融解を止めないと・・・』

私は電話越しに頷く。

『うん。これから核融合炉の空間に入つて、ローラ・ゼロの感情を完全に読み取る。それから、向こうの私と協力して、核融合炉の融解を止めるわ』

『あ・・・凜、ちょっとそのことでお願いがあるんだけど』

「何？あのカウントダウンの正体なら、ちゃんと確かめるわよ」  
『うん、そうじゃないの。私の個人的なお願ひなんだけど、もし核融合炉の融解を止める方法が見つかったら、一度にしつちの世界に帰つて来て、私達に相談して』

私は一瞬躊躇し、そして返事をした。

「わかった、絶対帰つてくる」

『うん。じゃあ気を付けてね』

耳障りな回線を切断する音が、耳の中にこだまする。

さて、これからあの恐怖体験をしなきやなんないのか・・・。

と、私は窓の外を見ながら、さか呑気に思う。しかし、そんな心配はする意味も無かつたし、実際必要も無かつた。

突然、私を中心に世界が歪み、私は思わず動きを止めた。声を上げる間もなく、私は周りを赤い霧に囲まれた部屋の中心に立つていた。

見ると、白いワンピースを着た少女が、もとはちょっとしたパノラマだったであろう広い窓に向かっている。そしてその先には、逆さまになつた To meet down の文字と時間表示だった。  
「やあ、僕が作ったこれを、皆は楽しんでくれているのかな？」

少女は、ただ無邪気に言つ。

世界は動き、止まらない。そうでなくては、崩れてしまうから。  
たとえ、どんなに歪んだ形でも、貪欲に進み続ける。  
けれど、時として私達は世界に止まれと望む。  
自分自身が崩れるのを、何よりも恐れているから。

## 十、追憶

純粹さは、時にどんな傷も癒し、そして、どんな刃にも勝る。田の前の少女が言ったことは、そのことをありありと表していた。

「どうして・・・」

私は逆さまになったTo meet downの文字と、カウンターダウンに田線を投げつつ、戸惑いながら書つ。

「どうしてこんなものを作ったのよ！」

私がどんなに困惑しようと、少女は全く表情を変えない。ただ楽しそうな笑みを浮かべ、くすくすと笑うだけだ。

「どうしてって？それはね、この世界の人達に、廉が味わった絶望を感じてもらおうと思つたからだよ。廉に自殺しなきやいけないなんて思わせた世界を作り上げてきた人達でも、そやつて追体験をさせたらどうなるか、君も興味あるだろ？」

私はそのあまりにも真っ直ぐな悪意に気圧される。けれど、それを押し返すように、私の中で怒りが言葉となつて湧き出した。

「そんなことをして意味なんてあるの？あなたのやつた事はね、いたずらで殺人予告をするようなものよー！」

「でも、実際問題これから世界は滅びるよ？」

「それを、私達が止めるんじょー！」

「気に入らない・・・。

この少女は、自分のやつた事を正しくと信じて疑っていない。私はもどかしさのあまり手を強く握りしめていた。そのまま数秒間少女とにらみ合つ。

やがて、少女が急に氣の抜けたような微笑を洩らした。

「やつぱり、君はそつまつなんだね・・・

「？」

この少女は、元々私から生まれたといつて、相変わらず何を考えているか分からぬ。そう、例えるならばあの時の廉のようだ。

「それじゃあ、君が見つけたローラ・ゼロの記憶を、もつと鮮明に読み取るつか。まあ、既に君の得た情報からここまででは再現したけどね」

少女は先ほどの悪意が無かつたこのように話題を変え、ついでのよう両手を広げる。すると、一十代半ば見えるヨーロッパ系の男女が現れる。女性は窓から見える、To melt downの文字・・・ではなく代わりに現れていた摩天楼を眺めていた。

『正気なのか、ローラ・・・』

男が、女性、ローラ・ゼロに問い合わせるように言つ。彼女は振り返らず、冷然とした態度で答えた。

『ええ、もちろんよ。間違いなく、この空間は人の意思を反映させる機能を持っている。あなたも知っているでしょう？あの事件で、被害者の全ての遺族が彼らの言葉を、丁度あの時刻に聞いているのよ。一人や一人程度ならそれこそ笑ってしまうような話だけど、これが百人以上も確認されている。なりより、あの時刻に私自身もマリアムの声を聞いた。

これがあの空間の作用でなくて、なんだと言つのよ。胡散臭い心霊現象よりも、よっぽど信用できるとは思わない？ねえ、レオン』男、レオン・ゼロは少し言葉に詰まりつつ、しかしあかりとした口調で言つ。

『そのことに關しては俺も贊同している。だが、それだけでの空間が人の意思を反映させるというのは短絡的すぎるとも思う。あの事件では、乗客は誰一人として生き残っていないんだぞ』

突然現れた男女と、その会話の非常識さに、私は茫然とするだけだつたけれど、ここまで聞いてようやく話の流れがつかめた。

これは、マリアムが飛行機事故で亡くなつてからの事で、どうやら、核融合炉の空間の事について、ローラとレオンが議論しているようだ。

ローラの言い分は事故当時に彼女を含む百人を超す人に、事故で亡くなつた人達の声が届いたことを理由に挙げ、核融合炉の空間が人

の意思を反映するのではないかと言つてゐる。

対して、レオンは飛行機事故で「死にたくない」という思いを核融合炉の空間が反映しなかつたことから、また違う理由があると言つてゐる。

いや、違うな・・・レオンは何かを止めようとしている・・・?  
ふふふ、とローラが微笑を洩らし、会話の中で初めてレオンを振り返る。

『テロリズムというのはね、レオン』

いきなりな話題の転換に、レオンも私も訳が分からず顔をしかめる。少女だけが、無表情だつた。

『力を持たない者がやるものなのよ。飢えに苦しみ、圧政に虐げられても、自分達がそれを止めると言えないから、言つても聞き入れてもらえないから暴力に訴える。それをどこにぶつけていいかさえ分からぬ者たちが、あるような事件を起こすのよ。

きっと、あの飛行機は元々原子力発電所に落ちるはずだったのでしうね、もしそうなつていたら、私達はこの研究を続けることすらできなかつたかもしれない。でもね、あの飛行機があの空間に墜落したことで、私達は被害を受けず、しかも研究のヒントを受けたのよ、たくさんの人人が犠牲になつて生じたこの機会を生かさない訳にはいかないでしよう?』

『だからつて、あの空間に直接飛び込むなんて、無謀にもほどがあるだろ?』

レオンが声を荒らげる。

『私にとつてね、これは復讐でもあるのよ。もしこれが成功すれば、私達はもう争う必要が無くなる、有り余るエネルギーは、戦争の意味を無くすでしょ。そうすれば、今の軍需産業で儲かっている者達は行き場を無くし、戦犯者は裁かれる。マリアムが心を痛めていた光景を生み出し続けた者達に決定的な打撃を与えられる。

それにね、もし仮に私が何も成し遂げられず、ただあの空間に消えるだけとしても、絶望が人々の間に広がるでしょ。私の研究

の一部は、もう広く知られているもの。

『どうちに転んでも、私はマリアムを消し去つたこの世界に復讐することができる。それが私の願いよ、レオン、あなたなら分かるでしょう?』

沈黙が、二人の間を流れる。それは、意外な事に拒絶では無くある種の共感のようだつた。私には理解できない何かが、まるで二人を結びつける「鎖」のようにそこに在つた。

『それでも・・・俺は賛成できない』

やがて、レオンが静かに口を開いた。それを受け取るローラの表情からは、失望では無くどこか満足したような雰囲気が伝わる。

『やつぱり、私は幸せな女・・・』

そう言つと、ローラはレオンの方へ歩き出し、しかしすれ違つてその部屋から出ようとすると、その進路上に私がいて、通常の空間ならば正面衝突する状況になる。が、そうはならず、ローラは私をすり抜けるようにして通過していくた。

その直後、目の前の光景が歪み、今度は街明かりに照らされる夜空が現れる。皮肉な事に、私はその明かりの少なさにどこか物足りなさを感じた。そのぐらい、今夜の街とは明るさが違つたのだ。『どうやら、さつきの会話の前にローラはレオンに、核融合炉に入る空間に飛び込むことを伝えていたみたいだね、多分、自分が書いた『本』のことも伝えていたんじゃないかな』

『そのようね』

私はここがあの摩天楼の屋上であることを田中で確認しつつ答えた。

『これで・・・最後ね』

不意に、頭に直接響くような声が、どこからともなく聞こえる。

反射的に振り返ると、ローラが屋上に出てくるのが見えた。彼女は、私達のほうへ歩いてくる。その表情からは、これから成すことの決意では無く、どこか戸惑っているような雰囲気が伝わってきた。

ローラはおもむろに足を止めると、来ていたコートの中から何かの端末を取りだし、じっと見つめる。

『ねえ、マリアム。正直、私はこの世界が憎い。あなたや私を幸福の絶頂から突き落とすようなこの世界を、どうしても許すことが出来ないわ。でも、あなたが良いものにしようとしていた世界を救いたいとも思ひ。

だから、私は賭けをする。もしこれが成功したら、誰もここには立ち入らせなくせる。だってあなたは、ここにいるんだもの。誰にもあなたの場所に踏み入れさせたくないわ。

そしてもし、これが失敗したら、私はこの世界の破滅を望む。こんな世界なんて、壊れてしまえばいい。

私は復讐のためだつたらこの身を投げるのも構わないわ。あなたがいな世界に、私が生きる意味なんて無いもの』

彼女のマリアムへの独白に、私は思わず息を呑む。それは、廉やグミがいなくなつてしまつてから世界に抱いた感情と同じものだつた。そして自分自身を消し去ろうとする願望も。

ローラが、手に取つた端末を操作する。すると、摩天楼の正面の景色が歪む。

『今そこに行くわ、マリアム』

そう言つと、ローラは走り出し、その歪みに飛び込んだ。

そして、世界は変わる。

私の周りに広がるのは、見渡す限りの海と空。私と少女は、しばらく無言でそれらを眺めていた。

『やつぱり、そうだつたんだ・・・』

少女は、何かを惜しむように呟いた。そして、私の方を向く。私も、少女の方を向き、見つめあつ。

『ずっとこの空間上で、この空間を作り、制御している意思を探し続けてきたけど、そんなもの最初からここには存在しなかつたんだ・・・』

少女の言葉に、私も遅れながらも理解した。ローラ・ゼロが核融合炉を作った時の思い、その意味することを。私の思いと、ローラの思いが合致していた。それが答えたのだ。

そうでなければ、この空間に入ることすらできなかつたはずなのだ。この空間は、もはやローラの意思を中心として存在しているのでは無い、私という存在を核としてここにあるのだ。

そして、それが示すのは、ローラの意思に偽造して高次元核融合炉を制御することが出来ない、ということだった。

理由は二つある。一つは、ローラ自身が、この世界の破滅を望んだことだ。ローラの意思が完全に消えれば、核融合炉はローラが失敗したと受け取り、その望みを果たす。今のこの段階は、その前触れに過ぎないのだ。

一つ目は、私がこの空間の核であることで、ローラの意思が私の思いと同調し、定着してしまつたことだつた。

少女は、核融合炉を構成している意思が、この空間上で見つけることは出来ても、その感情を読み取ることが出来ないことを疑問に思つていた。だからその感情に日星を付けければ読み取れると思つていたらしいが、それは全くの間違いだつた。

核融合炉を構成していた感情は、私自身が受け持つていたのだから。

美玖が立てていた仮説は、正確に言つと間違つた。いくら元々の次元を拡張して出来ていたとしても、核融合炉の空間が消えれば、その中にある物質は存在すら許されなくなる。しかしこの世界に今も存在する私が、核融合炉の中核を担つてゐることで、ローラの意思が消えても、核融合炉自体は残つてしまふのだ。

少女は長々と話しつづけたが、私の耳にはその声は届かず、情報だけが私の頭の中で反復される。

どちらにせよ、結論は一つだつた。

核融合炉の融解を止めるためには、私が消えなければならぬ。

それだけ。

少女曰く、私が核融合炉の融解を止めようと意図のならば、核融合炉が完全に融解を起こす瞬間、つまりローラ・ゼロの意思が完全に消える瞬間に、核融合炉に飛び込むのが最も確実なのだそうだ。しかも、その時に何かを望めば、ローラの意思に邪魔されることなく、何かしらの思いを核融合炉が拾うことだってありうるそうだ。しかし、それをやれば確実に私は死ぬ。

「もしかして、グミが私に教えた人間を救う方法って、このことだったのかも知れないわね」

私は、終始茫然としながら話を聞くだけだったけれど、不意にグミの事が頭をよぎると、不思議と頭が冴えた。

「十中八九、そうだろうね。君が核融合炉の核だってことを知らなくとも、ローラ・ゼロの意思が完全に消える時がチャンスだってことは分かるだろうしね。僕も、実はその方法が使えるんじゃないかなって思っていたけど」

「それにしても、皮肉ね」

私は自嘲気味に言つ。

「核融合炉が出来た時も、ローラが高次元空間上に飛び込んだ。そして、その融解を防ぐために、今度は別の人間が飛び込む必要があるって。まるで生贊みたいじゃない」

少女は、何も言わない。

「こうなるとあなたの作ったこのカウントダウンが、ちょっとは役に立つものになつたって訳ね。私の余生を百分の一秒単位で表しているなんて、ちょっと洒落たものじゃない」

どこかの科学館が何かで、八十まで生きると仮定してあと何秒で死ぬか、というカウントダウンを作る。という端末のことを思い出して、私は思わず口を歪める。

「まあ、あなたにとつても同じこと、そうでしょう？」

私が聞くと、少女はようやく口を開いた。

「すでにこの世界を救う事に決めてるんだね……」

そんな少女の言葉に、一瞬私が言葉を失う。そして、私との少女は限りなく核融合炉を作った人物に近い道を歩んでいることに気が付く。

「当たり前でしょ？廉が愛してゐるって言った世界を、このまま滅ぼす訳にはいかないんだから。あなたがもし、私が廉に対するイメージで生まれたんだつたら分かるでしょう？」

「まあ、そうだね」

少女は苦笑する。

「じゃ、あなたもあと丸一日の余生を楽しみなさい。私は元の世界に戻るわ」

「君も、楽しめるといいんだけどね・・・」

「・・・どうかしらね」

カウントダウンは、あと一十四時間を切っていた。

私はなんとなく目を閉じ、自分の部屋を思い浮かべる、核融合炉が私を核としているなら、元の世界に戻ることぐらいは出来るはずだ。

少しして目を開けると、狙い通り私の部屋が視界を埋める。やっぱり、私は核融合炉の核となつたのだ。そう思つと、何故かこの部屋が見知らぬ誰かの物のように見えてくる。

今なら、廉の気持ちが少しは分かるような気がした。あと少しで終わつてしまふものというのは、たまらなく愛おしいのだ。この世界は、もうあと一日で終わる。そして、それを止めるには、私がこの空間からあと一日足らずで消えなければならない。

どちらにせよ、「私の世界」は終わるのだ。

私は、自室に置いてあつたテレビをつける。美玖が便宜を図つてくれて、水道とか電気は使えるようにしてもらつたから、これも見ることが出来た。テレビは貴重な情報源だ。

ソファに座つて見ていると、やはりとか「コースとか特番しかやつていなかつた。それの中継所で各地の混乱が伝えられ、名前なんか聞いたことも無いような専門家達が活発な議論を繰り広

げている。

どこもかしこも、狂乱状態だった。まるで、目的地を失つてしまつた蟻の行列のように、人々の生活も、議論も、夜遊びも無茶苦茶になつていた。

そのカウントダウンを作つたのは、私の分身とも言つべき人です。彼女は、貴方達を絶望に陥れるために、あれを作りました。

そして、私がこの世界に存在することで、核融合炉のエネルギーがこちらの世界に漏れ出でてしまいます。

限界だった。

私は、そこにあつた花瓶を、叫び声を上げながらテレビに投げつけた。すごい音がして、液晶が割れ、画面がブラックアウトする。しかし、音声は止まらなかつた。司会者の焦つたような声と、専門家達の声が永延と流される。目を逸らそうとして、テレビ台の横の時計が目に留まる。その秒針が、刻一刻と動くさまを見ると、言いようのない恐怖が私を支配する。それにつられ、あの少女の忍び笑いが耳の奥で再生され、反響すると、それに罪悪感じみたものが加わる。私の鼓動は、どんどん速くなり、耳の中でひどい耳鳴りさえし始めた。

私は、無我夢中でテレビの電源を消した。部屋には、時計の秒針の音と、私の荒い呼吸だけが残つた。

もう何も、聞きたくない。

私はソファに座り込み、目を閉じる。二十四時間ずっと半狂乱状態で起き続けていた私は、驚くほど早く眠りに吸い込まれた、

私は、アパートの一室にいた。

一瞬、私にはここがどこか分からなかつたけれど、そんなことは問題にならなかつた。目の前にいるのは、真っ白なワンピースを着た十歳ぐらいの少女と、同じぐらいの歳に見える少年だったから

だ。

母が撃ち殺される一週間前、私と廉は誕生日でもないのに新しい服を買つてもらつたのだ。どうして買つてもらえたのかは今になつては分からぬけれど、一週間後に遊園地にまで連れて行つてもらえると聞いて、私と廉は大いにはしゃいでいたのだ。

少年と少女は、とても、とても幸せそうだった。

やがて、廉が父親に呼ばれ、少女は一人になつた。残されて暇そな少女は、春風に揺れる窓のカーテンを見つめていた。

私は、ゆっくりと少女に近づく。いきなり押し倒し、馬乗りになつてその首を絞めた。

私がいなければ、あんなことにはならなかつたのに！

けれど、私は急に恐ろしくなつて手を放す。すると、少女は何事も無かつたかのようにこちらを振り返つた。その無垢な瞳に、私は何かを言おうとしたけれど、ここ数日の不養生のせいで乾いて切れた唇から零れ出たのは、金魚が酸素を求めて吐き出す泡のような言葉にならぬものだつた。

こんなことをしても、何も変わらないのだ。

だ。

「『聖域』？そいつはもの好きだな。まあ海外からの最大の観光地ではあるが・・・どうしてそんなところに行くんだ？」

隣を歩いているのは・・・多分、魁人かいじんだろ？

「核融合炉に飛び込んでみたいと思って」

そういえば、あの頃はまだ高校生になつたばかりだつたつけ？  
だとしたら、ずいぶんと不用心だつたものだ。

私の発言に魁人が面食らい、私がそれを茶化していると、いつの間にか聖域の前に来ていた。

「廉がね・・・言つた言葉だつたのよ」

「ああ、そうだ。

「核融合炉に飛び込んでみたいつて」

この想いだ。核融合炉を繋ぎとめてしまつたのは。廉を求めたこの気持ちが全ての始まりだつたのだ。そして自分を消し去りたいといつ想いも、彼女の想いと一致した。

私が一步踏み出すと同時に、世界が歪む。

隣にいた魁人は消え去り、街中を歩いていた人々は誰一人として居なくなつた。ただ、残るのは街明かりと、私だけ。

私はあの日魁人に言われた通り、自分の家に帰ることにする。帰り道にも、誰一人としてすれ違うことは無かつた。私は、無感動に、何も考えないように、ただ道を歩く。

家に着いた時刻は、あの日とは違つてまだ真夜中だつた。そういうば、あの時は魁人に病院に引っ張つていかれて、いろんな検査を受けさせられたんだつけ。まつたくおせつかいなやつだ。

廉がいなくなつてから、私がここを離れるまで、三年。一年間は記憶が無かつたけど、一人で住んでいた部屋に一人で住むといつのは、なんだかんだ気にしてることは無かつた。まあそれどころじやなかつた、とも言えるけど。

しかし今になつて、急に一人分の生活スペースの広さと静寂が、寂しいものに感じた。

この光景が、他のどんな家庭にも広がつてゐるのだろうか。そう考へると、胸に何かがつつかえたようになり、これまで一度も止まることがない呼吸が乱れ、上手に息ができなくなる。

夢・・・よね。

目を開けると、そこは見慣れた自分の部屋だつた。昨日の夜、私が花瓶を投げたせいでテレビ台はそれはもう悲惨な事になつてゐる。

束の間、私はあのような暴挙に出たことを後悔した。

毛布も何も被らずに寝てしまつたから、ひどく体が冷えていたし、しかもおなかも減つっていた。私はソファに座つて寝ていたせいで固まつた肩とか首とかをほぐしながら立ち上がる。とりあえず体を暖めて何か食べとかないと、何も出来そうにない。

シャワーを浴びて、また自分の部屋に戻ると、時計は午後二時を指していた。・・・どうやら十時間以上寝ていたらしい。ソファに座ると悲惨な状態なテレビがまた目に入り、ため息が出た。まさかこのままにしておく訳にもいかない。私はうんざりしながらとりあえず向こうで買っておいた携帯食料を食べる。

すぐに食べ終わつて、床に散らばつていうテレビの残骸を片付けよつと思つたところに、美玖から電話が来た。

『もしもし、凛？ よかつた！ このまま連絡が取れなかつたらどうしようかと思つてたのよ』

「う、うん」

そういうえば美玖に帰つてきたら連絡するつて約束していたつ。忘れていた事に自己嫌悪して、言葉に詰まつた。

『こいつの報告からするわね。あのカウントダウンは二十四時間を切つたけれど、依然として各國にある核融合炉のエネルギー出力装置は、全く問題なく作動しているわ。境界のほうでも、結構な割合でローラ・ゼロの記憶の一部が出てきているだけで、あのカウントダウンには意味が無いつていう意見が出ているわ。でも、そういうこと以外は全く進展がないの・・・。えつと、凛、核融合炉の空間で何か分かつたことはあつた？』

「う・・・うん。なんとかローラ・ゼロの記憶を再生して、当時の状況を知つたんだけど・・・」

今度は戸惑つて、言葉に詰まる。あの少女と見た光景や、そこから出た結論を頭の中で転がしてみるけど、それらは私の中の感情の障壁に阻まれて上手く形にならない。

美玖は、私の次の言葉をじつと待つている。けれど、その間に私が

絞り出せた言葉はたつた一つの事実だけだつた。

「どうやら私、核融合炉に飛び込まなきやいけないみたい……」

美玖が息を呑むのがはつきりと分かつた。

『そ……それって……』

美玖は明らかに狼狽している。分かりやすい性格は今も昔も変わつていいようだ。しかしそんな美玖の様子とは対照的に、私の混乱は静まり始めた。

「ローラ・ゼロはね、核融合炉を作るために自ら異空間に飛び込んだわ。その時に、彼女が抱いていた想いは、彼女が失った人の事と、自分を消し去りたい、その人の元へ行きたいっていうものだつたのよ。そしてそれは……」

私の頭の中で、あの日の事が再生される。同時にあの想いも。

「私が記憶を失つたあの日、あの瞬間の私の想いと一致していたのよ。廉を求める想いと、廉がいないのなら核融合炉に飛び込んでやりたといつていう想いが」

それから、私はローラ・ゼロがどのようなきさつで核融合炉の空間が意思を反映することを主張し始めたのか、そして、感情の一致によつて私が核融合炉の核となつていたことを話した。

「そんな……そんなこと……」

美玖はもう泣きそうな声だつた。

「そんなの……嘘……よね？」

そして美玖のそんな質問に、私は逆に驚いてしまつた。ここ一年、美玖が嘘だ、と言うようなことは一回も無かつたはずだ。それは美玖の単純な性格では私に対して疑うことをほとんどしなかつたためだけれど。こんな言葉が出るほど、美玖は動搖していた。

「み、美玖つ、あのね……」

美玖のあまりな動搖に耐え切れず、私は美玖の求める通り嘘を吐こうとした。

僕達は、多分歴史に刻まれることは無いと思う  
でも、そんなことできるはずが無かつた。私も美玖も口をつぐみ、

重苦しい沈黙が流れる。

「全てが嘘だつたら、本当によかつたのにね」  
ぱつりと言ひつ。

『そう』

しかし、その一言で美玖は全てを理解したようだつた。  
『それでも・・・』

少しの間があり、電話越しでも美玖の真剣な表情が見て取れるよ  
うな深呼吸の後、美玖は食い下がるように言つた。

『それでも、私は・・・諦めないよ』

「うん・・・」

何を、とは訪ねなかつた。そんなことを聞いてしまつたら、互い  
の決心を揺らがせてしまいそうだつた。

「じゃあ・・・なんていうか・・・」

急に、あんなに動搖してしまつた自分がばかばかしくなつて、少  
し顔を赤くしながら私は言葉を吐き出す。

「これからもよろしく」

『そうだね、これからもよろしく』

そう言つて、私と美玖は笑い合つ。この世界が消えてしまつまで  
あと十一時間もないけれど、これまで散々暗い気持ちにさせられた  
のだ、最後ぐらい希望を持ちたかつた。

丁度その時、玄関のインター ホンが鳴つた。私はびっくりして玄  
関を振り返る。

「人が来たんだけど・・・誰だろう?」

『マスクミか何かかもしれないわ、気を付けて』

美玖がそう言つので、私はおつかなびつくりしながら玄関まで電  
話を持つたまま行き、慎重にドアを開けた。

「よう! 凜、元気にしてたか?」

ドアを開けた先には、なんと魁人がいた。二年経つてはいるけれど、その雰囲気はあの時とほとんど変わっていない。  
安心してドアをちゃんと開けると、魁人の後ろには同じぐらいの

歳に見える一人の女性がいた。一人ともずいぶん大人びて見えたけれど、瑠香と？であることはすぐに分かった。

「一つ国が滅ぶわあんなカウントダウンが出るわ、俺たちやしつちやかめっちゃかでよ。そんなときにこここの電気が付いてたもんだから、気になつて来ちまつたよ。

「どうせ、あの時みたいに何か厄介」とに巻き込まれてんだろう？それも核融合炉のことでよ。手助けに来てやつたぜ」

どうやら魁人は、あの時から性格も変わつていないようだつた。

「おせつかいなやつね。二年前と何も変わつてないわ」

私が苦笑を浮かべながら言つと、魁人も同じように苦笑を浮かべた。

「おまえも、その物言いは変わつてねえな」

「ふふつ。それじゃあ、みんな上がつて。出すお茶もないけど勘弁してね」

「大丈夫。そういうのは私が持つて来ているわ」

瑠香が手に持つていた鞄を見せながら言つ。そういうひとつひとつは、流石瑠香お姉さまだ。

「あらま、リビングがひどいことになつてゐる。掃除しなきやだね。でもこの画はちょっとドラマチック・・・」

そして相変わらず変な事を言つ?だつた。

「そうね・・・まずは掃除からかしら。恥ずかしいといふを見られちゃつたな」

私は苦笑して、部屋の隅にあるはずの簾を取りに行つた。

それぞれの想いがあつて、それぞれの物語が存在する。それは輪廻に見えて、全く別の想いが生まれている。しかし、たとえ同じ想いを抱いていたとしても、それは全く別の物語でさえあつたのだ。

もしかしたら、その世界なんかも。

## 十、追憶（後書き）

ローラとレオンに関係については・・・いろいろと妄想してみてください。キャラが増えすぎてしまうのもなかなか大変ですね。オトナって難しい（棒）

実はこの作品のプロットを決めていた段階では、名前があるのは凛と廉だけで、その他は名前がなく、完全に鏡音凜だけの話になる予定でした。しかし、一話からいきなり魁人が乱入し、それからどんどん人数が増えていきました。

人間関係も描くことから、鏡音凜という一人の人間としての物語になつていつたかなと思います。やはり人間一人では生きてけないんですね。

## 十一、要求

火事場の馬鹿力とは、よく言ったものだ。私がテレビに投げた花瓶は、結構な重さがあつたはずだけれど、それがテレビの真ん中をきれいに直撃していたのだ。よくそんな力が出たものだと、私も含めてみんな驚いていたけれど、魁人に限つては「女は怖ええな」と言つて呆れていた。

片付けが終わつてから、廉の部屋からもソファを持つてきて、四人でテーブルを囲んで座つた。瑠香がお茶を淹れて、全員に行き渡つてから、自称「作戦会議」を始めた。美玖は、私の部屋のパソコンを使ってテレビ電話でテーブルを囲んでいる。

「聞くと夢も希望も無くなつちゃうような内容だからあまり皆には話したくなかったんだけど、もうカウントダウンも十一時間切つちやつたし、全部話そうと思つわ」

「おう、どんと來い」

「私に力になれることなら何でもするわ。彼を救つてもらつたもの「もちろん、廉君の事も教えてくれるよね」

美玖だけは無言だつたけれど、それぞれが返事をしたので、私は話し始めた。

「まずは、核融合炉を作つたローラ・ゼロのことから話すわね。

一世紀前、人類は深刻な環境問題に襲われていて、そのせいで各地で紛争が相次ぎ、多くの命が失われ、世界中の人々の心がバラバラな状態だつた。その中で、核融合炉の開発が急がれていた。ここまで歴史で習つてゐるよね。それで、実際に核融合炉を開発したのは、ローラ・ゼロつていう女性だつたつていうのは、廉から聞いてると思う・・・えつと、?は・・・」

「知つてゐるわ。あたしも廉君から聞いた」

「驚いて、その場の全員が?の方を向く。

「実は十四のころ、あたしは廉君とメールでやりとりしていたこと

があったの。あの時は夜遊びばかりしてたんだ。学校にも家にもほとんど寄り付かなくて、そいやつて遊んでてもなんか虚しくて、親にも失望されてちやつてさ、私なんか必要ないんじゃなかつて思つて何度も自殺を図つちやつてた。

周りから見たらただの悩める中学生だったかもしれないけど、だいぶ危なかつたんだよね。まあ私はバカだつたからなかなか死ねなかつたんだけど・・・と、『めん話の腰折つちやつたよね。話、続けていいよ』

？があまりにも開けつ広げに言つものだから、私は終始茫然としていた。

「いや、まだ廉とどうやって知り合つたのか聞いてないぞ。それだけは聞きたいよな？」凛

「う、うん」

そういうわけで、魁人がいきなり振つてきても生返事しかできな私だつた。

「そつか、なら話すね。それでさ、確實に死ねる方法をネットで探してて、その中で廉君が立てるサイトがあつたんだよね。自殺サイトだと思つたら完全に釣りでさ、なんだかんだで廉君とチャットで話し込んでやつて友達になつちやつた。

でさ、凛と廉君つてあの時から両親が居ないじやない。そのことを知つたらなんかいたたまれなくなつちやつて、それから自殺しうつてことを廉君にチャットしてたらなんだかどうでもよくなつたんだよね。大人達が聞いたら絶対怒るような話を、廉君は怒ることも、聞き流すこともせずに真面目に聞いてくれたしさ。

その時だつたかな、廉君から核融合炉の事を聞いたのは。スケールが大きすぎてあたしには十分理解できなかつたけど、みんなが一つのものを共有しているつていうことになんだかじーんと来ちゃつてさ。大人達なんて別世界の住民みたいに思つてたけど、偉そうにしてるよう見えて結局はおんなじ生き物なんだなつて分かつて、そしたら自分でやつてたことがばかばかしく思えてきてさ、自然に

学校に戻ることが出来たんだ。まーそれからは大変だつたけどね、結構な時間休んでたし。

今にして思えばさ、廉君はあたしと同い年とは思えないくらい大人びてたよね、勉強も結構教えてもらつてたし、あたしみたいなやつの話を真剣に聞いたりしてさ」

「確かに、あいつはなんていうかマセたやつだつたな。普通、同級生との会話に核融合炉の話なんてしねえつての。それで俺達には到底思い当たらないような事を平氣で言つてよ、同い年には思えなかつたな」

魁人が同意すると、？がそれにつけ加える。

「そりそり、しかもさ、廉君はあたし以外の人達の相談にも乗つてたんだよね。しかもその子つて学校でいじめられてたらしくて、それ聞いた時はホントびっくりしてさ、カウンセラー目指してんのつて聞いちゃつたよ」

そういうえば、廉はネットでいじめとかがどういう風に起こつてゐるのかを調べていたんだつけ？廉は調べるだけではなくて、なんとか解決しようとも試みていたのだ。それこそ、廉が目指している世界のために。

そう考えると、廉をとても誇らしく思えた。

「だから、廉君が拳銃で自殺したつて事をニュースで見た時は、すつごくショックだつた。あんなにあたしを助けてくれた人が、あんな風に逝つてしまふなんてさ。あたしは彼から貰うばかりで何も返してあげられなかつたんだ。それが、すつごく悔しかつた」

「・・・本当に、逝つちまつたんだよなあ」

魁人がポツリと言つうと、五人とも黙つてしまつてしんみりした空気が流れる、しかし、そつと長くない時間で、？が耐え切れなくなつたように両手を振つた。

「あー、ごめん！変な空氣になつちゃつたね。話、続けてくれるかな」

？がそう言つので、私は少しわざとらしく咳払いの真似をして話

し始める、

「廉から話を聞いてるつて」とは、ローラ・ゼロが核融合炉の元となつた空間に飛び込んだことで核融合炉が作られたつていうことは知つてゐるわね？廉は、その話を核融合炉の研究の第一人者、レオン・ゼロがネット上にアップしてしたのを見て知つたのよ。その話を元に、私は核融合炉の空間で直接ローラ・ゼロの記憶を探つたわ。

内容を要約すると、ローラ・ゼロにはマリアムっていう妹がいて、その妹がね、飛行機のハイジャック事件で犠牲になつてしまつたの。しかも、飛行機が突つ込んだ先にはちょうど核融合炉の元になつた空間があつて、それが衝突の衝撃で空間が開いて、飛行機ごと乗客を呑みこんでしまつた。

その時にその乗客の親戚とか親しい人々が、同時に彼らの『声』を聞いたのよ。当然、マリアムの声もローラに届いていた。それから、ローラは核融合炉の空間が人の意思を反映させる機能を持つているつて考え始めたのよ。

そうして、ローラは核融合炉の元となつた空間に飛び込むことを決意した。そして、彼女は飛び込む瞬間、二つの事を願つていたわ。一つは、核融合炉を作ることに成功したら、だれも核融合炉の空間内に入らせるなくすること。二つ目は、自分が失敗してしまつたら、この世界を壊してしまう事よ。

前者は、核融合炉の空間に消えたマリアムと一人だけで会いたいという願望。後者は、マリアムを殺してしまつた世界に復讐するため、そして、自らの危険を顧みないのはマリアムが死んだ世界に絶望していたから、彼女はその様に願つた。

だから、核融合炉は融解を起こしていいのだと思う。核融合炉を繋ぎとめていた彼女の意思是もうすぐ消えてしまうのよ。そうなつたら、核融合炉はローラが失敗したとみなすわ。そして核融合炉は彼女の願いを叶える。核融合炉の膨大なエネルギーならば、世界を滅ぼすなんて造作も無いことだわ。

でも本来なら、ローラの意思 자체が消えてしまうのだからその瞬

間、核融合炉も存在できなくなってしまう。だから、融解を起こしても完全に消えてしまうのなら問題は無かつた。でもね・・・

私は、ちらりと魁人の方を見る。

「三年前、私が記憶を無くしたあの日に、私が核融合炉と繋がってしまったことで、安心できない状態になってしまったわ。あの時、核融合炉に私が干渉してしまったの。

失つてしまつた誰かと会いたいっていう想いと、その人がいない世界に絶望して、自分を消し去つてしまいたいっていう想いを、核融合炉はローラの意思と間違えて拾つてしまつたのよ。

その結果、私はローラ・ゼロの代わりに核融合炉の存在を継ぐになつてしまつた。だから、私が消えない限り核融合炉の融解を止めることは出来ない。で、今の私は死ぬことが出来ないから、ローラ・ゼロの意識が完全に消えて、核融合炉が完全に融解したときにあの空間に飛び込むしかない・・・っていうのが今の状況ね」

私が話し終えると、しばらく沈黙が流れる。しかしそれも長くは続かず、魁人が微笑を洩らしたことで沈黙は途絶えた。

「で、だ。話はそれで全部か？」

「え？」

魁人のいきなりな疑問に私はまともに反応できなかつた。

「その話だけだとよ、何の解決方法も浮かばねえ。それじゃあ俺達が来た意味が無いつてもんだ。それにもつと聞きたいことがある、そうだよな？」

魁人が言つと、瑠香と？が同時に頷く。

「そうね、凛が記憶を無くしたときにどうして廉の口調になつてたのかとか、そもそも凛が記憶を無くした理由が知りたいかな」

「あたしも廉君がどんな人だつたのかもつと知りたいよ」

私はそんな魁人達の態度に面食らつてしまつた。あと十時間ぐらいで人類が確実に滅んでしまうということを聞いても全く動搖もせず、逆にもつとそのことを知りたいと言つのだ。

「凛・・・」

画面越しに美玖が心配そうに私を見る。どうやら美玖は、瑠香達が聞いた内容が私にとって辛いものであることを危惧しているようだ。実際、私も話すのは気が引けるけど、瑠香達のそんな態度に躊躇いはどこかに飛んで行ってしまった。

「分かつたわ。じゃあまずは、瑠香が言つてた私があの時どうして記憶を失つたのかつて事を話すわ」

と、説明することにしたのは良かったのだけれど、今更になつて私自身もよく事態を把握しきれていないことに気付く。記憶を無くしていた時の事を思い出そうとするけれど、それはどこか自分のことでは無く、寝ながら映画か何かを見ていたような感じで、細部まで思い出すことは出来ない。

「ごめん、魁人。私、記憶を無くしていた時の事をよく思い出せない。ちょっとあの時の事を説明してくれる？」

私がそう言うと、魁人が意外そうな顔をする。

「覚えていないのか？あの時お前の元々の性格も消えてはいなかつたから、人格が入れ替わるとかそういう感じでは無かつたのにな。

確かに、お前が聖域の前で急に倒れて俺が凛の名前を呼んでいたら、目を覚ました時に凛つて誰つて言いやがったんだ。それで俺が無理やり精神科の病院に連れて行つて、検査を受けさせた。で、それから家に帰らせたな」

うん、そこまでは覚えている。それから私は家に帰つて、自分の部屋にあるものを物色して、それから・・・。「君」の首を絞める夢を見た・・・いや、違うな・・・。

そうだ、あの時私が夢の中で見ていたのは、少女の顔では無く、高校生の私の顔だった。そのことを思い出して、私は完全に思い違いをしていたことに気が付く。

廉のイメージだけの人格で「僕」が過ごしていた時、「私」は核融合炉の空間にいたのだ。つまりあの時私は記憶を失つていたのは無く、人格自体が別のものと入れ替わっていたのだ。

今、核融合炉の空間にいる「僕」も私を通してこの世界を見ている

ようだから、人格を入れ替わっていた時の記憶に主体性が無く、曖昧なのはそのせいだろう。どうやらあの一年間、私の意識はひどく薄い状態のようだつたから。

「あ～。凛？ 考えはまとまつた？」

？の気の抜けたような言葉に、私ははつとした。どうやら結構な時間、考え込んでしまつたらしい。

「うん、なんとかね・・・。結論から言うと、あの時の私は人格自体が入れ替わっていたつて事。核融合炉が私の想いを拾つた時点で、私は仮想人格を一つ作つていた。それがあの時の一人称が『僕』だつた私ね。

核融合炉は、廉に会いたいつていう私の願いを、私自身が廉の疑似人格を持つことで処理した。だから、あの時の私は廉と同じような口調で、性格の私のままだつた。同時に、私の人格を核融合炉の空間内に閉じ込めることで私を消し去つたのよ。

だけど、他でもないあの時の私が記憶を取り戻すことを望んで、核融合炉の空間に入ったことで状況は変わつたわ

「はいはーい！質問！」

突然、？が手を上げて話に割り込んできたので、思わず私は？を怪訝な目つきで見つめてしまった。

「核融合炉が融解してた原因を知つた時とか、今の話の中で核融合炉の空間に入るつて言つたけど、凛はどうやって核融合炉の空間に入るの？」

「えーと、それは・・・」

そういえば美玖以外には核融合炉の空間にどうやって入るか見せたことが無かつた。絶対驚かれるだらうなと思いつつ話す。

「そこから飛び降りるの

私がベランダを指さして言つと、案の定、？が唖然とした顔になる。

「今は核融合炉の空間の核になつてゐるつて知つてゐるから飛び降りる必要はないけど、私を傷つける物は核融合炉の空間に飛んで行つて

しまう事を利用したの。

小さいものならそれが出来るんだけど、私自身が原因で危ないときには、核融合炉の空間に自動で避難しちゃうみないなのよね」

私が捕捉をすると、魁人が呆れたようにため息を吐いた。

「全くお前は、危険を顧みないというかなんと言つか・・・」

そんな魁人の言葉に私は大仰に肩をすくめ、話を続けた。  
「本来なら元々の私の人格と疑似人格が一つになつて、疑似人格の方は消えるはずだったみたいなんだけど、なにせあの時の私は廉の疑似人格だったから、私の方から消したくないって思つてしまつたのよね。その結果、あの時の私の人格は今、核融合炉の空間に独立して存在しているわ」

「へえ、つてことは今でもその子と会話できるんだ。自分と会話するつてなんか面白そうだね」

？が感心したように言うと、瑠香が難しい表情をする。

「それにしても、核融合炉って何でもありね。人の想いを拾つてそこまでしちゃうなんて。しかも今では私達の生活に無くてはならないものだけど、それがこの世界を滅ぼそうとしているのよね・・・」

「そうね、私も、核融合炉の空間のことがよく分からぬわ。あそこにいる子だつて、元々は私の一部だつたのに、今では何を考えているかさつぱり分からぬわ」

瑠香の言葉に、私も同意する。

と、流石に私も魁人達の態度を不審に思い始める。それぞれ話している話題はかなり強いショックを受けても無理のないものだ。しかし、魁人達はまるでそれを予知していたかのように平然としている。

「そういうえばさ、皆どうして私を助けに来た訳？普通は様子を見に来るとかそんな感じだと思うんだけど」

私がそう言うと、？がしまつたという様に舌を出す。

「あーあ。美玖。ばれちゃつたよ・・・」

「え？」

私は困惑して、画面に映つている美玖を凝視する。美玖は後ろめたそうに視線を逸らしている。

「実は、午前中に美玖から電話があつてな。凛を助けて欲しいって言わたんだ。その時に大まかな説明を受けて、凛が一晩連絡が着かなくなっていることも聞いたんだ。それで瑠香と？と連絡を取り合つて、ここに来たつて訳だ」

魁人が説明をする。

「入つて来た時のあれ、嘘だつたのね・・・」

「ああ、美玖からはそういうことにしといてくれつて言われてたからな。ともかくお前を安心させることにするにはああやつた方が良かったたつてことだ」

「美玖・・・」

私が咳くと、美玖が申し訳なさそうに目を伏せる。

「ありがとう」

そして私がはつきりと言つと、美玖は驚いた表情を見せる。相変わらず分かりやすい性格だ。

「皆に会うことが出来たのは、あなたのおかげよ。あのままじゃ、私はたつた一人で事を抱え込んだままこの世界から消えることになつてたでしうね」

「凛・・・よかつた」

見ると、美玖は目に涙を浮かべていた。そんな美玖の反応に私は思わず苦笑してしまう。

「それじゃ、会議を続けるか」

魁人が言つと、その場にいる全員が頷いた。

それから、私達は誰も犠牲とせず、核融合炉の融解を止める方法を模索した。しかし、良い方法は一向に見つからず、誰もが焦りを見せ始めていた。

「ローラ・ゼロの意思が完全に消えるまで凛が核融合炉を制御できないっていうのがもどかしいなあ。どーしてそんなに執念深いの？」  
「それだけ彼女の意思が強かつたって事だと思つ。凛だつて彼女の意思に逆らつてできたのは一瞬だけエネルギーを外部に放出する」とぐらいだつたし」

？が少し投げやりに質問すると、美玖が丁寧に説明する。

「それだ、ある程度の強い意志だつたらローラ・ゼロの意思に逆らえるんだろ？ それで何とかならないのか？」

魁人が説明に食いつき、私の方を向く。

「うーん・・・。それなんかいけそうなんだけどな・・・。核融合炉の空間を掌握しているのは私なんだけど、空間の要になつてている核融合炉はローラ・ゼロの支配下にあるつてことが障害になつてゐよ。だから美玖が言つてたみたいに一瞬だけ核融合炉を掌握することはできても、持続的に支配することは出来ないし、今じゃ核融合炉に近づくことさえできないのよね」

「外側からでも、内側からでも無理・・・か。まいつたな」

妙案だと思つたのだろう。魁人が顔をひどくしかめながら頭を搔いた。しかし魁人の言つたことは本當で、私が核融合炉に飛び込む以外、打つ手を見つけることは出来なかつた。

そう思つて私が諦めかけた時、美玖が意見を出した。

「今思つたんだけど、ローラ・ゼロの意識が消える瞬間なら、凛は完全に核融合炉を掌握できるんじやないかしら？ ローラ・ゼロだつて核融合炉の空間に飛び込む瞬間に自らの意思で核融合炉を作つたのだから、凛だつて何か自分の願いを核融合炉に聞かせることができるはず・・・」

そういうえばあの少女もそんなことを言つていた。あの時私はひどく混乱していたからよく考えなかつたけど、改めて考えてみると・・・なるほど上手く使えば何かできそうだ。

「でも私、何を望めば・・・」

「それを今から考えればいいだろ」

私が咳くと魁人が呆れたように言つた。

しかし美玖の挙げた案には問題があった。それは、ローラ・ゼロの意思が消える瞬間という非常に短い時間で事を成さなければならぬという事だつた。

ローラ・ゼロがやつたように核融合炉に飛び込みながら願えば確実だけど、それだと核融合炉に聞かることのできる願いは一つだけだ。

それでは人類と私、どっちも救うのは難しい。

「死ぬ前に一つだけ願うだなんて、なんだかとつてもドラマチック。・・・

「こり、お前が死なない方法を探すんだる」

私がぽつりと言つと、魁人に叱られた。

「うん、まあそなうなんだけど。願うことができるのが一つだけだしね。やつぱり廉が望んだ世界を実現させたいかな」

私がそう言つと、魁人はため息を吐き、瑠香は微笑を洩らした。

「ほんと、凛はブラコンよね・・・。人格が変わった時だつて、わざわざ廉の人格になつていたもの」

そう言われると反論ができないのだけれど、ブラコンなんて言われ方をしたせいで、私は頬を赤らめた。

「それは・・・あれだよ、双子だつたからよ・・・」

「あら、双子だからって仲がいいとは限らないのよ?」

流石は瑠香お姉さまである。またしても反論できない私はぐつと口をつぐんでから苦し紛れに話を逸らす。

「そんな事を言つんだつたら、美玖だつて廉の事を恋い慕つていたじゃない」

そう言つと、今度は美玖が顔を赤らめ、?が反応する。

「り、凛つ」

「え、そなの!詳しく聞かせてよ!」

?が露骨に反応したので、私は生前の廉がどのような人だつたのか。そして、私達が廉とどんなふうに関わつていたのかを搔い揃ん

で話した。

その過程で廉が死んでしまった時の事も話さなければならなくな  
り、戸惑いながら説明した。

「なるほど。あれほど廉の事に執着したのはそんなことがあつたせ  
いだつたのね・・・」

「でも、廉君がいたから今の凜があるつていう事なんだ。なんだか  
皮肉・・・」

瑠香と?がそう感想を述べる。

「確かに、そうかもしないわね。結局、私は過去に縛られてばつ  
かりだわ」

私が自嘲気味に言つと、美玖が反論した。

「そんなことない。凜は今まで皆を助けようつて頑張つてきたじや  
ない。それに、核融合炉の事をここまで解明できたのは、あなたの  
おかげよ。

今だつて、こつやつて皆で解決策を探しているじゃない。それつ  
て未来に向かつてゐつて胸を張つて言えることよ」

「未来・・・か」

私はぽつりと呟くと、皆頷いた。私はなんだか恥ずかしくなつ  
て、場違いな質問をしてしまう。

「そういえば、夢つてある?」

しかし皆それを真に受けて、それぞれ近況を教えてくれた。

魁人は大学に通いつつバンドで活動しているようだ。本格的にア  
ーティストとして活動するかは悩ましいところだけど、腕はなかなか  
かのものらしい。たまに大会で優勝するのだと自慢していた。

瑠香は哲学系の学科のある大学に通つていて、なんでも廉の言つ  
ていたことが哲学的にどうなのかを検証してみたいらしく、日々勉  
強に明け暮れているようだ。

?はすでに働いていて、それなりに稼いでいるようだ。核融合炉  
が無くなるかも知れないから、今の会社辞めとこうかなと苦笑しな  
がら言つていた。

美玖は言わずもがなで、皆それぞれ、大人への道を歩んで行つて  
いた。私だけが取り残されてしまつたような気がして、少し寂しか  
つた。

けれど、それではつきりした。私の夢は、私の願いは……。

「私、決めた」

そう言つて私が立ち上がると、皆に注目される。

「核融合炉が世界を滅ぼしてしまうなんてこと、絶対にさせない。  
何に替えても皆を守つて見せる。それで……」

深呼吸をして、この想いが私の本当の想いだと確認する。

「廉の望んだ世界を実現してみせる」

少し間があつてから、美玖が不安そうに声を上げる。

「でもそれじゃあ、凜は……」

美玖が言おうとした事を魁人が遮る。

「一つ確認させてくれ、お前はそれを核融合炉に願う気が？」

「そう、それなら私は心の底から願うことができる……はず」

私がそう答えると、魁人は満足したように頷いた。

「お前にしちゃ、いい答えじゃねえか。そう望めば全てが上手いく  
くかもな」

「確かに、それならいろんなことが詰め込めるわね……。それに  
廉はあなたに生きて欲しいって望んでいたものね」

魁人に続き、瑠香も賛同する。

「それじゃあ、反論はなし」

私が言つと、皆が頷いた。

「んじゃ、そろそろ出発しまじょうかね」

「おう！人類を滅ぼそんなんて考えたやつが作ったものなんてぶち  
壊しちまいな！」

「私達ができることはこれまでだけど、頑張つて頂戴！」

「廉君が望んだ世界だもんね、あたしはきっと成功すると信じてる  
よ！」

魁人、瑠香、？がそれぞれ励ましてくれた。

未だ不安げな表情の美玖に、私は苦笑しつつ話しかける。

「前にも言つたけど、あなたのおかげで私は皆に会つことができて、ほんとによかったと思つてゐる。だから、絶対にこれを無駄にしない」

「凛・・・頑張つてね」

見ると、またしても美玖は目に涙を浮かべていた。それでも無理やり笑顔を作ろうと奮闘する姿に、私はとても勇氣づけられた。

「それじゃ、行つてくるわね！」

私はそう言つて、空間転移を使って部屋を後にしてしまった。

世界に対して要求する。それは、私だけでなく、たくさんの人々が行つてゐる。

たとえそれがそんな状況でも、どんな時代でも。願いは、どこにだつて存在していた。

## 十一、要求（後書き）

書き始めた当初は八話で終わる予定でしたが、伸びに伸びて十一話まで来てしました。ですがついに次回が最終話です。なので十一話はこれまでのおさらい的な内容と最終話に向けての発射台になっています。

第一話でネルは出ていましたが私の力量不足で一言しかセリフがないという完全な脇役になってしましました。

しかし今廉の新たな側面を語るためのキャラとして大いに活躍してくれたので、私としてはうれしいかぎりです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8318u/>

---

炉心融解 -the another melt down-

2011年12月27日19時52分発行